
影姫の暴走奇譚

綴何

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

影姫の暴走奇譚

【Nコード】

N3099N

【作者名】

綴何

【あらすじ】

アースグランド国の中でも有名で権力持ちの貴族の家に産まれたマリアンジェラであったが、王様の奥様が浮気で産んでしまった子を兄と持ったため、目立つことができず、つけられたあだ名は『影姫』

いつしか笑うことができなくなった少女だったが、好きな人がいればそれでいいと思っていた次の瞬間ふられました。

■・■・■・■・■

好きな人にはふられ

義兄様には驚きの発言をされ
敵国との戦争に巻き込まれ
変な人には好かれの影姫の暴走奇譚お楽しみに

序章

コレは私が生まれる少し前の出来事、わが国アースグランド王国の王様には二人の高貴なる姉妹を妻にと召し上げられました。それは仲睦ましく、姉であられるマーサ正妃様は三人の姫様を産みました。

妹のネルシオラ様には残念ながら御子が孕む事はなかったのですが、それはコレといった問題ではありませんでした。

子を孕むまでは・・

わが国アースグランドは別名『人の国』と呼ばれるほど、人に溢れており活発で温厚な国でしたが、魔法使いの集う『魔の国』と呼ばれる、ウェザーミステル王国とは犬猿の仲で・・頻繁に戦争をしていました。

それは置いといて、少し戻ってネルシオラ様が身籠った御子は元気な男の子で無事産まれ、私の家でもあるアースグランの貴族の中で一番権力を持つジェンド大公に養子として差し出されました。

なぜ王族で、しかも男の居られない王様がわが父に養子として下げ渡したかというと・・

ウェザーミステル国王エリオルという王様が、いつの間にかわが国に不法侵入して・・あるうことかネルシオラ様に手を出したらいいのです。それから身籠ったという事は・・

あらまー・・思いきった王様ですこと

まあ、そういうことで義兄様は私とは違う扱いを受け、実の親の代わりに私の親の愛情を私よりも受けて育ちました、教育だって私と違いスペシャルなものを用意されて・・私は生まれた頃から孤独だった。

気がついたら・・私は、『影姫』と呼ばれるようになった。私は別にそれでも良かった。アナタさえ居てくれるなら・・。

それで、良かったのに・・

第一章

「ミケーレ」

お父様が今日も義兄様の名前を呼ぶ。

「ミケーレ」

お母様も、義兄様の名前を呼ぶ。ミケーレ、ミケーレ・・まるでもう語尾がミケーレ。あ、それはそれで面白いものかもしれない。・面白くないか

とりあえず、この家では、誰も私の名など呼ぶものは居ない。・・彼を除いては

「お嬢様」

ノックの音が響いたが、私には聞こえていない

部屋で鏡の向こうの無表情な少女の顔を、かれこれ一時間は見つめていたけど、彼女はニコリとも微笑まない、それはそうだ、向こう側に居る少女は私なのだから。しみじみ思う、無愛想

「おはようございます、お嬢様」

内側にまともろうとする髪の毛も、光に反射するブロンドも、こうしてみると小顔効果があって、中々よろしいのでは？と、思ったり母親にも父親にも似なかったこの顔立ちは、お婆様の若かりしころそっくりだとか・・綺麗だったとかいわれても、お婆様に似てると言われたら・・正直微妙

「マリアンジェラ」

そっと鏡の上に布を被せられて、初めて名前を呼ばれたことに気がついた。

「シーヴァー？」

硬そうな仮面で顔の上半分を隠した、カチツとした執事シーヴァー・・噂によれば王様がシーヴァーとインファをミケーレ義兄様をこの家の養子に出すときに、一緒にやってこさせた聞いた。

「鏡ばかり見つめていては何も見えませんよ」

「見えた。つまらなくて何も無い少女が」

「マリアンジェラ」

二人きりのときだけ、シーヴァーは優しくて重い声で私の名を呼んでくれる。シーヴァーはパッと見は怖いけど、私はダイスキだ。彼が居れば、他は何もいらぬ。そう思えるほど・・

こんこん

扉のノック音が聞こえた。返事をする女官長を務めているインファだった。赤い髪を束ねたお団子はいつも膨らんでいる。

「お嬢様、奥様が御呼びですよ。あら？いたのシーヴァー」

「いつものご挨拶だインファ、ではお嬢様私はコレで」

手の甲にキスを落とすと早足に歩いていった。

「あら、私ったら忘れていたわ。失礼しましたお嬢様。おはようございます」

「おはよう」

挨拶を早々に済まし、立ち上がると、部屋を出て居間のほうへと移動した。

居間にはミケーレやお父様もお母様もいた。なにやら深刻そうな顔をしていつもの落ち着きが無かった。一体何があったのだろう。

「おはようございます。お父様、義兄様、お母様・・で？どうかした？」

「ああ、今はアナタの言葉遣いを注意している暇は無いわ。よく聞きなさいマリ」

「？」

「ミケーレが、ウェザーミステルに奪われてしまうの」

「・・ええ?!」

わざと驚いたように両手を挙げてみたら、怒られた。はいはい、ゴメンナサイ

「でも、奪われてしまうってどうゆうこと？」

「アナタもご存知のとおり、ミケーレは王族の血を此方のも向こうのも継いでいるでしょう」

「そうね」

「ウェザーミステルの国王に子が無いため、ミケーレをよこせなんていいだしたのだ。全くなんて勝手な国なんだ」

「本当に！」

憤慨している両親ではなく、マリはちらっと兄のほうを見た。いつものようにくらい表情で何かを考え込んでいた。そんな表情も王族の血を引いているだけあって綺麗な顔立ち・他の貴族の女性の誰もが目をつけているのも頷ける。

「義兄様」

「あっ・・・ああ、なにかな？」

ぼうっとしていたらしく、一瞬だけ焦ったように見えた。この人は昔から何かを必至に隠している。たまにいいたそうに口を動かすが、両親のマシンガントークに勝てずいつも下を向いていた。甘やかされすぎて引っ込み思案なのが兄の悪い所だと思うわ。・・・どうでもいいけど

「義兄様はどう思っているの？」

「ボクは、・・・ボクはそうだね。皆に任せるよ」

「・・・」

神経衰弱。そこでニコリと微笑む意味が分からないわ

「何か悩みでもあるのですか？」

「え？あ、あるわけ無いじゃないか！こんなに幸せな家庭何処にもないよ？えーっと、両親もホントいつも元気で明るくて優しくて・・・ええっと妹の君も顔の表情変わらなくて素敵だしね！」

「・・・素敵な厭味ありがとう」

「ええ！？あ！あのそうじゃなくて、いやあのあうあう」

付き合っていられない。無神経な兄に兄馬鹿の両親・・・召使ですら私に見向きもしない・・・わかってるわ、愛想のない少女よりかは、少々お馬鹿っぽい兄のほうがいいのでしょうよ。

・・・覚えておれよ

「はあ」

わかってるなら、少しは笑えばいいのに。

あれから部屋に帰り、鏡の前で変顔を試みる、・・・うわー不細工・・・あーでもこうしてみたら・・・おお、誰？コレはなんだろう馬鹿っぽい

「・・・お嬢様？」

「は！！！！」

見られた。

「お部屋の扉が開けっ放しでしたので・・・すみません」

「笑いたければ笑えばいいと思うわインファ。私も自分で酷い顔だと思ったから」

笑いはしなかったけれどね。許可したらインファは倒れこんだ。よほど面白かったらしい。涙目になって声も出ないほど大笑いをしていた。・・・許可したの私だけど、ちょっと失礼じゃない？

「はーはーはー」

息もできないほど笑ったのか

「こほん、お嬢様お隣よろしいですか？」

「どうぞ」

鏡に布をかけて横を向けば同じく椅子に座ったインファがにこりと微笑んだ。

「お嬢様はもう少し表情を柔らかくすれば、宮中に住んでいるどんな娘よりも、失礼なことを言うならお姫様方よりも美しいのですから、もう少し素直になってはいかが？」

王族の姫様を直で会ったことも見たこともないけれど、インファは昔王宮で働いていたことも、たまに王宮に上がっているという噂も聞いたことがある。私を慰めるための嘘でなければ本当かもしれない。

「私は綺麗でも、綺麗でなくとも、どちらでもいい」

「お嬢様、それはシーヴァーのタメですか？」

顔が真っ赤になっていくのがすぐに分かった。

「なんで？」

インファは優しく微笑んだ。

「たまに、私でさえあまり見ることにない笑みを、シーヴァーの前で浮かべているのを何度か見かけたことがありましたから」

「あれは、シーヴァー が笑わせてくるから・・・」

「お嬢様はどんな人が来ても笑わなかったじゃないですか。楽芸団も吟遊詩人の話も旦那様のギャグも」

「だって面白くないんだもん、特に最後の」

お父様はユーモアが無いとおもう。だってオカンに悪寒がはしったとか言ってお婆様に本気で殴られてたもの。ああ、殴られるのを見たのは少し面白かったかも？あの時は本気で空気固まったから分からなかったけれど。

「お嬢様、もしお嬢様がシーヴァーが好きだというのなら諦めてくださいませ」

「・・・」

「シーヴァーも恐らく望んでいませんし、私も望みません」

「・・・」

「それに、もしミケーレ様が隣国に移動なさるとしたら、私達もお供しなければなりませんし・・・そうになったらお別れですわ」

「うぶう・・・」

「？」

我慢してたけど、涙が目から溢れでそうになった。

「ううううー！！」

口を押さえて立ち上がると部屋を飛び出した。

「おっと、・・・お嬢様？」

「ぞば！・・・ううううぶふう・・・！ううううううううー！！」

声を出したから余計感情の制御ができなくなった、逃げ出すように私は屋敷の外へと飛んでいった。

「・・・ぞば？」

「あら、シーヴァー ！お嬢様見なかった？」

「口を押さえて泣きそうな顔で走っていったぞ。インファ」

第二章

「うぶぶぶーううう」

泣き声を口を塞ぐハンカチによって阻止された。

「なーくなー！ マリーお前いつつも泣くときだけココ来るな！」

「ステラーあんたのぶんやっというてあげるから・・・その泣き声黙らせといて」

「ちよ、ケリー！ あーもう・・・泣くなって！」

ステラは幾分は綺麗なタオルを取るとマリアンジェラの手をひいて川に連れて行くことにした。大きな貴族の家を少し出れば農民の家がある、その農民の娘であるステラとマリーは特別仲が良かった。それは多分、ステラの世話好きの性格がマリーを懐かせたのだから。

「で、今回は何で泣いてるんだ？ あれか？ お婆様に皮肉言われたのか？ お母様に怒られたか？ それとも女官に無視されたか？」

「よけい泣けてきた」

川の近くにある畑仕事をはじめたステラをみてマリも泣くのを止めてクワをもって耕すのを手伝い始めた。

「いーよ毎回毎回泣きながら畑仕事手伝うなよー怖いだろー」

「うぶう」

「お前の泣き方毎回思うけど変！・・・いい年で泣くなよ・・・何歳だっけ？」

「・・・13」

「あたしが13ころは泣いてないぞ！」

「ステラは何歳？」

「16だ」

そこで黙るな。

いくらか泣くのを落ち着いたマリを見たステラがマリーの頭を撫で

た。

「・・・で？どうした」

「インファが・・・」

「女官か？」

コクリと頷いた。

「シーヴァーを好きにならないほうがいいって・・・シーヴァーも、望んでないって」

「へー・・・身分違いってヤツか？」

「分からない・・・でも、それでも良かった・・・ただ・・・私が嫌なのは」

また泣き出しそうな顔をしたのでステラはクワを置いてタオルを常備した。

「傍にいてくれるだけで、よかった・・・」

ぶわっと涙が溢れる。

「居なくなるなんて聞いてないー！」

ステラは急いでタオルを渡した。

「お前本当泣き虫だよな・・・てか泣くときにいつもココ来るなよー」

「ごめん」

本当は迷惑だといいたいが、少女があまりにもデリケートなことを知っているため中々いえない良い人なステラさん。

「あ、ほら」

グギッと頭を掴んで曲げられる。・・・痛い

「！」

小丘の上でこちらに向かって小走りやってきたのはシーヴァーだった。

「お嬢様、やはりこちらでしたか・・・インファが心配しています。お戻りください」

いやと断る間も与えずシーヴァーはマリをお姫様だっこした。それをみてステラはマリの頭を撫でた。「もう来るなよ」

「うつぶふう」

「その泣き方はもういいから！それにな、マリ」
「？」

ステラは小さい声でマリにだけ聞こえるように囁いた。

「言うのは自由だ。たとえ実らなくとも言うだけ言っとけ」

マリは小さく頷いた。

館に帰るとお風呂の用意がされており、出た後は部屋でインファが髪の毛を梳いてくれた。

「お嬢様、過ぎた言葉お許してください」

「許す・・・」

「・・・お嬢様」

「うん？」

インファの手が震えだした。

「・・・お嬢様の泣き方・・・大変・・・か、かわいらしゅうございますね」

「・・・笑って良い」

「失礼します」

インファは逃げるように去っていった。あの様子だと、大爆笑するようだ。インファは大変な笑い上戸だ。そしてインファと入れ替わるようにシーヴァーが入ってきた。

「失礼します」

櫛を手にとると髪を梳き始めた。

「・・・」

シーヴァーは何も言わない。私も何も言わない。

沈黙だけがその場を支配した。

「お嬢様」

「？」

伏せていた顔を上げると、いつの間にかシーヴァーの顔が目の前にあった。顔といっても仮面だから眼が合っているのかすら良く分からない。

「インファに何を言われたのですか？」

「・・・」

「私には言いにくいですか」

「・・・」

下を向いていると顔を上げられた。

「マリアンジェラ」

名前・・・ズルい・・・。

「此方を向いて、さあ」

顔を上げる。うう泣きそう

「・・・一人でも平気なようにお強くなりなさい。私はもうすぐ・・・」

「義兄様がウエザーミステルに行かなければ、シーヴァーも行く必要は無いでしょ?!」

シーヴァーが驚いた顔をした。

「行かないで! シーヴァー・・・私はシーヴァーが」

口を手のひらで軽く押さえられる。シーヴァーのお気に入りのお香りの香りが手袋にしみこんでいて、むせそうな匂いの濃さで頭がくらした。

「・・・お嬢様」

「!」

「私とインファは・・・お嬢様のものでもなく、旦那様や奥様のものでもなく、ミケーレ様のものなのです」

それは、丁寧でいて、率直な・・・拒絶だった。

「・・・最期まで言わせてもくれないのか」

涙が頬を伝う。う・・・もう・・・駄目

ぐい

「!」

再び走り出す前に腕をつかまれ包むように抱きしめられた。

「もうすぐミケーレ様が王宮に上がられます、そのとき私もインファもついていきます」

「王宮・・・」

「お別れです、お嬢様・・・」

胸がズキッと痛んだ。胸の痛みって一瞬だけかと思っていたのに・ズキズキと痛み続ける。声の出ない涙だけが溢れる。

シーヴァーは身体を離すとそのまま頭を下げて去っていった。

私はその場で崩れるしかなかった・・・。

「居てくれるだけで・・・よかったのに」

第二章（後書き）

農民の娘だけど村の中ではまだ上のほうのステラさん一家。

ちなみに家族構成は父・母・爺・姉・自分・妹・弟・弟・妹・弟の
七人兄妹。

貧乏でもないけど裕福でもない。

第三章

(だーかーらー!! なんつでウチンとこ来るんだお前は!!)

って言いたいけどあきらか消沈しているマリに何もいえない良い人なステラさん。

「おい、大丈夫か?」

「・・・」

人の(ステラ)のただでさえ狭い部屋を占拠して干したばかりの布団の上で横になったままピクリとも動かなかった。あまりにも動かないのでだんだん本気で心配になってきたステラ

「大丈夫か本気で、生きてる?」

「・・・ステラ」

「うん?」

マリは起き上がると今まで以上の・・・いやまるで仮面をつけているような表情でステラを見た。

「今までありがとう」

「え? え? え? え?」

そのまま歩いて帰っていくマリをステラは追いかけた。

「お前、まさか失恋のショックで死ぬつもりじゃないだろうな! ?」

「ううん・・・もう、本当いいんだ」

やっと捕まえて振り向かせる。

「たった一回の失恋じゃないか! そこまで気を落とすこと無いだろう」

マリは首を横にフツタ。

「別に気を落としてるわけじゃないの、ただだいたい精神的ダメージが酷くて・・・表情が変わらないだけ」

「病氣だソレ!!!」

「大丈夫、いつものことだから・・・心配しないで」

(やばすぎる)

ヨロヨロと歩いていったマリの背中を見守りながらステラは拳を握った。

スゴイ心配だ！

どうせ私は『影姫』・・だれも私目を向けない。そういうふうにも周りもそう思ってきた。

思ってきたから！

「もう、どうでもいい」

人は壊れたときなんでもできるらしい。

「お父様お母様、私宮中に上がりたいんですが」

「は？」

いつも人の話を聞かず自分の意見ばかり押ししていく両親も、先手を打たれ何もいえなくなった。

「ミケーレ義兄様の手助けになればとおもいまして・・」

「まあ、素敵なことね」

「そうだな、宮中で働いた女性は婿の貰い手も良いしな」

両親も納得し、コネやツテをふる活用してマリは宮中に上がった。すぐに会えるというわけでもなく、まず一年は指導を受ける事となった・・厳しいものもあったけど、マリは泣くことも無く無事研修を終えた。

「・・・」

マリは同室になった少女をチラ見した。

「んだこら」

「・・ステラ農業良いの？」

あがろうと決めたマリの目の前に現れたステラは自分も連れて行って欲しいと言い出した。両親はステラの両親を良くしっていたし、野菜をそこでよく買っていたから快くでは無いにしろ、了承してだしてくれた。

「お前が心配だからな！見ていてやる」

「ありがとう」

「ほんっとお前ってすごいよな」

ステラはカーテンを閉めながらマリを見た。

「目力だけで酔っ払い兵士を威圧してしまうんだから」

「・・・腕っ節はステラのほうが強いけどね」

「あつたりまえだろ！」

明日からはさっそく配置につかされる。ステラとマリはミケーレ親衛隊になることができた。

「お前平気なのか」

「うん」

シーヴァー・・・うぶう・・・う、コホン

「さあ明日に備えて寝よ」

「くがー」

「早！！」

第四章

「シーヴァー聞いてくれ！うわ！あ！ったあ！！」

「ミケーレ様いかがなさいました？シーヴァーなら先ほど出かけましたよ？」

急いで走ってきたミケーレは躓いてコケタが、けっこう日常茶飯事なのでインファは今更心配したりはしない。

「インファ！聞いてくれ！実はね妹が侍女として宮殿に来ているんだ」

「まあ！・・・良かったですね」

お嬢様が？・・・かなり消沈なさっておいでだったからご病気にでもならないかと心配していたけど・・・お元氣そうで良かったわ、それに何よりもそのことによってミケーレ様が少しでも明るくなられた・・・」

「インファ？」

でも、まさか・・・

「ミケーレ様・・・そのことはシーヴァーには内緒にしましょう」

「え？どうして？マリはシーヴァーに凄く懐いていて二人とも仲が良かったじゃない」

「どうしてもです」

「う・・・（顔がスゴイ笑顔なのに凄く怖い）わ、分かったよ」

・・・知られてはならない。お嬢様になんのお考えがあるのかは分かりませんが、シーヴァーには決して知らせてはならない・・・。

「おや？ミケーレ様そのようにお洋服を埃だらけにして、どうかなさいましたか？」

「あ、シーヴァーなんでもないよ」

脅しに弱いミケーレは起き上がると服についた埃を払ってのけた。

「ミケーレ様・・・いいえ？お兄様と呼ぶべきかしら？」

「それともミケーレと呼ぶべきかしら？」

同じ声が同じ音程で響く、ミケーレが汗を流しながら見上げると、そこには綺麗な洋服で着飾られた人形のようなそっくりな顔立ちの二人の娘が居た。

インファとシーヴァーは頭を下げた。

「ジュリエ姫にシュリア姫」

「あら？姉の私を差し置いて・・・妹姫の名を先に呼ばれるのね？」

「それとも、私たちの見分け・・・まだついていらっしやられないの？」

「ご、ゴメンナサイ」

シーヴァーはあまりにも不甲斐無い様子のミケーレを見て小さく溜息をついた。これがこれから王になるというお人なのだろうか・・・不甲斐無さ過ぎる。

「両姫様、本日はどういった御用で？」

インファがにっこりと微笑んだ。

「きまっているじゃない」

「テセヴル將軍はいずこに？ミケーレを守っていると聞いたけど？」

「全くテセヴル將軍は本来ならわが国のために敵国にツルギをあげるはずでしたのに」

「ごめんなさい、ボクが邪魔してるんですよね」

「「そんなこと一言も言ってませんわよ」」

両姫に苛められる王子・・・なんだか情けなく見えた。

それを控えめに見守りながらインファはシーヴァーにしか聞こえない声で聞いた。

「テセヴル將軍といえば、死んでしまった聖女隊長エルシオン様にぞっこんではなかったかしら？」

「本人曰く、彼女以外愛すことは永遠しない・・・だそうで、先ほども両姫が来ると知ってから逃げて行った」

「テセヴル將軍も罪なお方ねえ・・・こーんなに可愛い少女に純粹に好かれるなら、少しは誠意を見せたらいいのにねー？勿体ない、乙女心を傷付ける人って最低よね？」

「・・・」

シーヴァーはインファのほうを向いた。

「何が言いたい」

「あら？何のこと？」

インファはシーヴァーのほうをみないまま双子姫にお茶を出すために歩いていった。

・・・先ほど別れたテセヴルとの会話を思い出す

『こんな別れが来ると分かっていたら・・・俺は、エルシオンさんに告白しておけばよかった』

酷く悔いた表情でそんなことを行っていた。

『両姫には悪いが・・・俺は彼女以外を愛するつもりはない、彼女は死んでしまったが俺の心の中で・・・永遠に生きる・・・せめて触れられなくとも、想い続けることができるだけで・・・俺は構わない』

・・・想い続けるだけで・・・いい、か・・・。

俺にはできるだろうか・・・幼い姫を思い出す・・・。

『・・・最期まで言わせてもくれないのか』

聞きたくない、聞いてはいけない、答えても受けてもならない・・・

それはもう『定め』なんだ・・・。

それが天命・・・なのに

コンコン・・・

「失礼します。本日より太子のお世話することになりました」
なぜ・・・

「マリアンジェラ・アナスタジアと申します」

「ステラ・ジャックです」

なぜ居る！？

「あちゃー！」

お茶を汲んで戻ってきたインファは顔を抑えた。

見てらんねー、
帰ろ

第五章

コレはただの嫌がらせ、たぶんシーヴァーにも、自分にも・・嫌いだから、っていうかただの嫌がらせなんだと思う、シーヴァーが困ってしまえばいい・・そう思ってたのに・・

「おい、マリ・・なんか執事さん怒ってないか？」
「・・・」

見えない顔の・・仮面の下からでも分かる、物凄く怒ってる。なんで？困惑させるつもりがなんで困惑させられているの・・？

「何か？」

「お、おう・・命知らずな」

マリは胸を張った。コネで入ったけど実力でここまで来たのだ、何か言われる筋合いは無い！

「・・・いいえ」

ミケーレは笑顔でマリの肩を引き寄せた。

「やあマリ会いたかったよ。両親から手紙が来ていたから知っていたから、いつくるかと楽しみにしていたよ」

「手紙？」

「ああ、ココに来てから毎日来てるよ？そこによく君が元気がないと聞いて心配していたんだ」

お義兄様に手紙・・？私には一通も無いどころか、そんな話・・ちらとも聞いたことが無い・・また、私だけはぶられた・・？・・親馬鹿か！

「あーら、彼女がミケーレの義理の妹？」

「アースグランド一の美女ってインファから聞いていたけれど、そうねえ・・」

ジロジロと見られる、品定めされるというのは、物凄く嫌なものだ。しかし相手は身分が違いすぎるぐらい高貴な方・・我慢我慢

「言うほどのものでもないわね」

「すこしあれよねー愛嬌が無いわ」

「そっちのほうも、そうねえ・・・なんだか品が無いし」

「ミケーレには十分かもね!」

二人の姫は大笑いをし始めた。・・・私のことだけを言われるならいくらでも我慢してやったものを、愚かな・・・

「お言葉ですが両姫方・・・淑女がそのように大きな口を開けて笑うものはありませんよ」

「!」

「私達に説教たれるつもり!?!」

「ご忠告をしただけですわ」

「なんですって!」

「止めないか」

シーヴァーが間に入った。しかしふたご姫の怒りは収まるはずが無かった。

「下賤の身が私達に意見するなんて!」

「どうなるか、分かっているの!?!」

「さあ?・・・私は私の主人を馬鹿にされて黙ってはおれませんわ」

「お前の主人は私達の父である王でしょう! その娘を愚弄することは、王も愚弄したということよ!」

「生憎ですが!」

マリの一步も引かぬマリの気迫に逆に圧された二人の姫は黙ってしまった。

「私が今お仕えしているのは、ミケーレ義兄様ただお一人です」

「あっらあー」

いつの間にか戻ってきたインファがシーヴァーの横腹をつついた。

「お嬢様言うようになったじゃない、これでもう安心ね・・・え?」

シーヴァーから怒りの炎が見える。インファも二歩三歩と蟹歩きで離れていく。

「ふふ・ふふふ・お嬢様、私に対していい度胸ではないですか・ふふふ」

(こ、こっわー)

ミケーレもあわあわと困惑していた。

「さ、三人とも落ち着いてください！ね？」

「「アナタは黙っていて！！」」

「は、はい」

それでも次期王様・。

「い、インファ」

に、助けを求めた目で見たが、インファは既に避難していた。仕方ないのでマリと一緒に来た侍女をみたが、両手を持ち上げて首を横に振った。ならばとシーヴァーを見れば

「ククク」

なんだかこれ以上に無いぐらい怖くて話かけれない・あうあう、カオスだ、カオスだよお

「そこまでよ」

声がした。

双子姫の肩が震えた。・この声は・？

「シュリナ、ジュリエ・いい加減になさい」

「「お姉さま」」

急いで頭を下げる、今この場にいる誰よりも身分がお高い・。そしてミケーレの腹違いの姉でもある。

「アマンサ姉姫様・」

ミケーレはビクビクしながら節目がちにアマンサ姫を見た。母親に最も似た女性と呼ばれるほど、気位が高く、凜として鋭い瞳を持っていた。

「お姉さまもミケーレを見に来たの？」

「ミケーレの義妹が生意気なのよ！」

彼女はふうつと溜息つくと、ぐいっと双子姫の首根っこを掴んで持ち上げた、二人が小さな悲鳴をあげた。

「『ミケーレお兄様』と御呼びなさい、ミケーレはもう我王族に帰ってきたのですから」

「・・・え？」

「え？ マリ聞いてなかったのかい？ 僕、正式に王族として認められたんだ・・・だから・・・ボクは次期王様になるんだ・・・」

聞いてない、じゃあもうミケーレはもうわたしの義兄様じゃないの・・・？なのに、両親は手紙を・・・？

「・・・」

「マリアンジェラ」

「っあ！はい」

アマンサは両姫から手を離すとマリの手をそっととった。インフアと同じぐらいか、ソレより低いぐらいの身長・・・

「二人に言われたことはお気にさらず、仕事を続けなさい」

「はい、ありがとうございます」

「それから、ミケーレ」

「はい！」

怯えるようにいい返事をする、アマンサは眉一つ動かさずに平手打ちをかました。

ええええええええ・・・！？

「これから王となるものが、なんと無様な！」

仕方ないわ、甘ったれに育てられたんだもの

「義理の妹殿はあのようにはつきりと物申されるのに・・・アナタは何を指をくわえてみていることか！ 情けない、王座に相応しい男になりなさい！ そのために第二將軍テセヴルをつかわせているのですよ！」

「す、すみません」

「シーヴァーとインファ！ お前達もお前達、お前達の任務は守るだけにあらず！ 契約は守りなさい」

「「畏まりました」」

シーヴァーとインファは特に何か反論するわけでもなく頭を垂れ

て承諾した。・姫の仰った契約ってなんだろう？

「今日は帰ります、二人とも・お前達も少しは慎みなさい！」

「う、ゴメンナサイ」

姉強しでした

第六章

私たちはあれから一週間何事もなく掃除をしたり、花の手入れをしたり、服を用意したりと中々上手く生活できていた。

「ステラ」

「（うお、執事！）なんででしょう」

正直いまだこの男は苦手だ、昔からなんだか苦手だった。嫌いつてわけじゃない、ただなんとなく苦手だった・・そもそも顔をみたことねえしな。

「ミケーレ様のところにタオルを持っていつてくれないか、私は他にすることがある」

「ワツカリマシター」

ふかふかのタオルを手にして入浴所に入る。

「ミケーレさま、タオルをお持ちしました」

「うわああああああ！」

お風呂場のほうでミケーレのずっとこける音がした。毎回こけてねえかコイツ。

「あ、ステラ」

「お？マリじゃん、お前は香水か」

「うん、切れてたの思い出したから」

棚に香水を入れると、そういうば・・とステラはお風呂場のほうを見た。

「おめーの兄貴こけすぎだろう」

「家でもよくあったけど、上がってからは特に酷いかな？」

二人は移動しながら空を見た。

「今日はいいい天気だ、こんな日は洗濯物干して、作物に水やって、草むしって、妹らと編みもんして」

「・・忙しいね」

「私はお貴族とは違うからな、その日その日に働かなきゃなんね
ー。」

「・・・私もステラと同じ生まれが良かった」

「そうだな」

厨房に入ると他の仲間がきやいきやい何か言い合っていた。二人
が一息に飲むためのお茶を汲むと女の子達が二人を囲んだ。

「なんだ？」

「ねーステラ・マリー！貴方達シーヴァー様とお知り合いなのでし
よう？」

「あー、まあ少しはな」

「ヤッパリー」

女子達ははしゃぎだす、なんだ？

「じゃあさ、シーヴァー様のお顔を見たことがある？」
「顔？」

そういえば、いつも記憶の中での彼はいろんな色の仮面をつけて
いた、でもステラはそこまで深い関係でもないの、知らないのも
当たり前だ。なんとなく知りたくもないしな

「あたしは無いけど、お前はあるんじゃないの？」

そういつてマリのほうを向くと、マリは考えるしぐさをした。

「・・・うーん、あったような、ないような・・・あまりにも一緒にい
たからアレがもう顔に見えてきて」

「病的だな」

女の子は残念そうに声を上げた。

「インファなら知ってるかも」

「インファ様？」

「私が何ですって？」

「わ！インファ様」

女の子達は急いで身だしなみを整える。

「シーヴァー様のお顔見たことございますか？」

一人の女の子が恐る恐る聞くと、インファはきょとんとした。

「顔？」

「仮面の下ですう・インファ様とシーヴァー様仲がよろしいから見たことあるかなーって？」

「・・・さあ？仮面の下は見たとないわね」

「仮面の下は？」

ただなんとなく引かなかったからステラがそう聞いたら、インファがにっこりと微笑んだ。

うん、黙ろう。

「お嬢様をご存知なのでは？」

「あ、インファ、ココではアナタのほうが上だから、『お嬢様』って敬語使わなくていいよ」

「そんな・・・」

インファは口を押さえた。

「・・・今更口調を変えろといわれましても、もう癖の領域ですわ」

「そうなんだ？」

「ちよっちよっとまって」

他の侍女がひそひそと言い出した。

「マリーってそんなに身分高かったの？」

「ジェンド・アナスタジア大公の娘ですよ」

「でも、そんなのココでは関係ないから気にしないで」

「・・・」

女の子達はウッソーと悲鳴をあげた。

「こら、休憩の時間には早いぞ」

「し、シーヴァー様！」

蜘蛛の子をちらすように逃げていった。インファとステラとマリだけ残った。

「・・・」

「・・・」

シーヴァーとマリが沈黙したまま見つめあう。

（うああああ、どうするどうする?! てかどうすればいい!?!）

（ああ、なんかステラからも同族の匂いがする！！仲間！？）

ガイヤで盛り上がる二人・・・

張り詰めた空気がだんだん酷くなる中・・・空気を讀まないものが一人。

「ねえ！ボクの髪留め何処おいたっけ・・・うあ！？」

どさ！・・・またコケタ。

いつもはイライラするけど、今回はよくやったと思うよ

第七章

「義兄様、もうアナスタジア家の者ではないんですねえ・・・」

「そうだね、寂しいよ・・・あの家は本当居心地良かったから」

それはアナタが私の分の愛情を持っていたからですよ、なんて言わないけれど。無表情で睨む。雰囲気だけでも分かったのか「怒ってる？」などど聞いてきた。

「・・・義兄様がアースグラン드의王様だなんて、失礼ですけども信じられません。だってヘタレだし」

「・・・」

否定できないので困った顔で笑って誤魔化すミケーレ。お世辞でも男らしいところは一つも無いので、王に相応しいとは言えないの。

「でも、ボクは・・・ボクは本当は——」

「ミケーレ様」

インファが現れると、恭しく頭を下げた。

「ネルシオラ后がいらっしゃられます」

「后様!？」

ミケーレは急いで立とうとしたので椅子に足を躓いてヨロケ、机を掴もうとしたが、シートだけ掴んでそのまま倒れこんだ。

机まで巻き込むなんて・・・。

（ドジっこ?）

そうこうしているうちに后が参られた。

后らしく美しく着飾っている、その優雅な様子は例えるなら芍薬の花のようだった。

「・・・まあ」

倒れているミケーレを発見し、助け出そうと駆け出した。・・・が「きゃ」

この人も倒れた。

ミケーレのどじっこは、どうやら血らしい。

「后様大丈夫ですか？」

インファが実にマイペースに助け起こす。

「え、ええ・・ありがとう」

マリはマリでミケーレを起こす。

なんで親子の感動の再会ってのが無いんだろう・・。

「ああ」

后はミケーレに手を伸ばすと抱きしめた。

「私の子・・ミケーレ」

「・・お母様」

后はさめざめと泣いた。ミケーレが下げ渡されるのは彼女の本望ではなかったらしい・・しかし、ミケーレが殺されず、ネルシオラ后が身分剥奪されなかったことを思えば、彼女は黙っているしかなかったのかもしれない・・。

「ああ・・私がどんなにこの日を待ち望んだことか・・生んだ貴方のことを忘れた日など一日も無かったわ、この17年間・・どんなに会いたかったことか・・」

「お母様」

「ネルシオラ・・やはりここにいましたか」

「お姉さま」

インファと私は頭を垂れる。

今度はネルシオラ后の実の姉、三人の姫を産みなさったマーサ正妃だ。厳しく聡明なことでもしられる。まるで薔薇の花のような鋭さと美しさを持ち合わせている。王が求婚を申し出たとき、結婚して欲しくば己の身一つで来いと言い放ったという噂まである。

「お前がミケーレか」

「は、はい」

当たり前だがすっかり緊張しているミケーレ

「お前はこの国の王となる、名誉なことです」

「・・はい」

「娘達に貴方のことをよく聞き及んでいましたが、成程弱い。そん

なことでは王は務まりません！精進なさい」

さすがアマンサ姫の母君・・・威圧感がスゴイ。ミケーレは既に泣きそうな顔をしている。

「ぼ、ボクは・・・」

「あまりミケーレを苛めないでちょうだいお姉様！この子は王宮のことをまだ詳しく知らないのよ？」

「既に知っていてもおかしくはないぐらひは日にちは経ってます、甘やかすことは許しませんよネルシオラ！貴方には発言権はないのですから」

身分的な処罰はなくとも、権限は無いようだ・・・そのぐらひの罰があるのは当たり前のことだろう。しかし母は強いというもの、ネルシオラは引かない。

「まだ王位継承式までには時間があるわ！ソレまでには立派になるでしょう」

本人が「ええ」って顔してますけど。気にしないんですね、分かります。

「それならいいですが、いいことミケーレ・・・王族に恥だけはかせぬよう」

「っ!？」

(?)

義兄様が過剰に反応した。プレッシャー 圧力にビビッタのだろうか・・・？

「ああそれと」

帰ろうとしたマーサ正妃が振り返り、マリの顎を掴んだ。

「双子姫から聞きました、・・・あまり調子に乗らないように。ココは王族、貴族とは根本的に違うのですから慎みなさい」

「・・・かしこまりました」

「そうそう、素直が一番ですよ、・・・『影姫』」

姉が歩いていくとネルシオラも後をついていくように去っていった。

・・・私、あの人嫌い。

「なあ、『影姫』って何だ？」

「ステラいたんだ」

「さっき来た」

手にはこれからミケーレがやるつもりだった茶会のセットがある。

「『影姫』は私のあだ名だよ。いつも誰かに背を向けられている影・姫は言わずもがな」

「身分だけはお前たっかいもんなー・あ、ゴメン泣きそうな顔すんなって」

頭を撫でられる。

「お、お前撫でられるの好きなんかーまだまだガキンチョだなー」

私の顔って通常が無表情で、たまに泣くか怒るかぐらいでしか変わらないけど・ステラはよく僅かな表情の変化を見分けてくれる。ソレが恥かしかったりも嬉しかったりもする。

本来なら笑う練習を毎日シーヴァーとしていたのだけれど・もうそうもいかないし、一人でしても痛いだけだし・今度ステラに手伝って貰おうかな・。

「あれ？」

ミケーレがさっきからピクリとも動かない。

「義兄様？」

「うひゃあ!？」

ビックリして急にうごきたから床に落としたままだったシートで足を滑らせ、また再び顔面から地面とぶつかっていた。

「・・・」

この人、本当に王様になれるのだろうか・

・・・多分無理。

第八章

「その子」

「はい？」

いつものように厨房から食事を運び出そうとしたとき、後ろから誰かに呼び止められた。

表現するならまるで柊の木・真っ白で細長い。服の色が私達とは違い、紺ではなく青なので、どうやら彼女は侍女長様らしい。

「なんでしょう」

「貴女ミケーレ様の身边の子でしょう、一つ頼まれてくれないかしら」

「はい」

「この書類、テセヴル將軍に渡してくださいかしら。あの方は姫身边にあまり来られないから会えないのよ」

「分かりました」

茶色の封筒を手にとった丁度そのとき、後ろからひょっこりとインファが現れた。

「あら、アユリじゃない？アローズ女大將軍は元気？」

「・・・アローズは戦場以外牢屋から出ることを許されていません、お忘れですか？」

・・・牢屋？

「それから、インファ殿・・・私に軽々しく声をかけないでください、貴女と知り合いだと思われたら心外ですから」

はつきり言うとそのまま後ろを見せて歩いていった。明らかな拒絶「・・・インファあの人になにかしたの？」

「してないわ、あの人の姉・・・アローズっていう方がいるんだけど、その人のこと大嫌いみたいで、私と似てるところがあるみたいよ」
インファのような女將軍？

「何で、牢屋に？」

「あの二人のお父上は、もとは巨人族でその豪快さと破壊力をアローズは受け継いで、先の戦いとき、魔法使いの罠に幾戦もの兵士が命を落としていったのよ、その時女性だけの軍『聖女隊』が救援に向かったの」

聖女隊は普通の兵士とは異なり、魔法使いと同じような不思議な力をもつ戦いのエキスパート集団、と聞いたことがある。魔法使いも聖女隊が苦手らしい

「そのときあの人は力を溜める余裕ができてね、魔法使い共が一気に集まったそのときに己の持つ力を爆発させた。・・そして、彼女以外の敵も、味方も・・全滅したわ」

「え!？」

その戦は結果痛みわけで終わり、でも数少ない聖女隊や立派な大將軍達を殺した罪によって、戦争のとき以外は牢屋で終身を終えることになった。

「あ、そうだ、この書類テセヴル將軍に渡さないと、私食事運ばなきゃいけないから持ってた」

「かしこまりました」

部屋に戻り、ミケーレの目の前で食事を並べていく。・・とシーヴァーがインファの手に持っているものに目を留めた。

「インファ」

「あ？」

「それは？」

「恐らく内密の指令」

「誰からだ」

「アユリから、テセヴルさんへ」

「・・アユリ殿の母君はアマンサ様の乳母だったな、信用がある・・となると」

「なかなか、重要なもの・・かしら？」

ミケーレが終えた食事を片づけしていると、インファとシーヴァ

ーが書類の中身を勝手に見ていることに気がついた。

「ちよっと！何勝手に開けているの！？私のせいになるじゃない」

「まあまあお嬢様、無表情よりも怒った顔のほうが可愛いですよ？」

「誤魔化さない！」

「どうかしました？」

扉の向こうからテセヴルが現れた。インファがいい笑顔でお届け物ですと封の開いた封筒を渡した。

「え・・・開いてる？」

「目の錯覚ですわ第二將軍」

いえいえ、錯覚じゃないですから。しかし將軍気にせず中身を見る、重要機密らしいのにこんなオープンでいいのか

「！」

「どうかしたのかな」

ミケーレが首をかしげた。

「・・・新たな『聖女隊』の創立を命ぜられました」

「聖女隊の？」

普通の少女ではなれないと聞いたが・・・？

「『能力』をもつ少女を探し出せと・・・」

「それって重要機密じゃないんですか？」

「いえ、各部署にいる將軍クラスには伝わっていると思います・・・
近々調べを王宮内でも行うそうです」

調べたら分かるんだ・・・って能力もちって分かったら強制的に『聖女隊』になるの？

「能力ってどうやって判断するんですか？」

「魔法使いが魔法を使うとき、身体を包み込むような靄があるそうです、ソレが見えたら能力持ちだそうで・・・男性より女性のほうが見える方が多いそうです」

こんこん、ステラが入ってきた。

「マリーだけにこんなの届いた」

黄色の手触りのいい紙で『徴集書』と書かれていた。

「なんだこれ」

「・・・なんで、私はチェックする前に徴集決定なんですか・・・」
將軍はサアって両手を挙げた。

・・・なんで？

第九章

収集の紙を頂いてから一週間がたった。

だいぶこの聖女隊専用寄宿屋にも女の子が増えてきた。そして今日私の相部屋の人が来が、これまたなんだろう不機嫌そうだ。

「・・・ケリー」

同じ部屋になったのが將軍家の姫、ケリー・ボールドウィンという方で、大変誇り高い・・・私と一緒にされたのは身分的な理由だけだろう。ほかは平等に適当に分けられているのに・・・。

「ケリー壁向いて楽しい？」

「楽しいわけあるまい！自分は戦闘時のシュミレーションを行っていたのじゃ！」

「まだ決まったわけじゃないのに？」

「決まらぬわけが無からう！ココに来たことで聖女隊入隊可能じゃ、だが、そこで安心してはならんのだ」

「どうして？」

「決まっておろうが！自分が聖女隊長に君臨するのじゃ！」

ケリーは普通の会話には微塵も反応しないが、聖女隊などの話をふると、聞いてないことまで一人で話し出すので、最近では扱い方が分かってきて楽です。

それにしてもステラが来ない分を見ると、外れたかな？

「しかし、隊長に離れても、本当の聖女隊長にはなれんな」

「どうして？ケリーなら大丈夫よ・・・たぶんね」

「多分をつけるな！」

我俚な！

「・・・自分の中での聖女隊長は・・・エルシオン様だけじゃ」

「エルシオン様？」

「そうじゃ、あの方と自分は従兄弟関係にあってな、尊敬していたが・・・につつき！女暴將軍アーロズに殺されたのだ！」

「憎まれても人殺し扱いされても、なんにもあたしや言えないから好きなだけ言うがいいさ」

「!!!!!!」

ボン！キュ！ボン！

「アーロズ將軍!？」

妹のユリア侍女長の姉君・・・？あまりにっていない、身体の発育とか・・・。

「何故？戦争のとき以外は出て来れないはずじゃ!」

「新人育成も、お仕事なんだと・・・さ、お前達外にでな研修を始めるよ」

がし、がし・・・首根っこをつかまれ連れて行かれる。あーれーインファに似ているといっていたけれど、体系しか似てない気がする・・・気にしてるのかな？

「離せ無礼者!」

本当に外に連れて行かれた、他の女子も次々と寮から出てきた。

「みんなの嫌われもん、アーロズだぜ★」

だぜ・・・

「なんだよーノリ悪いぞー」

「將軍、そんな挨拶の仕方はちよつと」

「なんだよーじゃあハレル君やりたまえよ」

「ええ、ボクはただの兵士ですから」

「アーロズ」

厳しい眼差しをした頬に深い傷あとが残る男がアーロズを睨んだ。
「ふざけるな」

「この目つき悪いにーちゃんが聖女隊補佐軍隊長ルジオね」

怒られたのも気にせず流した、そこらへん確かにインファに似てるかも・・・。周りを見ればテセヴル將軍もいた、無意識なのかもしれないが、腰の剣に手が伸びていた。

アーロズの自己紹介どうり、彼女は嫌われているらしい・・・

「はい、聖女隊のみなさんこんちわー」

もう一度挨拶するらしい……。しかし誰も答えないので一人からぶってばかりいる

「皆さんにはまず、形から入ってもらいます、ってことで後ろを向いてくださーい」

後ろにはいろんな種類の武器が山のように乱雑に放置されていた。他の将軍が大事な武器を雑に扱うなど怒っている。・・豪快

「自分に合う武器を探してきてね」

「あの」

私は武器をとりについた女子とは反対方向へ歩いていき、アールズの前にたどり着く。

「お、噂のマリアンジェラちゃん何か用？」

「私、能力検査らしきものしてないのに……。どうして聖女隊なんでしょう、恐らくそんな大層な力ないと思いますが……」

「知ってるよー。マリアンジェラちゃんはなー。能力云々関係なく特攻させよだって」

死ねと!?

「私恨まれているんでしょうか……」

「ハッハッハ」

いやいやハッハッハじゃなくて。

「聞いた話だと、君は洗礼を受けているらしいぞ」

「洗礼ですか」

「そう、闇から」

ヤミー!

「ほらあ王族とかスッゴイ身分高い貴族とかー將軍家とかって洗礼受けるじゃん? 神様とか精霊とかー」

「はい、七歳になる前に受けると聞きました。何で私……ヤミ……」
「簡単な話、アンタの両親が忘れてたんだお」

まじかお!?

成程私が影姫といわれる由縁が深まりましたね

「そこで、ヤミが勝手にやったっぽいよ」

「なんかもう私可哀想ですね」

「面白いじゃん」

「將軍面白くないですよ！可哀想なこといっちゃ駄目ですよ」

「おおハレル君」

「じゃなくって、將軍ほかの大將軍たちが御呼びです」

「じゃーなー」

歩いていかれた。

・・まあ、いつか・・死ななきゃいいし

「武器武器」

ケリーが遠くで私の分の武器も取っていてくれた。実はいい人？

第十章

「ふんふんふーん」

先ほど商人から買ったばかりの花瓶を持って歩く、こんないいものだ花を大量に買って綺麗に飾ろう。花瓶を持って部屋に入ると、袖の小さなフリフリを弄っているミケーレが見えた。

「ミケーレ様いかがなさいました？穴でもあきましたか」

「わ！？や、な、いやなんでもないです！」

「？」

逃げるように去っていったミケーレを見送って、不思議に思いながらもいつものことなので花瓶を机の上において歩き出す。

町に花を買いに行こう。

「あら」

スタスタスタと歩いているのはシーヴァーだった。

「シーヴァー」

スタスタスタ

「・・・」

前を見ているのに前を見ていない。いや、周りを見ていないというところか・・・

「・・・シーヴァー！！」

「！」

すれ違ってやっと気がついた。本気で気がついていなかったらしく、振り返るとやっと眼が合った。

「何急いでいるの？」

「別に急いでなど」

「じゃあ考え事？」

「・・・」

何を考えているのかなんて聞かなくても分かるけどね。

「お嬢様のこと？」

「何も言っていないじゃないか」

「顔に出て・・ないけど、なんとなく分かるわよ」

仮面でも分かる、付き合い長いし。

「お嬢様は聖女隊に選ばれたわ、恐らくそれもアーロズが出るときに出される予定のはず」

「知っている」

「心配ね」

「当たり前だ、あまり武術は教え込んでいない。必要も無かった」

「確かにね」

貴族の姫があまり武術を使うなんていうのも、体裁が悪い、マサカ戦場に出ることになるなんて考えても見なかったし。

「ねえ、シーヴァー」

「なんだ」

「好きなんでしょう、姫のこと」

「・・」

「いいじゃない、想うだけなら」

インファは庭園に目を向けた。ミケーレの部屋を出てすぐに見える庭園は木々が青々と茂っていて、実に清々しいものだった。

「好きなんでしょう？」

「・・当たり前だ」

仮面が此方を真っ直ぐに見ていた。

「彼女の名前は私がつけた、彼女の世話はずっと私がしていた。ずっと一緒にいた」

「言葉だけでも、言ってあげたらいいじゃない」

「駄目だ。分かっているだろう」

「言うだけよ」

「二人とも、どうしたの？」

ミケーレが二人が深刻そうに話しているから心配して顔を出して聞いてきた。インファは誤魔化すように微笑んだ。

「花瓶に活ける花を何にするか考えていたんです、どんな花がいい

ですか？」

「え？つと・ボクは可愛い花がいいかな、小さくてカラフルな花」
「かしこまりました」

歩き出そうとするとき、シーヴァーに腕を掴まれた。

「インファ、今度『聖女隊』に顔を出すらしいな」

「ええ」

「これを、お嬢様に渡してきて欲しい」

「OK」

歩き出す。ミケーレがまだ此方を見ていたが気づかないふりをし
て歩き出す。

「それにしても、本当に私達の一族は深く真面目で」

インファは目を細めた

「狂気的な種族ね」

シーヴァーが部屋に入るとミケーレがワクワクした顔でシーヴァ
ーを見つめた。

「・・・なんでしょう」

「インファに何を渡したのかなーって」

「・・・くだらないものです」

「ふーん」

にここにこ

「・・・」

何か勘違いしているのか？

「インファとシーヴァーって仲いいよねえ」

・・・勘違いしてる？

第十一章

「マリアンジェラ殿」

「え？」

振り返るとルジオ將軍がいた。

剣を持って素振りをしていたときだったから、持ち手が甘かったのかと思えば、違った。

「私のこと、覚えていますか」

「ルジオ將軍をでしょうか？・・・どこかでお会いを・・・あ」

「お、お前え！」

ケリーに首を絞められ小声で囁かれた。

「ルジオ様のお知り合いだったのか！？」

「く、くるしい」

ルジオが険しい顔を緩めた。

「思い出されたか」

「はい、私の社交界デビューのときにお世話になりました」

「じゃ、社交界・・・だと」

アレは私の初めての社交界パーティのときだった。

確かあの時も親や周りの人は王族の血をひくミケーレにしか興味を持っていなかった。さすがにインファやシーヴァーを連れて行くわけにも行かず、何も教えられなかった私は一人隅っこのほうでドレスについた服の装飾を弄っていた。

そのときに

「・・・」

「姫お一人ですか」

「！」

「失礼、よろしければ・・・踊っていただけますかな」

「・・・はい」

その時踊ってくれたのが確かにルジオ將軍だった。思えばあの時

エルシオン様も見ただけ。遠目だったからよく覚えていないけれど・・・。

「踊ったのだとー」

ケリーになんとか殺されそうだった。

「えーと、その節はどうもありがとうございました」

「いや・・・あのときの貴女は本当にか弱くて儂くて・・・美しい乙女でしたよ」

手をそっと掴まれると、手の甲にキスを落とされた。

赤面するよりも、隣の少女から発せられる殺気に真っ青になる。

「戦場では、我々聖女補佐軍があなた方を全力をもってしてお守りしましょう」

「ありがとうございます、共に戦いましょう」

ルジオは野生的な笑みを浮かべるとマントをひるがえし歩き出していた。さて、こちらのお嬢さんを一体どうしたものか・・・。

「ルジオ君が笑ってるとこ初めてみたー」

「・・・アールズ隊長」

「呼び捨てでいいよ、身分的にはそっちのが上だし？」

「そういうわけには行きませんよ。貴女が隊長で私は平ですし」

「無表情でいわれてもなー」

「すみません」

笑えないんです。將軍は苦笑いを浮かべるとにっこりとかわりに笑った。

「ルジオ君のお姉さんエルシオンって言ってね・・・そりゃもう立派な人だったよ」

「お前がエルシオン様の何が分かるというのじゃ！」

ケリーが剣をアールズに向けて威嚇した。

「敵味方も区別もつかぬ愚か者のクセに！」

「・・・信じてくれとは言わないけれど、あの戦い・・・聖女隊が到着する前には既に我軍は私以外すべて滅んでいたよ」

「！！！」

圧倒的な戦力の差・・・さすがの聖女隊もなす術はなかった。

アーロズの絶対的な破壊力を使う以外は・・・

「まるでその言い方、聖女隊がそうさせたかのようにではないか！」

「そうなんだよ、わたしや軍人として死を覚悟したんだけどね、エルシオンちゃんが無念を晴らしてくれて、身を挺して時間を稼いでくれたってわけ」

「信じる分けなからう！」

「ケリー！」

剣を振り上げた。

「おや、おいたはいけませんねー」

「な、なんだと！？」

「インファ！？」

素手で剣を受け止めた、しかも剣が折れるだけでその生肌が傷つくことは全くない。

「な、んで？うそじゃ！人間ではないのか！貴様」

「そうよ」

インファはなんでもないと微笑んだ。

「私は魔法使いの血が半分流れた・・・混血種」

「！」

「でも安心して、私達はウェザーミステルの奴らが嫌い・・・だからココにいるのよ」

「・・・」

ぼう・・・インファの腕が淡い炎の色に包まれる。

「私はインファ・・・今回『聖女隊』の『魔法』を専門に教えていくわね」

焰が燃え上がった。

「よろしくね」

インファの目もチラチラと真っ赤に光っていた・・・。

第十二章

「インファと將軍は仲良しなの？」

「ええ、昔に少々戦術を教えました」

「つていうかースパルタ師匠だよねーおかげでわたしやココまで生きてますよー、なはは」

「あら、私が貴女の師匠ならまだまだ貴女は及第点に到達できていないけれど？」

「え？」

アーロズが汗を流しながら固まった。

「そもそも、貴女がきちんとしていれば『聖女隊』の教官として私がココにくる必要がないでしょうに」

「ぐうの音も出ませんな、なっはっはっは」

逃げるように笑いながらアーロズは歩いていった。そして後からやってきたハレル君がアーロズの後ろをついていくようにはしっていった。

「ケリー様・將軍家のお姫様、貴女の家系はよく知っていますよ。武術で厳しい家ですよね」

「そうじゃ、自分は他の者とは違うのじゃ！」

「ええ、その通り、貴女は他の人とは違う・・・だからこそ『聖女隊』にはいるのは諦めませんか」

「なんじゃと！！」

ケリーが今にもインファに飛びつきそうな勢いで叫んだ。しかしインファはいたってマイペースに続けた。

「他の方々は軍人ではありません、ほとんどが素人です。ですから軍がもし敗退したときには逃げるでしょう」

「自分は逃げるなど臆病なことはせぬ！」

「ですから」

インファの目が厳しいものになる。

「ですから貴女は軍に向きません。本当によい兵というものは引き際を弁えているのもですよ」

ケリーは口を閉じた。

「アーロズも・・前回死んでしまったエルシオンも・・愚かです」

「エルシオン様のことを馬鹿にするな！」

マリが止めるまもなくケリーはインファに殴りかかった。・・が「な」

ケリーの身体が横に流れた。

インファが受け流したのだ、マリは素直に驚いた。・・インファ・強かったんだ

「えっと・・インファ、強かったのね」

「お嬢様、女性とは秘めたるものを奥に隠し、か弱く見せるのも技の一つですよ」

うん、ためにならないアドバイスありがとう・・。

「ああ、そうそうお嬢様これ・・プレゼントですよ」

「・・？」

渡されたものは石でできたブレスレットだった。淡い色で優しい輝きを放っていた。

「綺麗」

「ふふ」

いい笑顔でインファは微笑んだ。

「えっと・・」

「しっしょー！はじめるよー」

「ふふ、師匠って呼ばないで下さいよ將軍！貴女を弟子と認めた覚えはないですよ」

インファは笑顔で歩いていった。

・・綺麗な石・・

「おのれ」

床に倒れたままだったケリーが起き上がった。

「許さぬ、負けぬ、自分は・・あの女を越えてみせる！！」

ゴオオオツと燃えている。

「頑張ってね」

「言っておくが！」

ビシッと指をされた。

「オヌシも例外ではないぞ！」

「なんで？」

「………知らぬ！」

顔を真っ赤にすると歩いていってしまった。

……なんで？

「ケリー待ってー」

「知らぬ知らぬ黙れ！！」

待ってーしか言っていないのにー

皆集められたが、そこにはどうやら將軍達が集まっておりコレから何かが始まるらしい

「なにをするつもりなんだろう」

「さあ」

インファが笑顔でみんなの前でお辞儀した。

「さて今回皆様には何処まで魔法帯が見えるか、チェックしますね。靄が見えなくなったら横に移動してください……では行きますね」

インファの瞳が真っ赤色から紫色に変わった。そしてその身体から圧倒的な紫色の靄……というより炎が見えた。

「あれが……魔法帯？」

「そうじゃ、……あれほどの魔力を殺気なく放出できるのか……」
だんだん薄くなっていった。しかし動くものは誰もいない……。

そして最終的には見えなくなった。

……私だけ。

「見えない」

「もう見えぬのか？ 自分には先ほどと全く変わったようには見えぬぞ」

「……一人だけ移動してくる」

とことごと移動していると、影が不思議な形をしていたからなんとなく見上げた。

「え？」

雲が広がる晴天の中に、鳥が見えた。

ただのとりではない、綺麗な虹色の鳥が飛んでいた。

「・・魔法使い」

「え？」

「魔法使いだ！！」

上空に飛ぶ一匹の鳥は一気に下降すると、人の姿にか変わった。

「己！魔法使いめ」

將軍クラスが剣を抜く、それをインファが片手で制した。

「身代わりの魔法・・実体はここにはいないわ」

紫のマントを羽織った魔法使いはニヤリと笑った。

「ご名答、今回は喧嘩を売りに来たわけじゃないのですよ、今回は交渉しに来たってわけっすよ」

（若い）

インファは笑顔で魔法で実現化させた剣を、若い魔法使いに突きつけた。

「名は？」

「インファ殿！名を聞くまでもない殺してしまおう！！」

「テセヴル將軍落ち着いてください」

「おー！インファって、噂の混血種か！じゃあ俺らの仲間だね」

「は？」

インファがスッゴイ笑顔で否定した。

「殺して差し上げてもよろしいんですのよ？あまり余計なことを言わないでください。名は？用件は？」

「そんなに怒らなくてもいいのに」

剣を全員で突きつけられ両手を挙げた。

「ウィルシア・シアーズ」

マントが風に流され、フードがずれ顔がはっきりと見えた。中世的な整った顔

（綺麗な藍色の青年・・・）

青年と眼が合うと、ジーツとこちたを見つめた後につこりと微笑んだ。

「？」

「王の伝言をばお伝えに上がった所存でございます」

「それは信用できますか」

「できるできる、俺王様の奥さんの甥っ子だもん」

・・・だもん

「信用できない」

ルジオが言うことはごもつともだったが

「ま、聞くだけ聞いてよ」

あまり強く否定しても向こうに戦争の理由として突きつけられるだけなので、聞くだけのことはするという結論に將軍達は至った。

「来なさい、案内します」

厳しい眼差しのまま口元だけ笑顔でインファは歩き出した。

「・・・」

去って行ったインファたちの背中を見守りながら、私とケリーはお互い顔を見合わせていた。

そして同時に頷いた。

・・・盗み聞きしに行こう！！

第十三章

「ウィルシアといったな、貴公・魔法使いの分際でわが国によくもコレたものよ」

「あーまあ余裕っすよ」

皆がしんとした。

どうやらこの人は天然らしい、もしくはこういう性格なのか

「何しに来た」

「わが国に跡取りがないことはご存知ですよね？そちらには三人の姫がいらっしゃる、こちらは一人もいない・言いたいこと分かりますよね」

「ミケーレをそちらに渡せというか」

「はい」

ウィルシアは全く物怖じせずに言う、ケリーと影でその様子を見守っていた。

「義兄様を寄越せと言いに来たの・・・？」

「そうみたいだな・・・って義兄様？」

王様は少し黙っていたが、宰相などが王様に何か耳打ちをする。

「条件は」

「我国王は協定条約を結ぶと仰っていましたが？」

「・・・」

「逆にこうもお考え下さい、拒否した場合・・・此方は実力行使させていただく」

義兄様がウエザーミステリに行ってしまう？義兄様が行ってしまったら・・・まさか・・・インファやシーヴァーも行ってしまう？！行ってしまったら・・・もう二度と会えない？

そんなの、そんなの・・・いや！！

「お、おい！マリアンジェラ！」

どうして！！どうして！シーヴァー！！シーヴァー！！

「生まれてこの方使ったことなんて無いよ？」

「「だよねー」」

使えてたら使えてたでこの人なら何か大変なことをやらかしそう
だ。

「義兄様、王様になれるの？」

「・・マリアンジェラ」

「はい」

ミケーレの顔が真剣なものになった。

「実は・・頼みがあるんだ」

「？」

第十四章

『そちらの国に子がないということだが、此方も男はミケーレ一人しか居らぬ、故にわが国の王にミケーレがなるように事を進めている最中だ。悪いが其方にやることはできぬ』

話し合いの結果、王様はきっぱり拒絶の意を示した。

魔法で向こうにいる王様と会話しながら頭をかく。

「とゆーことで、結局断られちゃった」

《そうか・・まあ予想内だがね。其方に100人ぐらい送っていたから、もうすぐ着く頃だろうお前は》

「分かってる、実力行使を実行だしよ？」

藍色の青年は口元を歪めた。

「ミケーレを拉致する」

・・。

「・・・」

マリはこっそりとミケーレの部屋をのぞく

「・・まだ・・みたい」

ベットに座って待つ。

・・ん？何か騒がしいな？

バァン！！！！ビュウオオオオオオ！！！！

「きゃ」

部屋の中を風が駆け回った。

「ミケーレちゃん、こんばんわ・・あり？」

「・・お前は魔法使い！」

ウィルシアは両手を広げたまま固まった。

「ヨソウガイデース」

ぼすつと隣に座った。

「君誰？もしかしてミケーレって君？女だったの？」

「・・・ミケーレじゃないよ、魔法使いがミケーレに何のよう？」

「ミケーレの部屋にいるけど、君は彼のコレ？」

小指を立てられた。

「そんなわけではない」

有り得ない有り得ない。ないない

「じゃあ何でここにいるのさ、夜這い？」

「・・・殴っていい？いいよね魔法使いだもん」

そんなことする分けないじゃない・・・！影姫って呼ばれるけど立派な淑女よ・・・まだ14だけど

「魔法使い魔法使い連呼しないでよ、俺だって名前あるんですけど
〜ウィル」

「ウィルシア・シーア・・・でしょ」

「・・・にひ、君は？」

「マリアンジェラ・アナスタジア」

「長！」

「そんなに長くないよ！」

どうしてだろう、魔法使いは忌み嫌うものだとか教えられたけど、
会話してみたら面白いかもしれない。魔法使いといっても普通の人
と同じだし・・・。

「見つけたぞ魔法使いめ！」

「ありゃ！みつかった？」

兵士がぞろぞろとミケーレの部屋を包囲した。

これって私もやばいよね？

・・・。

「魔法使いがミケーレ様の部屋にいるんですって！」

「えー！ミケーレ様は無事なの？」

「それが、何故かミケーレ様じゃなくてマリーがいるらしいわ」
「・・・なんで？」

女官たちの噂をくぐり抜けるように、インファが走ってきた。

「シーヴァー！ミケーレ様は？！」

兵士の群れの中からシーヴァーはゆっくりと現れた。

「インファ！何事なんだ」

どこかにいていたらしく、事情を把握できていない二人。ステラはそーっと二人から離れようとしたがインファに首根っこを掴まれた。

「ミケーレ様をご存じない！？」

「えー？えーっと存じするような存じないような」

「どっちなの！・・・あれ？その子は」

「か、彼女は入ったばかりの・・・えーと、ルイーザといって・・・そのお」

「ルイーザア？」

インファは見たことのアル少女を見つめた、彼女はそれほど頃ではないという感じに真っ青な顔をしている。ステラは汗をたらたらと流していた。

綺麗な髪の長い・・・美しい容姿の愁い顔の美少女だった。不安げな顔でステラの手を握った。

「どうしようステラ！マリーが、マリーが危ないよ」

「その声・・・」

シーヴァーが呟くと

「失礼」

といってルイーザの髪の毛を引っ張った。すると、しゅるんとカッラが取れた。その人はミケーレその人だった。

「ミケーレ様！」

インファは口を押さえた。

「ふ、くく、く・・・似合ってますね」

肩が震えてる。ツボに入ったらしい。

「ミケーレ様、お嬢様が危ないとは・・・？」

「うわあああああ！！！！」

兵士達が突風に吹かれて飛んでいった。そして風に舞うように空を浮いているのは藍色の青年で、その腕にはマリアンジェラの姿があった。

「きゃあああー！？」

「マリアンジェラ！！」

ステラとミケーレは同時に悲鳴をあげた。

「ぼ、ボクが・・・ボクがいけないんだ！女になりたいだなんていったから！」

「・・・」

インファはミケーレを見て倒れた。

「ちょ、女官長殿？・・・って笑ってんのかい！」

「・・・は！」

インファもいい加減笑っている場合でないことを思い出した。

「お嬢様！」

ステラはインファを白い目で見た。

「・・・インファ・・・ミケーレ様を安全なところにお連れしろ」

「まさか！シーヴァー！」

「押さえるつもりはない」

インファはミケーレとステラの首根っこを掴んで走り出した。

「みんなーはなれて――！！！！」

轟ッ！！

真っ赤な炎がシーヴァーの手に集まった。

「お嬢様を離せ！！」

ゴオオオ！！魔法使いに向かって放たれた炎がツルギに変わり魔法使いに襲い掛かったが、魔法使いは驚いた顔をして緊急回避した、が・・・マリは離さなかった。

「うきやあああああ！！？」

「おっとっと、マリアンジェラちゃん首絞まってる！」

第十四章（後書き）

ミケーレの秘密

女の子になりたいルイーザちゃん

第十五章

攫われて、気を失っていた。気がついたらベツトで寝ていた。

「・・・え」

隣を見れば鼻の長い犬がいた。

「・・・ばふ」

「・・・ばふ？」

「あー起きた？」

ウィルシアがお盆を持って現れた。

「ばふ！ばふばふ」

犬がほえながらウィルシアのほうに転げながら移動していった。

「歩けよ！」

「あの」

乱れた髪の毛を直しながらマリは頬を赤らめた。

「櫛・・・と鏡くれない？」

「？」

「・・・身だしなみ・・・整えたいの」

・・・。

部屋を出るとメイドが立っていた、メイドは何も言わず歩き出し案内を始めた。ついた先は居間で食事の用意ができていた。

「ほう、彼女があちらの国の貴族の娘か」

「マリアンジェラちゃん、こちらシア公爵夫人兼母、ララージニアちゃん」

「ちゃん付けするな氷付けにするぞ」

ひゅおお、白い光が舞う。

ガチャッ・・・扉が開き、人が入ってきた。ソレを見るや否や奥様

は魔法でその人のところに移動をした。

「レイモンドおー！ウィルの馬鹿が馬鹿なんですけどー！！馬鹿すぎて困るんですけどー！」

「お父様ー！ララーちゃんが何か酷いこといつてるんですけどー！」

「二人とも客人の前でよさんか」

・・なんだろう、羨ましくて悔しいんだけど・・。

「ジェンド公爵の娘だな」

レンモンド殿はどうやらまともらしい。良かった、全員が全員ウィルシアみたいな性格だったら、きっと耐えれなかったと思う。

「はい」

「・・うちの息子がソナタをミケーレの代りに攫ったと聞いた。すまないな」

「いえ」

「もし、できてしまったら責任を持って我家に迎えるぞ」

「はい？」

今、なんていいました？

「父上、父上・・俺の部屋で貸してあげただけで、俺は昨日テルカ・マサラのところにいたんですけど」

「む・・そうなのか」

「そうです！！！」

駄目だヤッパリこの国の人駄目だ！

「ワタシは軍のほうに顔を出してくる、五時までには帰ってくる」

（早っ！？）

「あらそう、私は王宮に遊びに行ってくるわね」

（馴れ馴れしいにもほどがあるよね！？）

頭が痛くなってきたので頭を押さえていると、ウィルシアがマリをお姫様抱っこした。

「きゃ?!」

「俺の友達紹介してあげーよーか」

指の先が光輝くと、ソレをクルクルと回し、手のひらを広げた瞬

間、目の前の風景が変わった。

「・・・まだ何も言っていない」

「おんやあ、ウィル君じゃないかあ」

「彼女はテルーカ・エニシン・・・魔法技術開発部門専任」

「・・・初めまして・・・」

彼女は奇天烈な姿をしていた。まともな服と呼べるのは白衣だけで、白衣の中は未発達な身体がはつきりとライン出ているが、裸ではない、不思議な模様のような、薄い服を着ていた。その髪も不思議、物凄くロングで床に普通に届いてしまっているし、少し目を離して再び見ると、髪の色が変わっている。

「・・・不思議そォな顔してるなあ〜どうも、テルーカ・エニシンちゅう、精霊属エルフだあよ」

「精霊！魔法使いと精霊は繋がっているって聞いたことあるけど、本当だったんだ」

「繋がってるっちゅーかあ・・・インスピレーションがあったんねえ」

「それに俺たち基本フレンドリーだもんねー」

「・・・おお？」

機械が音を鳴らした、今気がついたがこの部屋・・・画面やらキーボードやら不思議なコードやらいっぱいあり、どれがどれやら分からなかった。

「？」

不思議な文字が空中に一気に現れた。

「パンドラの扉の解析不可・・・あっちゃー今回もしっぱいかあ」

「・・・パンドラの扉？」

「うん？コレのこと」

ヴウンッと画面が目の前に現れた。一見すると大きな石膏で作られた美しい模様のついたマンホールに見えるが・・・。

「やっぱり、ミタマが無いと駄目かなー」

「ミケーレはあ〜？彼がいないと実験しようが無いじゃないかあ」

「・・・今、なんていった？」

「？」

「題して『竜族と魔法使い』」

第十六章

昔、ウエザーミステル国には、エドゥアルドという果敢な青年がいた。彼の目指す国は、富国強兵で、国を栄えさせるために沢山の努力をした・・・。

その途中、ソレをよく思わない竜族が、エドゥアルドに脅しをかけはじめた。しかし、彼は国の北のほうに国を営んでいた竜神族に対し、強気な姿勢を見せた。

戦争をおこしたのだ。

エドゥアルドの強気の姿勢に好意を抱いた、精霊界の王アルフレッドは彼に協力し、戦争では勝利をおさめた。竜神は素直に降伏した。

それから何年か経ち、エドゥアルドが引退した後をレジナルドという男が継いだ。彼は父親の示した富国強兵の変わりに、新たに自由な国を制定した。といっても何が自由なのか分からないから、国民の望みを聞いて、何でも答えることにした。

そのなかで『実験を充実させたい』という人がいた。竜神というものを、調べたい。竜神という生き物を実験したいと・・・。

その願いは受理された。

「小国は築けるほどの種族が、今では絶滅危惧種にまでなってしまいましたとさ」

「最低ですね」

「敬語で言われると凄く傷つくね、でもそれももう、何十年もの話だしさー」

「でも何年か前、人間と竜神との間で子ども作ったらどうなるかって、実験したよねえー」

「あー」

なんで、酷い話を軽々とできるんだろう・・・もう一発

「その子どもなら会ったよ? 『インファ』 っていう女の人」

・・・インファ・・・?

「竜神族は彼女を歓迎したらしいねー彼女もすっかり竜神族の戦士の顔になってましたよ」

「この国が嫌いだからって中立派から敵国に行かなくてもいいのねー」

「いくでしょう!? 普通」

信じられない!

「帰る!」

「え?」

マリアンジェラは歩き出したが、すぐにウィルに追いかけられる。

「何処いく?」

「帰るの! 私を今すぐ故郷に帰して!」

「はい、そーですかって言うわけないでしょうよ」

「いい加減に」

右手をあげたが、掴まれ、抱きしめられた。

「帰さない」

「なっ」

・・・なんで抱きしめるの?

まるで囁くようにウィルシアはいった。

「一目見て分かった、君すごく悲しい顔をしてた。あの国が君にもたらずものは『苦痛』『悲哀』『絶望』・・・そうでしょ」

どうして、その話になったんだろう

凶星をつかれ、何もいえなくなる、そんな自分が情けなくて・・・

悲しくなってきた。認めたくないけど、事実なのだから・・・仕方ない
「・・・うぶ・・・うう、んっ・・・」

泣きそうになり、口を押さえる。ソレを見たウィルは小さな子どもをあやすように、背中をポンポンと軽く叩いた。

「泣いていいよ、君が感情を上手く出せないのは、泣くのを我慢するからだ」

「・・・っ・・・うあ、うああああん！」

なんでだろう、全く空気が読めないくせに、情けなんてなさそうに見えるのに、神経図太そうなくせに・・・。この人といると安心する。素直になれる。

「よし、じゃあ泣いた後は叫びましょー」
魔法で移動する。

目の前に広がるのは大きな木の上

「うきやあああ!？」

「おーおーいい叫びですなー」

「降ろして!馬鹿ア!？」

「おーけ」

木から飛び降りた。

「いやあああああああああ!?!?!?」

だれが飛び降りろって言ったのオおー!!

ビュオオオ!

風が二人を抱きとめるとウィルシアはそのまま上空を飛んでいった。お姫様抱っこされたまま何もいえないマリアンジェラ

この人にもう何いっても駄目な気がする。

「わあ!」

綺麗な透明な湖の上を飛ぶ、水面にはキラキラ光小さな魚の群れが見えた。

「・・・すごい」

「お、やっと笑いましたねーんじゃコレなんていかが？」

一気に上空に飛び上がると、雲を突き抜けた。燦燦と輝く太陽だけある。ウィルシアは魔法で雲を固めると、その上に降りた。

「うわあ、怖い・・・」

「落としてあげようか？」

「結構よ!？」

二人で大笑いをして、横に転げた。

彼女にはまるでさっきまでの会話が嘘のように思えた。

「マリアンジェラ」

「はい？」

名前を呼ばれ横を見ると、優しい顔をしたウィルシアがいた。

「本当に、この国に住んじやいなよ」

「・・・」

「ふざけたヤツとか多いけどさ、根は真面目なヤツばかりですよ」

「あなたが言う？」

笑いながらいうと、左手に違和感を感じた。

横を見るとウィルシアが目を閉じたまま左手を握っていた。・・

話の途中で寝ちゃうのね・・・。

「・・・変な人」

顔を上げる、太陽が少しずつ傾いていく、もうじき日が沈む・・

「・・・シーヴァー・・・」

インファからプレゼントされたものを見る。

私知ってるんだから・・・これ、シーヴァーが大事にしていたもの

だって・・・。いつていたこと覚えてるんだから・・・。なんでもくれた

の？お別れになの・・・？

分からない

「分からないよ」

お願いだから、ねえシーヴァー・・・

「教えてよ・・・」

嘘でもいいから『好き』だといってよ・・・。

眠ってしまった姫を起こさぬようにウィルシアは起き上がった。

「竜神族が生まれたときに一緒に現れるという秘玉を、人間の少女に渡すなんて・・前例がないな」

ウィルは握った手を離さないまま笑った。

「ライバルか・・面白い」

仮面の男を思い出す。

すれ違いの男女の邪魔をするのは糸を切るより容易い。

第十七章

ステラはお茶を汲みながら心から思った。『今すぐ逃げ出したい』と・・・。

「・・・・・・・・・・」

重い重いよこの空気・・・耐え切れんわぁ

「あのー、こほん！えー・・・お茶アー・・・持ってまいりました」

將軍クラスの武将や王様、インファやシーヴァーも深刻そうな顔で机の上にばら撒かれた書類を見ていた。ステラは無言でお茶を配りながら泣きそうになった。

アユリ女官長は姉がここにいることを嫌い、近寄ることも拒絶した。なのでその鉄砲玉がステラに回ってきたのだ。

「ミケーレ様が攫われなかったのは良かったですが、アナスタジアの姫が攫われてしまいましたなあー魔法使いを殺すのはお手の物ではないのですかなアーロズ將軍」

アーロズ將軍に対する厭味の言葉を老人とも言える將軍が吐いた。

「あたしゃその時牢獄にいたものでしてねえ・・・すみませんねえーテッサ老將軍、牢獄にいなければ勝てたんですけどねえ」

「ふん！」

いがいがしてるー帰りたいたいよー

ステラは救いを求めるようにインファのほうを見たが虚空を眺めていて見つめてすらいない。

「お嬢様は、・・・大丈夫でしょうか」

「インファ？」

「魔法使いどもは本当に鬼畜です・・・仲間を仲間だと思わない低俗な奴らですわ」

「アナスタジアの姫のことなどどうでもよい」

王様の言葉を聞き、皆が顔を上げた。

え？

「まさかお前達、余が皆を集めた理由を、まさかアナスタジアの姫を助け出す会議のためだと思ったのか？そんなわけあるまい」

インファが驚いた顔と、困惑した顔をしてジーヴァーを見た。

「・・・では何の会議でしょうか」

「決まっておろう、わが国に魔法使いが易々と侵入しすぎじゃ、どうなっておる！警備はゴートンが担当しているのではないのか！」

「すみませんねえ王様」

机の上に足を乗せたまま微笑んでいるのはアーロズの実の父で、もとは巨人族であったゴートンだ。彼もまた魔法使いの実験の末・魔法でこんなサイズ・・といっても平均よりも大きい、小さくされたのだ。

「俺おりやア、大雑把でねえゝそんなもって目が節穴でねえ、あっはっは」

「子が子なら親も親か」

「なっはっは！いってくれますねえ老將軍！でしたら老將軍にお頼み申したらようござんしたねえゝね！おやっさん」

「がっはっは！そうだなあ」

「もう良いわ、兎に角解決策を申せ」

「魔法使いを皆殺ししかないんじゃないでしょうかねえゝあたしや今まで何人もの魔法使いを見てきましたが、奴らは何処にでも出てくるし何処でも消える」

「それができれば苦労せんわい」

同じく老將軍の一人、マクベス・キャバニアはこめかみを人差し指で押さえながら唸った。ソレを見たテッサ老將軍は王を見て問う。

「王様、いっそのことミケーレ様の身柄を引き渡したほうがよいのではないのでしょうか？条約も此方に有利なものだったらいいですし、なによりミケーレ様は失礼ですが奥様の不埒な行いからできた御子・」

「テッサ將軍口を慎みなされ。ネルシオラ様に対する侮辱ですぞ」

「事実を述べたまで、それに偉大なる王の血をついでいないのですぞ。敵国の王の血を継ぐなど卑しいも当然・」

「テッサ！」

「ミケーレ様を差し出さぬというなら如何なさるのじゃ？それともアナスタジアの姫君でも向こうの王に差し出しますかな？アナスタジアの姫君といえば『影姫』と呼ばれるほど幸薄い姫、いっそ向こうに行ってしまったほうが幸せなのかもしれませんの」

「そうでしょうか！」

流暢な口調のテッサ將軍のペースに皆が流されていた、そのときだった……。彼のペースを打ち切ったのは、さっきまでいつ出て行くかタイミングを見計らっていたステラだった。

「・・・本当にミケーレ様は卑しいお方でしょうか」

「なんじゃと小娘！たかが無能下級身分の女官が口を出すでない」

「こほん、テッサ將軍私の部下を罵るのは止めて頂けないでしょうか？止めないというのなら止めて差し上げますよ？力づくで」

「インファ、止めよ」

王様が声を出した、そしてテッサにも黙るよう目で制し、ステラのほうを向いた。

「いいたいことがあるなら、申してみよ」

「ありがとうございます、・・・恐れながら申し上げます」

ステラは汗を流しながらも、真っ直ぐ皆を見渡した。

「ミケーレ様やマリ・・・マリアンジェラ様が魔法使いの国にもし行つたとしても幸せになれるとは思いません！だって・・・」

「だって？」

「だってあの二人は幸せってもんを知らないんですから！！！」

・・・。空気が固まった。

「は？」

「だって・・・ミケーレ様は子どものころに両親から離され、誰にも言えない秘密を抱え、それを叶わせることもままならない上、自分のことを本当に心配してくれているわけでもないのに政略に巻き込まれているし・・・」

「秘密・・・？」

インファはそういえばミケーレの時々見せる不審な行動を思い出した。

（秘密って何だろう・・・？気になるわ）

「・・・それに、マリアンジェラ様だって、望んでないと思う・・・」
ステラは言うか言わまいか悩んだが、意を決し言うことにした。

「マリアンジェラ様は、どんな境遇にあったって、・・・だけがいればいいって言ってました、・・・がいなかったら何処でも同じだって言っていました！いれば満足だって」

「・・・って誰？」

みんなの言葉を見事代弁したアーロズに皆は頷いた。

「それは内緒」

ステラは目を逸らしながら言った。

インファはシーヴァーの横腹をつついた。

「ですってよ」

「・・・」

王様はステラのほうを見た。

「言いたいことはそれだけか」

「はい」

「・・・ふむ、お前は何か勘違いしているようだが、そもそも『^{こうふ}幸不^{こうふ}幸^{こうふ}』では無いのだよ、『使えるか使えないか』だ、テッサ」

「は、王様」

「お前も間違っている」

「え？」

「そもそも余がいつ『和睦』の言葉を言った？余は敵の侵入ができないようにする『^{かいけさく}解決策^{かいけさく}』を聞いているのだ。お前達も、くだらぬことばかり考えずに、真面目に考えよ」

ステラは開いた口が塞がらなかった。

「王様」

先代の王から使えていた老將軍マクベスは立ち上がり王を見た。

「攫われた姫や、狙われているミケーレ様や、いまも戦場にいる兵

士達は如何なさるのですか」

王は鼻で笑った。

「知らぬ」

え

皆そんな顔をした。

「自分の身は自分で守れ、兵士は国のために戦え。ほかに何を命令して欲しいのだ？ん？今までどおりに事を成せば良い。幼子でもあるまいし、いちいちああしろこうしろというわけあるまい」

「・・・ふ」

ふ ざ け る な あ あ ア！！！！！

「！？」

ステラが会議用の長い机を思いっきり殴った。

鈍い音と机にひびが入るのは同時だった。

「それでもアンタ王様かよ！？アンタびびってるだけじゃねえか！国に敵が侵入してこないためじゃなくて、自分が殺されないための会議なんだろうが！ふざけんじゃねえよ！」

「ステラ！王様になんて口の聞き方をするの謝りなさい」

「王様だろうが関係ねえし！あたしはもう切れた！おう、王様よお！そもそもアンタ国のことを考えてるってんなら、誠意ってもんがあるんじゃないのか？！」

「貴様王を侮辱するなど！死刑だ」

「老將軍おしじは黙っとけ！」

ステラは机の上にと上がると王様を見下した。

「どうせ死刑にするなら、あたしを魔法の国にいかせな！アンタがどうでもいいって言ったマリアンジェラはな・アタシの家族も同然なんだよ！！ここにいて誰よりも大事な家族なんだよ！！」

王様は驚いて口が開いていたが、ソレを閉じた後、大笑いをはじめた。

「よからう、無礼な小娘！勝手にこの国を出て行くがよい！ただし余が死ぬまでこの国に戻ってくることは許さぬ、よいな」

「上等！」

「そんな、王よ！許すのですか？」

「流刑に処す、それでよからう」

「王！」

臣下の声も聞かず王は立ち上がり、両手を挙げた。

「今日は解散」

去っていく王様の後についていくテッサ將軍を見送り、他の兵士はアーロズを再び牢屋に連れて行くために囲んだ。

インファは心配そうな顔でステラのほうを見た。

「ステラ、もう少し冷静になったほうがいいんじゃないの？」

「あたしは！違うんだよ！！」

「?!」

睨むようにステラはインファとシーヴァーの二人を指差した。

「アンタと違って、アタシはアイツを傷つけないし！甘やかしたりなんてしないんだよ！！」

そう言い放った後はずかずかと歩いていった。

インファは口を押さえながらシーヴァーを見た。

「だって」

「・・・私のことか？」

「自覚無いわけじゃないでしょう？」

「・・・言わせる気か」

「そうね」

二人はヒビの入った机に座った。

「さあ、どうしましょうか」

「・・・近々、長と相談する」

「長・・・ね」

二人は溜息をついた。

「・・・長なだけに・・・長いのよね・・・会話」

「言うな」

第十七章（後書き）

ステラはこの後自分の身一つだけで敵国に向かいます

第十八章

「きょうで、一週間か・・・」

敵国に来て一週間たった。この一週間がまたスリリングだった。

まず、レイモンドさんが戦友だと紹介してくださった方が巨人族でとても大きなお方だった、名前は確かクレト魔將軍といった、彼について回る雑兵のション・チャイは、もとは私と同じ故郷出身だと聞いた。何故ココにいるのかという経緯は聞かなかったから分からない。でも彼女はとても將軍に懐いていて、昔の自分と重なって眩しかった・・・。

次に奥様のララージニアさんは暇だといっっては王宮に行っていた。帰ってくると決まって向こうでちよろまかした御菓子を私に下さったけれど、たいいてい魔法でできた悪戯お菓子なので食べないことにした。

それからウィルシア

「・・・今日はテルカ・ユサラ殿のところかな」

テルカ・ユサラはとてもテルーカ・エニシンとそっくりなのだが、まず性別が違うし、本人も違う赤の他人だといっていた。

確かにユサラのほうが寡黙で威厳ある將軍だ、エニシンは軽いマッドサイエンティストだ・・・全く違う

ウィルシアはどちらとも仲がよかった。

「マリアン」

「シア、帰ってきたの？」

ココに来たときにウィルシアがいきなり出だしたのはあだ名を決めようということだった。

ということでは私はマリアン・・・で、ウィルシアのことはシアと呼び合いあうことになった。今ではもう、なれたものだ。

「寂しかったー？」

「レーガンがいたから寂しくなんて無かったわ、ね」

「ばふ！」

レーガンは毛が長い犬だ、何故かばふっと吼える。ある意味五月蠅くないからいいけど、悪いところは中々自分の足で歩こうとしな
いところだ、今も転がって移動している。

「歩きなさいよ」

ばふばふと足元で吼えるので仕方なく抱き上げる。

「マリアーンヌ！」

あだ名がレベルアップしている。

「ララーちゃんどったの？」

「あら、いたのウィル」

スタスタ歩いてくるとマリの肩を掴んだ。

「さあ、遊びに行きましょう」

「え？どこへ？」

嫌な予感

「王宮よ！」

・・予感は的中した。

第十八章（後書き）

主人公じつはコッチにきたほうが笑っているという・・・、

第十九章

「王宮に何しに行くんですか」

「決まってるじゃない、遊ぶのよ」

王宮に遊びについて軽がるとうこうもいとたやすく言える人も珍しいと思う。

「大丈夫、王様は妹にぞっこんだから妹の頼みは何でも聞くわよ」
なのに王様は浮気したんですかと聞きたい。

「それに王様はうちの家に逆らえないのよ、おーほっほほ」
「？」

王様なのに・・・？

疑問は沢山あったが気がつけば魔法で馬車の中に移動していた。

「って！私いくと言ってません」

「いいじゃないねえ？ウィル」

「そうそう」

「ばふ！」

レーガンもいるし・・・。

質とはいえ、敵国の女なのにいいのだろうか・・・っていうか、途中で魔法でワープするなら馬車に乗る必要はないのでは？！

ついた先は赤いレッドカーペットの上だった。目の前には大きな扉があった

「謁見の間よ」

兵士が二人、敬礼して扉をあけた。常連のようだ・・・。

「ルージャア！」

「ララー姉上！」

若い姫が現れた、幼い顔立ちが目立つ。

「こちらは我愚息が連れてきたアースグランドの娘、マリアンジェラよ」

「そう、姉上がつれてきたなら安心ね！私はルージャよろしくね」

「はい」

あたまをさげる、と顔を上げると王様が堂々と座っていた。・・王様も若いように見える。よく言えば活発とした、悪く言えばチャラチャラ

「朕はエリオルなり」

何故棒読み

「あのー一つお伺いしてもよろしいでしょうか」

「なんででしょうか」

可愛らしく小首をかしげた。

「おいくつでしょうか・・」

「13歳」

「若!？」

ニコニコとしている。

「王様は？」

「朕は今年36じゃ」

「・・23差」

「王様の別名ロリコン王」

「黙れ! ウイル・お前こそ隣国の姫なんて攫ってきやがって!」
さつきとは別の口調になった。

「っていうかエリちゃんもうそろそろ止めたら? 王様っぽくするの」

「・・王様じゃないの?」

「ん? 王様だけど? でもこの人『朕』とか『せよ』とか王『らしい』
っていうのが嫌いなんだってーおっかしいでしょー?」

どちらかというと王様にタメ口聞いているあなたのほうがおかしいと思う。

「エリオルー」

ルージャが王様に抱きつく。

・・うん、やっぱり魔法使いの国って不思議。

「で? ウィル君はどうなのかね? ん?」

「んん?」

「誤魔化すなよ、そこのお嬢さんだよ・・エミール攫うの失敗したからって理由でお前が連れてくるわけ無いだろう」

「あの、ミケーレなんだけど・・」

私の義兄さんエミールじゃないんだけど・・。

「まああれですよ」

ウィルシアは此方を見ながら照れくさそうに言った。

「一目ぼれってヤツですよ」

「え？」

・・一目ぼれ？

誰が・・誰に??

「え？え？え？」

「・・あのね」

ウィルがマリの手を掴んだ。

「俺、最初から・・君を抱いたときから離す気なかったから」
にやっと笑った。

「えー!？」

「なんだ、もうヤツたのか」

「「ただの抱擁!!!」」

もしかしなくても、私・・告白されてしまった・・？

どうしよう!？

第二十章

どうしよう、どうしよう

「あーっはっはっはっは」

「!？」

ウィルシアはいきなり大笑いを始めた。

「ははははは！ひーひー・真っ赤になってどうしようって顔して・
・分かりやすく、かーわいー」

「な」

顔を抑える、そんなに分かりやすかったのだろうか？

「マリアンヌは気がついてなかっただろうケド、この国に来てから
だいぶ表情柔らかくなったよ」

「え？」

そうなの？

「やっぱりさ、マリアンにはさこの国が一番あってんですよ」
ウィルはにっこりと笑いながら言った。

「ついでに俺と結婚しよう」

「大事なことをついでで片付けないで!？」

その突っ込みを聞いてララーニジアも大笑いを始めた。

もう、この親子は愉快なのはいいが、樂觀過ぎる

「だ、駄目」

一生懸命否定する。

「だって私、人質だし」

「そう思う？」

ウィルの言葉に驚いた。まるでその言い方・違うの？

「お前の国の王は、どうやらお前を救出する気はないようだぞ？」
え・・・？

「お前の国は俺の国をどう潰すかで策を練っている、どうもお前を
助ける気は無いようだ」

「それって・・・じゃあ私」

「ああ」

王様は目だけ憐れんだ顔をしているが口が笑っていた。

「切り捨てられたな」

泣きそうになった・・・。

「・・・」

結局私は影姫だもんね

「だからさ」

「ヤダ」

即答

「それはそれ、コレはこれ」

「ありゃ残念・・・でもさ、考えといてよ」

「そういえばさ、ミケーレだっけ？浮気相手の息子」

「ああそうそう」

いいの？正妃様がいらっしやるのに浮気の話して

「ミケーレって？」

「ん？ミケーレって言うのはね、君と結婚する前の一夜妻との子だよ」

「へえーようやりなさったなあー」

・・・駄目だ、突っ込みどころがいっぱいある

「あの、浮気って・・・正妃様13歳ですよね？」

「実はな生まれる前から婚約していたんだ」

ますますもって不可解

「占いが得意なんだよ王様の一族は、王様は15歳のときに運命の女性を占ったらまだ生まれてなかった。だから予約したってこと」

いやいや・・・まあいいや

「義兄様を、本当に王様になさるおつもりですか？」

「うんにゃ？」

否定した

「・・・あ」

そうだった、この人たち義兄様を生贄にするつもりなんだった

「あの、お願いですから」

手を組む

「義兄様を生贄になんてしないで・・・どうせ義兄様のこともどうでもいいと思っているのでしょうか？だったら構わないであげてください」

「あん？やだよ」

王様は駄々をこねる子どもみたいな口調で言った。

「パンドラの扉の向こう、どうなっているか知っているか？」

「さあ？」

「魔法使いって言うのもんは、好奇心が恐ろしく強くてな。見返りとか犠牲とかそんなのどうでもいいぐらい、自分の頭の中を知識で埋めたいんだ」

知っているけれど・・・

「それでな、あの扉を開けるにはどうしても高貴なる生贄が必要なんだよ、ミケーレなら両方の国の王族の血を引いているだろう？しかも嫌われているときた！ぴったり」

「ばふ！」

「わー！」

ウィルシアがマリを押さえた。

「まって！お願い・・・一発。一発だけでいいから殴らせて！」

「落ち着いてー！」

殴らせて！

当の王様は陽気に笑っていた。

第二十一章

「ステラ、どうしていつてしまうんだね」

彼女の家の前で、村の仲間達が次々と声をかけてきていたが、ステラはどの問いにも答えずにただ黙々と荷物をまとめていた。

「もう帰ってこないのか？」

「ステラ！」

とりわけ若い女性の声がした。

「・・・ケリー」

ステラの姉だ。

「アンタ王様に喧嘩売って二度この国に入れないって本当かい!？」

「うん」

「『うん』じゃねーさ!! アンタ何考えてんだい!!」

ステラの手が止まった。

昔からケリーは気が強く怒ると誰にも止められないぐらい捲くし立てる。ステラは心の中でうんざりしつつ荷物をまとめる手を止めた。

「どうせアンタ一時の感情だけでそうなったんだろ? 謝れば許してくれるかもしれない! ホラ」

「ケリー! 平気だってば! いいんだ、もう」

ステラは荷物のヒモをキツクくくり、ソレを抱えて家をでた。

家族が窓から不安そうな顔で眺めてきた。うん、親孝行できなかった馬鹿娘でごめんな

「ケリー・・・姉ちゃん、母さん・・・今までありがとうな」

それだけ言っていると彼女は歩き出した。

今までずっと住んできた村を離れるのはつらいが、後戻りはできないのだから今更後悔などはしない。敵国に言ったら殺されてしまいかもしれない・・・それでも、いくしかないと彼女は思った。

たとえば、一時の感情で言ってしまったことだとしても。

(アタシの馬鹿)

歩いていくと、馬に乗った立派な服を着た女性がいた。

「・・・誰だお前」

もしかして、王の命令で暗殺・・・とかか？身構えていると女性は馬から下りた。

長い綺麗な髪がふわっと揺れた。自分の髪の毛短いから少し・・・うっとおしいと思ったので、思い切って相手の髪の毛を切ってやりたくなった。勿論しないけど

「ふん、自分はケリー・ボールドウィン・・・『聖女隊』の一員だ」

「ってことは平か」

「平言うな！！」

歩いてくると目の前で止まり、スッと何かを差し出した。

「巻物？」

ソレをおもむろに目の前で広げられると、なにか書かれていた。
なになに

「『勅命 敵国に速やかに進入し、弱点を密告せよ』・・・卑怯だな
おい！！」

「卑怯言うな！これも戦略の一つなのじゃ！」

ステラは目の前の長身の女性を見た。

ケリーつつったよな？あたしの姉と同じ名前じゃん。しかも同じぐらい気が強いなあ・・・よし、もし自分の周りに女の子を産んだやついたら忠告してやろう！『ケリー』は駄目だと

「なんか失礼なこと考えておらんか」

「別に・・・てかアタシ流刑じゃないの？」

「流刑ついでだ、向こうは何を余裕ぶっているのか知らんが、我国から出でいくものをあっさり回収するからな、お前なら口が固いだろうという判断のことじゃ」

成程、まあ否定はできないな。

「分かった、受けてやるよ」

「上からじゃなお前」

「あ、でも条件ある」

「なんじゃ！」

ステラは指さした。

「馬おくれよ」

徒歩は無理だろ徒歩は。ずっと悩んでいたところだったんだよな

「、村で馬飼ってる人がちょうど商い^{あきな}に出ていたところだったんだよ
ラッキー

「・・・やるか！」

「ええー」

この平はえらそうなわりにはケチだった。

第二十二章

とある森の場所で、広大な空を眺めるインファとシーヴァーの前に舞い降りたのは、一匹の白く雄々しい竜だった。

二人は頭を下げると竜は咆哮した。

「長、ココは人間の国・・・お静かに願います」

《おお、それはスマンな、しかし、ついぞ久しぶりに会ったわが子らを見れば喜ばぬ親など居るはずも無かろうて、おっと親というよりは爺かな》

二人はお互い見合って苦笑いを浮かべた。

「皆は元気ですか？」

《ああ、クルーとヘリンクが契りを交わし、マハーモが元気な子を二匹産みおった。これで竜の子は全部で13になった・・・まだまだ少ない・・・我らが再建するときはまだまだ遠いようだ》

「長！」

インファは声を荒げた。止めないと永遠はなし続けるのだ。

「長、もうすぐ人間達は魔法使いどもと戦争をするようです」

「我々も加勢する様にと王は仰せです」

《それはできん、我々は魔法使いどもの大殺戮のせいで我らはいま絶滅の危機にあるのだぞ》

ゆえに竜族は魔法使いを心から憎み、人間の側についた。

「ですよねー」

インファは溜息をついた。

《・・・しかし、断れば我らの居場所がなくなるのだらうて・・・致し方あるまいに》

「ご安心を、王には私どもだけで事足りるように話をつけます」

《お前達だけを犠牲にするわけにはいかん！》

「いいえ、どうぞお気になさらず」

シーヴァーは頭を垂れた。

「私は魔法使いによって人の姿に変えられましたが、竜の力はかわりありません」

《しかし・・・》

「ご安心なさってください、このインファ、育てていただいたご恩、お返しいたしますわ」

《二人とも、気をつけろよ》

竜の長は翼を広げた。

《おお、そういえば・・・とある筋から聞いた噂なんじゃがのう》

「なんでしよう」

長は首を下げてシーヴァーによった。

《お前は中々人間の女にモテいるとか・・・いやはやもてる男はつらいのおゝワシもお前のような人間の姿に変わってしまったのなら、もてていただろうのう、はっはっは》

「長」

《おお、おお・・・そうじゃった早くいなねばな、だが忘れるなよシーヴァー》

「？」

《人間の娘とは契るなよ、インファの母のような悲しい想いは、しとうないからの・・・》

「分かっております」

《でわ》

翼を広げ飛びだった、咆哮が遠くまでに響き渡り、二人は姿が見えなくなるまで長の後姿を見守った。

「噂源はお前だろうインファ」

「あら、失礼ね！違うわよ」

「そうか・・・なあインファ」

「ん？」

シーヴァーは歩きながら続けた。

「俺はお嬢様を助ける」

「え？」

「戦争になれば敵国に真っ先に特攻する。そして、助け出す」

「命令に加わって無くても？」

「ああ」

インファは微笑んだ。

「じゃあフォローするわ」

「ありがとう」

しばらく二人は森を歩いた。するとミケーレとケリー嬢がいた。なにやらもめていた。

「何をもめているんですか？」

「酷いんだインファ、ケリーさんが新しくボクの護衛に付いたって言うんだ」

「嫌なんですか？」

「嫌だよ！」

「なんじゃと!？」

「ひい！」

一喝されて身を小さくさせた。

最近戦争の準備を始めたためテゼヴル將軍は新兵の指導に勤しんでおり、ミケーレの傍につくことはできなくなったのだ。もちろんインファも聖女隊の指導を行う。

そこで聖女隊の中でも成績優秀なケリーがお勤めをすることになったのだが、相性が合わないらしい。

「インファ、私は偵察にいつてくる」

「ええ、気をつけて・・・」

シーヴァーと別れた。ソレを見ていたミケーレは首をかしげた。

「やっぱり・・・もしかしくなくとも？」

「さ、帰りましょう」

ミケーレは勘違いしたままであった。

第二十三章

アースグランド国は人間の住まう国、農作や酪農・鉱山の発掘など活発に行い国を営んでいる。そしてウェザーミステルは・・どうやって国を営んでいるのかまた謎なのであった。

「マリアン」

ウィルシアに名を呼ばれ、顔を上げた。机の上においてあった本を閉じる。

「んー？何読んでたの？」

「歴史書・・なんだけど、どうしてこの国の歴史書・・薄いなの？」

「書く人がいなかったんでしょ」

へー・・って納得できるわけ無いだろう。

「・・ねえシア」

「ん？」

彼の家に来てからというものの、質をしてではなく、家族として迎えられていた。前の暮らしより此方の暮らしのほうが楽しいといったら、向こうの人たちに悪い気もする・・。

「私、人質なのに、いいのかしら・・部屋一式貰った上にこんなによくしてもらって」

「別にいいんじゃない？そのぶんララーちゃんに遊ばれてるでしょ？」

「・・・・・」

ララージニアさん、普段はいい人なんだけれど・・たまに度を越した悪戯をしてくる。

「・・うつ？」

「？」

「くしゅん!!」

なにやら急にくしゃみが出てきた。

・・しつぽ？

「スカート中ではえてるのかなって」

「変態！！！！」

ゴス！

「ウィルシア、こんな所にいたか」

「父上なんか用？」

「ああ、予言爺のいうことでは、近々むこうが国に攻め込んでくるらしい」

「確率は65%」

「うーん、微妙ですなー」

「戦争？」

不安な気持になり、聞くとシアが手を振った。

「小競り合いだよ」

「本当？良かった・・ってなんでララさん倒れてるの？」

「み、耳・・ぷぷぷ、似合ってるもうずっとソレでいたら？」

「嫌ですよ！」

人が真面目に心配しているのに、何しとるかこの人わ

「心配する必要なんて無いわよ、マリアンヌ、わが国の魔軍は強いもの。ねーレイモンド」

「ああ、だが万能ではない、油断すれば負ける・・肝に銘じておくんだ。いいなウィルシア」

「了」

指をマリアンジェラのほうに向けて鳴らした。

「解」

ぽふ、魔法が解けた。耳がもとの普通の耳にもどった。
良かった・・。

「食事の前に私は庭の手入れをしてくるわ」

「手伝おう」

「ありがとうレイモンド・・じゃあね」

二人の仲の良い夫婦は去っていった。マリも読書を開始しようと

たしかに、シーヴァーは・・・私を拒絶した。でも今までの想いを消すことはできない・・・。
できないよ

第二十四章

流れる曲に合わせて煌びやかなドレスに身を包んだ女性が男性にエスコートされて踊る。

今宵、パトガー侯爵の娘の婚約パーティに招待されたウィルシア一家に引きずられて、私も連れて行かれてしまった私。パトガー侯爵は顔が広い方らしく、将軍クラスや王族クラスも参加していた。いいのかなー私人質なのに、いいのかなー

「ねえシア」

マリアンジェラのダンスのパートナーウィルシアは足元を見ながら返事をした。意外なことにクラシックダンスは苦手らしい。

「もうすぐ奇襲にあうって予言受けたのに、こんなことしてていいの？」

「いいんじゃない？それに65%だしよ？所詮予言爺の予言はくじ引きと一緒に当たったり当たらなかったりだし・・・とと」

「大丈夫？・・・少し休もうか」

ダンス場所から隅に移動した。

「ふー他のダンスならいいけどさー」

「ぶぷ、本当？」

「信じてないでしょー」

「お前しきたりとか苦手だからな、馬鹿だから」

「うん？おーテルカちゃんかー」

テルカ・ユサラ將軍がいた、コレで会うのは二回目だ。

「こんにちわ、テルカ將軍・・・パートナーの方は？」

「・・・テルーカに頼んだが、断られた。否、断った」

「あらら、なんで？」

「交換条件が最悪だった」

「なんだってテルーカ・エニシンだもんね、でも女性を連れてこな

きやいけないのにどうしたわけ？」

パトガー氏は交友としての出会いは好きだが、恋愛的な出会いは凄く嫌っている、というのも昔パーティーのときに恋人を他の貴族男子に惑わされ、結局別れる羽目になったからだ。

「精霊をつれてきた。風の精霊だ・・気まぐれだから今どこにいるのやら・・という事で可哀想な私めと踊っていただけませんか、マリアンジェラ姫」

「だーっと、それは駄目かなー？」

私の意志は尊重されないらしい、二人はもめて好き放題言い出した。

「おお、お前等も来ていたが」

「クレア魔将軍」

と、その傍らにちんまりといるのはショーンだった。

「お久しぶりです！マリアンジェラ様！覚えておいでですか！？自分は魔将軍クレト部隊所属ショーンです」

「こら、ショーンここは軍地じゃないぞ」

「は！そ、そうでした、すみません」

なんだか将軍の隣にいと小さく見えて、可愛いなあ

「大小魔薬は何時まで保つんだ？」

「エニシンが作ったやつだからな、いつでもいける」

「さすっがぁ」

マリアンジェラは目を細めた。

ココの人たちは酷く意心地のいい空間を作ってくれる、苦痛だった社交パーティーも好きになれそうだった。

「久振りに酒の飲み比べでもするか」

「「いやだよ」」

クレトの提案にウィルシアとテルカは即否定した。

「おっさん巨人じゃん！飲む量がちげえーし」

「しかも下戸じゃないか」

「うっせーレディが二人もいるんだ、気を利かせろよ」

「ああ」

今度は三人でじゃんけんをはじめた。子どもっぽい動作が可笑しくてシヨーンと二人で笑った。中々終わる様子が見られないので二人で隅にある椅子に座ることにした。

「それ、その指輪、ウィルシア卿の者ですよね」

「え？ どうして分かったの？」

「どうしてって、あの方しかいらっしやいませんよ、《愛晶》の魔法を使える方」

「・・・何ソレ」

聞くだけで恥かしい。

「高度な魔法を使える魔法使いのみ使用できるという、愛の絆の魔法です。どちらかが死なない限り指輪が外れることはありません」

「そうなんだ、・・・って別に私シアと婚約者ってわけじゃないの」

「ええ？ そうなんですか？ ってことは求愛ですね・・・羨ましいです、女性は皆憧れてるんですよ」

「そうなの？」

「はい、伝説の一つにララージニア様がその魔法をレイモンド卿にかけた、って・・・本当なら指に毎日の色が変わる指輪をしているはずです」

「へー、物知りなんだねシヨーンさん。シヨーンさんも私と同国出身でしょう？」

「はい、・・・親が税金払えなくて・・・親は私を惜し気もなく妓楼に売ろうとしました」

「・・・」

「でも、そこでたまたま私の村近くで国の挑発していたクレト将軍が私を救ってくれたんです。その時親は死んでしまいましたが、後悔はありません」

シヨーンは真っ直ぐマリアンジェラの目をみた。

「マリアンジェラ様は、人質にこちらに来たと聞きました」

「・・・」

「いずれ貴女はアースグラウンドに帰ってしまわれるのですか？」

マリアンジェラは答えられなかった。帰らなければならないとは思いうけど、帰ったところで居場所がないような気が・

「お嬢さん、私どもと踊りませんか？」

「え？」

厳つい男と、細長い顔の男・二人はシヨーンとマリアンジェラの身体をジロジロ見て微笑んだ。

気持悪い。二人の心の声が一緒になった。

「いえ、私達踊る人がいるので・」

「いいじゃないですか、一曲だけ」

つかまれた手が湿っていて、ゾワツとした。

「止めてください」

「何故嫌がるのですか？」

「離して」

シヨーンは掴まれた腕を強く押しのけると、男は自尊心が傷ついたらしい、むっとした様子で鼻で笑った。

「ふん、こっちがせっかくこの界じゃ見ないと思って誘ってやったのに・ことわるなんてな」

「ああ、どうせ成り上がりか、教養のない家の育ちだろう」

「なっ！」

シヨーンは男どもをキツと睨んだ。

「う」

びくつと男は震えたが、そんな自分もいやだったらしい、誤魔化すようにワインの注がれたコップを掴んだ。

「なんだその目は！」

バシヤ！

「きゃ」

シヨーンのドレスがワインの赤に染まっていく。

「ぷーははは！下女にはソレがお似合いだぜ」

「つまらない女を相手にしたな、他のところにいこうぜ」

「ああ」

つまらない、女・・・？

・・・・はあああああああああ！？

頭の中で何かが切れる音がした。

「お待ちなさい！」

マリアンジェラは持っていた扇子を男どもの目の前に示した。

「お前達、淑女を汚すとは何事ですか、そもそも名も名乗らず、礼儀に欠けているとは思わないのですか」

「なんだ、お前」

「淑女がぺらぺらと、はしたないな」

「はしたないのはそちらだ！」

ションも加勢した。

「うぐぐ」

周りの視線も集まり男達の立場もなくなってきた。

「くっそがあああ」

逆上した男がナイフを掴み、襲い掛かった。

女性の悲鳴が上がった。

第二十五章

「あぶない！」

ショーンは男の腕を掴むと、そのまま投げ飛ばした。

「貴様」

もう一人の男が三步引くと、家来を呼んだ。投げ飛ばされた男の家来も現れ仇を討てという命令を受けて、数が一気に増えた。

マリが逃げようとショーンに声をかけようとしたら、ショーンの目がすでに戦士の目になっていた。止めようがない……。

「……はは」

いくらショーンが鍛えているといっても、丸腰でこのしかものの数・・絶体絶命。

「襲えー」

ぴ、っしやああああああああん！

「うわあああああああ」

雷が家来を一気に倒した。目をぱちくりさせているとフワツと目の前にウィルシアが現れた。

「あんれー？ よってたかって女の子を苛めているのは誰かなー？」

「う、ウィルシア卿！？」

「ショーン、どうした。その服・・いい柄だなあ」

「げげ！ クレト魔將軍！？」

「女性を苛めるなんて最低だな」

「テルカ・ユサラ將軍！？」

この国トップクラスが三人。しがたい貴族二人が真っ青になるのも無理はない。ショーンは將軍を見るなり申し訳なさそうな顔をした。

「なんだ！ 騒がしい！」

拳句、パトガー侯爵まで現れた。

「ねー自分の意思で消えるのと、消し炭にされるの・・・どっちがいい？」

「「じ、自分で消えますー！！！」」

二人は自分の従者を引き連れて逃げていった。パトガーはソレを見たと長くなった髭を撫でた。

「どういことかね」

「何が？」

「とぼけないでくれたまえ、ウィルシア君、君の一族は偉大だが・・・なぜ騒ぎを必ずおこすんだ」

「おこすんじゃない、向こうが来るのさ、争いの女神も俺の魅力にめろめろなんですよ」

「そりゃいいな」

クレト將軍も笑った。笑い事ではないと侯爵は溜息をついた。

「さあ、皆さんこのまま楽しんでってください」

曲がもう一度流れる。

「んじゃ申し訳ないけど帰るわ」

あっさりウィルシアがいうと、分かっているとしてもいいたげに片手を挙げ、去っていった。

「彼は母の子分なんだ、ララーちゃんはじゃじゃ馬だったから」

「へえ・・・」

マリアンジェラの手をとると、そのまま外に出て行った。

「帰ろうかねー」

「あのさ、シア」

「ん？」

「ごめんね、私のせいで迷惑かけて」

「いや？いつものことだから」

・・・いつものことなの？



「クレト將軍・すみません」

「なぁに、元気があってよろしい！なぁテルカ」

「そうですね、このぐらいの気迫がなきゃ魔軍団に所属できませんね、あんたのせいで」

「なっはっは」

將軍は、ショーンの頭を撫でると抱き上げた。

「お前はもっともっと、強くなる、いずれは俺よりも強くなれよ！」
「はいっ！！」

変な絆だと思いつつテルカは自身を風と化させ消えた。



家に着くと、マリアンジェラは目を見開いた。

「・・・マリか？」

「・・・ステラ？」

そこにいうのはなつかしのステラだった。

「っステラあ！」

抱き合う、懐かしい匂い・・・手荷物一つできたらしい。

「どうしてココに？」

「王様怒らしちゃってさ・・・追い出された」

「えー！？」

「えーコホン。もしもし？」

シアはステラの顔を見た。

「一睡もしてませんって顔だね〜どう？寄ってく？」

「・・・いいのか？敵国から来たんだぞ」

「マリ안의友達だろ？なら問題ないっしょ」

「・・・あんがと」

ステラが仲間になった。

第二十五章（後書き）

ステラさん長い（けっこう早い）時間をかけて、マリアンジェラと再開。

ステラのほうが警戒してるけど、ウィルシアくんはオープン★

第二十六章

「レイモンドさん、彼女は私の友達ステラ・ジョーン」

ステラは頭を下げた。レイモンドは疑わしげな目で見ていたが、ララージニアは娘が増えたと思っっているらしく嬉しそうだ。

「日の光を十分に受けた健康的な肌してるわね、好きだわー」

「ちょ」

ステラの肌を撫でながらララーはニマニマと笑っていた。そのスキんシップがだんだん激しくなっていた、ステラが暴れる。

「ぎゃあああああああ！！？どこ触ってんだあー？！」

「うふふ、んふふふふ、うふふふー」

「ぎゃあーぎゃー！？」

マリはなんとも言えず見守る。なぜなら自分も受けた洗礼だから・

「ララージニア」

「何レイモンド」

名前を呼ばれピタツと止めた。

「あまり、馴れ馴れしくするな・攫われた友に会いにわざわざ危険を犯しに来ると思えん。怪しい」

「そんな・」

マリが心配そうな顔をした。が、ソレと反対にウィルシアは笑っていた。

「まーまー、で？どうだった？」

「そうね、心配と勢いだけで来た感じ？」
「？」

レイモンドは髭を撫でながら微笑んだ。

「なるほど、先ほどは失礼した。マリの親友となれば我家は喜んで歓迎しよう」

「え？」

ステラの目が丸くなる、マリも丸くなった。

・・なんで？

「ララーちゃん得意の魔法、《心眼法》だよん、心の奥そこに沈む感情を読みとる。欠点、平気で悪いことできるやつにはあんまり意味ない」

「でも、ステラちゃんそんなに悪い子じゃなさそうでしょう？」

ステラは汗を流した。

「ただのセクハラじゃなかったのか？」

マリもうんうんと同意を示した。

「安心していいのよね」

ララーが言うとステラは頷いた。

「じゃー歓迎会しよー！！」

「おー！」

どっかーん！！！！

・・え？家が、天井が・・空が見えますよ？

「え？えっ」

「あらー？」

シアが汗を流して両親を見た。

「チェツピー！」

ダチョウのような、ヤギのような、ライオンのような・・動物。

「うおおお！！！！？」

ステラが攫われた。

「おおー！？チェツピー！駄目駄目！返しなさい」

シアがあわててチェツピーをしかる、と悲しげな顔をしながらステラを降ろした。

真っ青の顔をしたステラが汗を流しつつ上を眺めて、叫んだ。

「なんじゃありゃあああああああああ」

「ごめーん」

シアはテヘッと笑った。

「あのコ実験狂が主人でさ、失敗作っていわれて捨てられてたんだ。んで拾ったんだ」

「そうなんだ・・今まで何処にいたの？」

「かわいそうだろう？」

「うん・・で、今まで何処にいたの？」

レイモンドは電話を片手に修理を呼んでいた。

「あー」

折鶴が空から飛んできた。ララーはソレを手にとると開いた。

「あら、妹からだわーえーつと?・・『お茶会開くの来て下さい?』だって」

「行って来い・・家のことは私がしておくから」

「愛してるわよレイモンド」

ステラが小さい声で「安い愛だ」と呟いた。

「さーステラちゃんも行くわよ!誰かーフリフリの服をー」

「ふ!?!」

ステラが嫌そうな顔をした後マリアンジェラに耳打ちした。

「ど、どこにいくってんの?」

「王宮かなー」

「な!?!王宮?!アタシただの農民だよ!?!は・・入れっこないって!」

どころがどっこい入れちゃうんだなー

「え?なに?何微笑んでんだ?なあ?ねえ・・ちよつと!?!つてえ!助けてー!?!」

この館のお手伝いさんたちによって、ステラは連れて行かれた。次会うときはきつと・・フリフリだろう。

「うきやあああああああ!?!」

それにしだってステラ・・悲鳴あげすぎやないかな?

第二十七章

うとうと・・・

『お嬢様』

ああ、優しい声・・・

『お嬢様、泣かないでください。私が居ます』

嘘吐き

『お嬢様・・・おいで・・・マリアンジェラ』

嘘吐き・・・私のことなんて、どうでもいいんでしょう・・・馬鹿

馬鹿・・・

「マリリアン？」

「っ」

目を開けるとシアの顔が目の前にあった。

「きゃ!？」

「移動魔法が嫌って言うからわざわざ馬車で城まで入ったのに、寝ちゃったら風景なんてヤツパリ関係ないじゃないの、あー腰痛いったら」

「ララーちゃん婆くさい」

「あ？」

びゅおお。氷の粒が飛ぶ。

それにしても、こうも軽々しく王宮に入れる国なんて、どう考えてもこの国だけだろう・・・。他国の者でも、全く警戒する様子はない。

不信そうな顔をしたステラも驚いた様子で恐る恐る私の後ろをピツタリくつついて歩いていった。

「ねーマリ怪しくない?いくら知り合ってたって、こんなあつさり通れるもんじゃないはず・・・」

「って言われてもね」

通れちゃうんだから仕方ない。

しばらく歩くと綺麗に手入れの行き届いた庭が見えた。どうやらココが城の中庭らしい。

「へー、魔法使いの国の花ってもっとおどろおどろしいの想像してた」

ステラが素直な感想を述べるとシアが微笑んだ、過去にそういったものでも存在していたようだ・・

「おい？ルーシア？」

スタスタと案内していた兵士よりもララージニアは先にかけていった。

「いいのかな」

ステラと後からのんびりいくと、長椅子に横になっている王様の上に乗っているルーシアがきゃきゃと王様の顔に花をばらまいていた。

ラブラブしている・・。

「おい」

「きゃー」

お姉さま仮にも王様達の座っている長椅子を蹴飛ばすなんて・・
すごすぎる

「お茶会しないのならララーちゃん帰るわよ!!」

「ごめんねお姉さま」

気を取り直してお茶会の席に座る。

膝の上にルーシアを乗せたままの王様はステラを見た。

「それは？」

ソレ扱いされてステラは睨む。

「マリアンジェラの親友だって、向こうの王様怒らせて国追い出されたんだってさ」

簡単にシアが紹介すると王様はふーんっただけ返事すると後は気にする様子を見せなかった。

紅茶に花びらが一枚浮いていた。

「・・いい香り」

ふと、シーヴァーのことを思い出した。
(ひさしぶりにシーヴァーの夢を見たな)

「――どうおもう？」

「え？」

急に話題を振られ、困惑する。

聞いてなかった・・。

「だから、王様奥さんと仲良いでしょ？」

「そうですね」

目のやり場に困るぐらい。

「もし、離れ離れになったらどうなるかなって話」

「どうなるんですか？」

「質問返しはセコイよ」

シアは御菓子を手にとって二人を見た。

「うーん、発狂しそうだよねー」

「愚かな」

王様は御菓子をルーシアの口に御菓子を入れながら鼻で笑った。

「発狂どころか、ルーシアと俺を引き裂いたヤツをこの世で最も残酷な死刑送りにしてやる、それどころかそのヤツとかかわったこと
のアルやつは全員同罪だ」

「最低だ」

ステラの言葉に危うく頷きそうになった。

「それほどまでに愛しているということだ」

ふふんと自慢げだ。

「ルーシアは？」

「お菓子があればいいよー」

「ガン！？」

愛はすれ違いのようだ。

「俺ならー」

シアはマリの手を掴んだ。

「好きな人を放したりしませんか？」

「・・・っ!？」

どうしてそう齒に衣を着せぬことを言えるの?! 聞いてるほうだ
恥かしい!!

「というこゝで俺と結婚しない？」

「だか・・・」

どつがああん!!!

「・・・ん？」

王様が首をかしげたのと同時に、兵士が一人傍により王様に耳打
ちした。

「ほっほーう」

「なんて？」

ルーシアが聞くと王様はにっこりと笑った。

「アースグランドが攻めてきたってー」

「「笑顔で言うことじゃないよ!？」」

ステラと二人で突っ込んでしまった・・・。

っていうか、なんでそんなに落ち着いてお茶飲んでるの!?!?

「あ、でも大丈夫！クレトが居るだろう！クレトが敵を一掃すれば何の問題もない」

「ソレが王様、前回縮小魔法薬を飲んでからなんか元に戻れなくなっただけです」

「何ー！」

ルーシアも不安げに王様に抱きついた。

「敵の数は」

「100万が先陣きって攻めておりますが、千は後ろで控えています」

「最強の盾が居ると思って油断していた」

「油断しすぎて関門閉めるの忘れていました！」

「アホか」

怒られる兵士をみてマリは不安を感じた。大丈夫なんだろうかこの国・・・

「敵は今どこにいる」

王様はルーシアを姉に任せると歩き出した。

「レイモンドが今どうなってるか見てきなさいウィル」

「あいあいさー」

魔法でシュンツと消えた。

中庭は女だけになった。

「・・・」

なんとも沈黙が重い

「どうして、争うんでしょうか・・・」

なんて、聞いても分からないことだけど・・・

「そうね、アースグランドでは教えてくれないらしいわね。ただ戦えという命令のみ従う・・・」

誰も疑問に思わない

「パンドラの扉のことは知っています？」

首を横に振る。

「コノ世を支配していた邪神を封印したという扉よ」

「何ソレ」

ステラは馬鹿らしいという顔をしている。実際は扉というよりもっと大きな門のようにも見えた。

「封印するための扉を作ったのがわが国の始祖、そして封印するまでに持ち込んだのが其方の始祖」

「始祖同士は仲間だったのでしょうか？後世で仲が悪くなったわけじゃないの？」

「いいえ、この話には実は続きがあったね」

冷めたお茶を飲み干す。

「封印するために、我始祖は『無色万象』に手を出したの、それは二人の間でどんなことがあっても開けてはならない約束のものだったわ。封印した後其方の始祖は憤慨し我始祖を責めた。我始祖は偉大ではあるけれど、寛大ではない」

言い合いになり、二人の仲はますます険悪化し、そのまま二人は別れた。

「魔法使いって私達のことをそう呼ぶけれど、私達もれっきとした人間よ。厳密に言えばね」

「そうだったんだ」

ステラはショックを受けた顔をした。

「お互い憎しみ合い、殺し合いその連鎖が続いてるってわけ」

「そもそも『無色万象』ってなにさ？」

「知らないわよ、誰も知らないんだもん。始祖以外わね」
ズズズン・・地が揺れる。

「きゃ」

「激化しているみたいね！」

シュン

「ララーちゃん父上は・・・どこにいるのやらさっぱり」

「そう、私も出るわ」

ララージニアの服が変わった。

「駄目だって！」

「五月蠅い！巷じゃ最強で通ってんのよ！」

「でも戦争じゃあ弱い女性だって！まーいざとなったら俺に任せ
といて『解除』さえしてくれれば最強だからさ」

「解除？」

「俺、この国で二番目に強いので、本当ならね」
「本当なら――？」

「ずどどどん！！またふたたび地鳴りがした。」

「マリアン頼んだよ」

「シア！」

第二十九章

「右だ！右に回れ！聖女隊ー前え——！！！！」

前線を走っていた兵士は後退し、後ろに控えていた聖女隊が前に出て応戦する。

聖女隊の特殊攻撃で魔法つかいどもの魔法を使えないように魔道を封じていく。

「これで五分五分だ！」

ケリーは汗を流しながら叫んだ。ツルギをもって敵に立ち向かう。補佐団長ルジオが聖女隊を守りつつ前進していく。

「推して参る！！！」

次々と敵を薙ぎ払っていくと、魔法使いも新たなるものを追加した。無数もの合成動物キメラが現れ力の差が相互入れ替わる。

「はあっ・・・！はあっ・・・！マリアンジェラは無事かソレだけが心配じゃ」

敵を切りつけ血で汚れた戦士は練習とは違う本物の戦争を体験し、震えていた。ソレを隠すように敵に喰らいついていく。

「いったん退けえー！！！」

総司令官のほうから命令があがった。

「——な」

優勢なのに退くだ！？そんな馬鹿な

仲間は退いていく、ココには居たくないというように、そのような弱気なところを見せたら向こうを付け上がらせるだけじゃ！愚かな！！自分は違う！戦う

「うおおおー！！！」

「なっ」

魔将軍隊長クレト將軍が現れた。巨人族特有の馬鹿力とごり押しをしてきた。

「逃げろオオオ!!!」

敵味方がもうごちゃごちゃしていて分からない。

大きな素手が目の前に・・・死

「きゃああああああああああああ!!!」

・なんともない？

「!？」

目の前には片手で巨人の手をふせいでいる謎の仮面の男が居た、戦場に居るのにもかかわらず服装は鎧ではなく執事のスーツ。

何だコイツ

「・・・竜神族か！」

クレトは楽しそうに笑った。

「楽しもうやあ」

巨人族と素手でやり合っている・・・人間ではない!？

「・・・っ、助力感謝する」

退くしか、なさそうだ・・・。

糞!

「アーロズ將軍!どこですか!」

將軍とはぐれたハレルはへっぴり腰で剣を持って走っていた。

「将ぐ・・・わ!」

横から剣が飛んできた。

「死ね!アースグラン드의雑兵め」

「うわああ!」

短い髪の男らしいナリをしているが、女性のようだ。しかもよく見れば魔法使い特有の濃い色をもっていない、どうやら同属らしい。

「ひゃあああああ!？」

ザシュ!

「がっ!おのれ!」

女性は振り返りざま剣をふった。

「ハレル君大丈夫かい」

「アーロズ將軍！」

女兵士はポケットから小型爆弾を出してアーロズに投げつけると、一拍もおかずに剣で一の字を描いた。

「將軍！」

煙が上がる、が

「うぐ！？」

「残念なかない戦闘センスだけど、私も巨人族の血を引いてるのさ、人間の血よりも少し濃くね」

掴んだ首がメキメキという。

「あ・・・が・・・ぐ・・・し・・・よ・・・軍」

「ん？」

「将・・・軍ずみま・・・ぜ」

アーロズの手を引っかいていた手が、だんだんと力がなくなっていく

「ショーンを放せ！糞女が」

「うぎゃ」

アーロズは巨大な足に蹴飛ばされ飛んでいった。

「アーロズ將軍！」

ハレルは急いで追いかけていった。

「ショーン平気か？」

「ごほ！がはがは！ごふ・・・じょうぐん・・・ごほ・・・将・・・軍・・・」

ショーンはわざわざ小さくなって介抱してくれているクレトに抱きついた。

「・・・將軍！ごほごほ！！・・・將軍！將軍！クレト將軍！！」

「ショーン」

ああ・・・役立てなくてすみません。

「退けー！！休戦だあー」

第三十章

城の大居間にて座り時を待つ。

「・・・え」

マリは耳を疑った。

「あそこに、義兄様も居るの？・居るの？」

二回も聞いてしまった。いったん休戦に入り戻ってきた王様が頷いた。

「ああ向こうの王様の隣にビクビクとしていた、俺のどS心が疼くぞ」

「やめてください」

シアは突如現れると血まみれの姿だった。

「きゃ！？」

「ふうー・・・戦場の中出かけまわったら血まみれになっちゃったよ」

「そんな雨に降られたみたいと言わなくとも・・・」

「で？どうだった」

王様は手ぬぐいで自分の顔についた血を拭った。

「失礼いたします！王様」

一人の兵士が跪いた。

「敵、城の裏にまで移動していました！城が包囲されています」

「なんだと？」

「敵に『竜神族』が二人、協力しているそうです、名をインファとシーヴァー」

「シーヴァー！？」

・・・竜神族・・・だったの？

「インファといえば、先々代の王の時代、とあるマッドサイエンティストが、人と竜が交わった場合どのような子が産まれるかという実験で生まれた女だろう」

先代の時代でそのような実験はすべて禁止された。

竜のオスは仕組まれたことだとも分からずにインファの母と恋をし、科学者から上手く言いくるめられ人間になるクスリを飲み、人としていき、結婚し子を産ませた。そして、子が生まれるの同時に母親は死んだ。その悲しみで竜は狂い科学者を食い殺し、そのまま大暴れしたので最強な盾は竜を殺した。

残されたのは母親の血に濡れた娘のみだった・・・。

「インファのお母さんはどうして死んでしまったの？」

「・・・」

王様は黙った。誰も何も言わなくなった。

「いけないようなことか？」

ステラがそう聞くと王様はルーシアが寝ているのを確認して口を開いた。

「インファは母親の身体を切り裂いて産まれた。その頃には既に三歳ぐらいの大きさに成長していたらしい・・・俺の親父はソレを知ってこの国で新しい法律を作った『同属以外とは交わることを禁止する』ってな」

死・・・んだ、子に殺されて・・・？

じゃあシーヴァーも？

「でシーヴァーってのは誰だ？」

王様がここを呼んだのかと思い、ビックリしたが思い違いらしい。

「昔竜族との戦いでかけた呪いがいまだ残っているようです、見た目は人間ですが力は竜族のままです！クレト將軍とも互角に戦っています」

「巨人族に引けをとらない竜神族か」

王様はめんどくさそうに欠伸をした。

「戦は明日だ、今日はもう寝る、ミナ！後の世話を頼む。じゃあなウィルシア」

「じゃあ俺らも帰りましょうか」

指で魔法ノ陣を描くとそのまま館に移動した、館では鎧を脱いでいるレイモンドと鉢合わせした。ララーが新しい服をもって現れた。「あらお帰り、どうも劣勢みたいよ」

「最強な盾はどうした、たく・・国の大変なときに」

文句を言いながらレイモンドはララーの持ってきた服を持って歩いていった。

「ショーンが負傷したんですって」

「ええ」

ショーンが？

「向こうのアールズ女將軍にやられたらしいわ、自分が潰した聖女隊をもう一度結成して前線に出すだなんて馬鹿じゃないの」

ララーは憤慨したように地団駄ふむとレイモンドに呼ばれ去っていった。

「俺も風呂に入ってくる、二人は部屋で休んでてさ」

「うんシアありがとう」

ステラと部屋に歩いていく。なんとなく無言になる。自分の国が勝っているなら喜ぶべきなのに、あまり嬉しくないのはどうしてだろう・・。

「ねえステラ」

部屋について二人並んでベットにすわる。

「ん？」

「私ね、シーヴァーのこと好きだったから、告白したの」

「うん」

「そしたら、さえぎられたの」

「うん」

最期まであなたは言わせてもくれなかった。でもそれは

「竜神族・・だからかな」

インファの母親の話、インファとの付き合いの長いシーヴァーが知らないはずはない。知っていたからこそ拒絶した

「私ね、ウィルシアにプロポーズされたの」

「ええええええええええ!?!」

シートと指を出して静かにするよう伝えるところでコクコクと頷いた。

「お前なんていったんだよ」

「断ったよ! だってのりが軽いから・・それにまだジーヴァーが好きだったから・・」

長い間募ってきたこの気持は、簡単に消えることはないと思う。

「・・お前さ」

ステラはマリアンジェラの頭を撫でながら優しく言った。

「コッチの国に入るほうが幸せか?」

「・・うん、多分」

常識ハズレではあるけど、私の欲しかったものをくれる国、この国は優しく迎え入れてくれる

「そう・・だったら、この国に一緒に居よう」

「ステラも?」

「言うつもりはなかったけれど、国は誰もお前を助けようとしなかった・・むしろ、この国に居たほうが幸せなんじゃないかって言うアホもいた」

事実幸せだと言った

「だったら、ここで住んだ方がいい、お前ウィルシアと結婚しろよ」

「うん・・え?」

今何言った?

「お調子者だけどさ、根は真面目だろ? 向こうじゃ見れなかった表情がアイツの言葉一つ一つで見えるしさ! きっとお前に必要なのはあーいうふざけた男なんだって!」

「いやいやいや、ソレとこれとは別だから!」

「そうか?」

「そうだよ!」

コンコン。ノックがした。

「はい?」

扉を開けたら血まみれのシアがいた。

「きゃあああああああああああああああ
ばっしーん！音が木霊した」

第三十一章

「ごめんねシア」

頬を真っ赤にしたシアを見て、ケラケラと笑うララージニア。レイモンドはコホンと咳をした。

「すまん、フロの修理を頼むのを忘れていた」

「だからってさ」

ステラは手に持ったものを持ち上げた。

「みんな温泉行くことないじゃん」

「汗臭いのはいやだもん、ねー」

ララーは言いながら旦那に抱きついた。

「うん、俺もいい加減血を洗い流したい」

「温泉はいる前にアンタは外の蛇口の水で血を洗い流しなさいよ」

「ええー」

「温泉汚れちゃうでしょ」

シアはぶーぶーいいながら歩く、そして顔を上げると『温泉戸所』と書かれた銭湯に着いた。

一向は中に入りそれぞれ男湯と女湯に別れて入っていく。

カッポーン

「ああいいお湯なこと」

「ふー擦り減った神経も太くなるってもんだわ」
ステラの言葉にマリは汗を流す。

「おんやあーアースグランドのお嬢さんじゃーん」

「テルーカ・エニシン？」

湯気の向こうに見えるのは滑らかな白い肌、残念な胸のふくらみ、まさしく狂いの科学者エニシンだった。

「いいお湯ですなあ」

「ええほんとに」

カップーン

「それにしても奇遇ですなあ」

エニシンは頭に載せていたタオルを身体に巻いて隅っこのほうに寄った。

「お嬢さんも予言の確認しに来たのかい？」

「予言？」

ララーは温泉から上がるとサウナ室に入っていた。ラストに入ったらしい。

ステラは腕をひかれていたが断つてもう一度温泉に首まで使っていた。

「予言爺が97%の確率でココに敵が落ちてくるってさ」

どっごおおおおおおおおおおん！！

「うおおおおお！？」

ステラの悲鳴が上がる。

天井がぽっかりと大きな穴が開いていた。

「―――っつ・・！」

「・・消え去るがいい『虚空月下』」

透明な三日月が刃のように相手に襲い掛かる。

「させるかぁ！！」

変な術を放ったマントの男に向かって誰かが上から術式を発動させたが、マントの男は1mmも怪我をしていない。

・・っっていうか、さっきの声

「インファ！？」

「え？」

床に着地しながらその声の持ち主は振り返った。上空から入ってきた風に湯気の煙はかき消され、視界がクリアになった。

「・・お嬢様？」

そこには知らないマントの男と、インファと、シーヴァーが居た。
「・・！」

「シーヴァー!!」

インファはシーヴァーの頭をはたいた。

「いったん退くわよ」

「・・・ああ」

ギロ

（おお、スゴイ殺気）

ウィルシアは身体が冷えていくのを感じた。

「退くというなら我も手は出さない。いけ」

二人は飛ぶように穴から去っていった、マリはひょっこり顔を出す。

「マリさんマリさん」

ウィルシアは頬を赤らめながらマリのほうを見ずにいった

「何？」

「当たってるんだけど」

「？」

シアが掴まれた腕を指差した。

「胸」

「！」

悲鳴と共に打撃の音もお風呂場に木霊した。

「あーいいサウナだった!・・・あれ?ここ露天風呂だったかな?」

ララーの言葉に脱力を覚えるしかない一同であった。

第三十二章（前書き）

三十一章の別視点

読まなくとも大丈夫な章です

第三十二章

シーヴァーは表を攻め、インファは背後により攻める。挟み撃ちにして相手を打ち砕く作戦だ。この作戦はありきたりだが、今までアースグランドを攻めようと攻撃してきた国があったが、シーヴァーとインファがそろい協力することにより、負けたことはなかった。・・・だが

「化け物めっ・・・！」

インファは汗でゆるくなった剣を握りなおした。

「名を名乗れ！」

闇色のマントを身に纏い風に靡かせる男が一人居た。

「わが身に名はない、人からは最強な盾と呼ばれている」

マントの男は片手を挙げるとそこから鈍い光を放った。

「出でよ『月光狼炎』」

光から無数ものおぼろげな形をした狼がインファに襲い掛かる。

「其方の名を聞く必要はない・・・なぜなら死ぬのだから」

狼がおぼろげな形からハッキリした化け物へと変じ、後退するインファにしつこくまとわりつく。

（・・・く、魔力が吸われていく・・・力が）

インファは武器を投げ捨てると渾身の力をこめて走り出し、最強な盾に拳を殴りつけた。・・・が

「結界か！」

手を触れることすら許されない。それが最強な盾の所以

「・・・もはやこれまでか・・・ゴメンナサイ・・・お母様」

お父様、お母様、仇討ちできなくてごめんなさい

「インファ！」

シーヴァーが現れマントの男を蹴飛ばした。

「一時休戦に入った、兵をひかせろ」

「わ、わかった。兵一旦軍に戻れ！」

インファについてきていた少人数の兵士が命令に従い退いていく。

「逃げるか、ソレもまた良し」

「私は逃げないわ」

インファは剣を使い、切りかかるが避けられる。シーヴァーも剣をとり男に迫るが二人の攻撃は当たらない。

「敵は殺す。それだけだ」

最強な盾の気迫で二人は飛ばされた。

（あ、街のほうに飛ばしてしまった・・・まあ、いいか）

最強な盾は飛んでいった二人を追いかける。

「化け物め！」

インファは悔しそうに着地した。

「来るぞ」

現れた敵に炎を叩きつけるが、腕を振るわれかき消された。

「『緋去螺旋花』」

花びらが舞い散る。

どんな攻撃も無効化されてしまう。二人は身構えた。

（一体何処に弱点が・・・それにしても竜族に勝ることのできる人間など・・・本当に人間か？）

マントの男は手を差し出した。

「『突破激剥』」

殺意のアル突風が二人を再び襲う。

「きゃあああああ」

二人の身体はアル建物に叩きつけられた。

シーヴァーは着地すると上から叩きつけるようにマントの男が落ちてきた。

（・・・？砂埃にしては湿っぽいな）

「————っつ・・・！」

男は一旦退くと手を後ろに下げた

「・・・消え去るがいい『虚空月下』」

透明な三日月が刃のように相手に襲い掛かる。

「させるかぁ!!」

変な術を放ったマントの男に向かってインファは渾身の術を、上から発動させたが、マントの男は1mmも怪我をしていない。

——と、懐かしい声が聞こえた。

「インファ!？」

「え？」

開けてしまった穴から入ってきた風に湯気の煙はかき消され、視界がクリアになった。

「・・・お嬢様？」

そこには懐かしい愛しい存在が居た。

「・・・!」

あられもない姿で

「お嬢様、なぜ・・・そのような格好で」

「ついやああああああああああああああああ!!!!!! 変態!

痴漢! 破廉恥! 見ないでえ!

「マリアンジェラどうした!」

お嬢様がこれでもかというぐらい悲鳴をあげるとタオル一丁のアホも入ってきた。

「きゃああああああああああああああ!!!!!!」

お嬢様はオケを掴んで投げつけるとアホに命中した。ナイスです
お嬢様

「お、お前等な〜!」

崩れた天井の下敷きになっていたステラは自力で温泉から出てきた。これは気づかなかった。

「ドンパチは他所でやりやがれ! 殺す気か!」

「いてて、あれ? テルーカちゃん」

「よ」

気配のない存在がタオルをのけると、通常モードの服が現れた。
精霊属か・・・?

「最強な盾がてこずってるのはじめてみたあね」

「我も人の子」

最強な盾は温泉で濡れたマントを絞りながら言った。

いつまでもお嬢様の肌を他人にさらす必要はないな、上着を脱ぐ

「お嬢様、少々汚れていますが上着をドウゾ」

シーヴァーは上着を脱いでマリにかけようとした。

「嫌！」

マリはシアの後ろに隠れた。

「わお」

シアは腰に巻いたタオルが落ちないように掴む。

「・・・」

シーヴァーの動きが止まった。

「・・・・・・」

拒絶？お嬢様が自分の意思でアホのところに・・・？何故？彼は敵

のほず、それに・・・初めて私を拒絶した・・・拒絶、拒絶・・・へこむな

「シーヴァー！！」

インファはシーヴァーの頭をはたいた。

「いったん退くわよ」

「・・・ああ」

ギロ

覚えておけよ、アホボーイ。いずれ殺す。お嬢様の見ていないところ

第三十三章

「結構さー、この戦争酷いもんだあねえ」

エニシンは研究室でモニターを見ながら後ろに居るであろう同じ存在のテルカに話しかけた。

「そうだな、ウェザーミステリの被害が酷い。最強な盾が留守にしていたからな」

「今この国の魔法はこの『パンドラの扉』に注がれているから、今狙われると危ないんだよねーっていつでも、もう攻められてんだけどサア」

「しかし大丈夫だろうか」

テルカはモニターに映るマントの男を見た。最強な盾と呼ばれる男・・・。

「最近戦意を感じられないが、必要なときにこうでは・・・」

「戦意を持たせたらいいンデシヨお？」

エニシンはにっこりと笑った。

「？」

「考えがあるよおくんふ」



「二人が一緒に来るの、珍しいね」

マリアンジェラがウィルシアの宅にきた来賓客を見ていった。やってきたのは普段よく分からない関係のテルーカ・エニシン（♀）とテルカ・ユサラ（♂）だった。

「うお！？双子？」

のこのこと現れたステラが驚いた声をあげていた。

「血は繋がってないちゅう」

「赤の他人だ、よく言われるがな。我々精霊属は元々性別はないし、似たようなもんだから誤解しないでくれ」

いい加減うんざりしているらしい

「私に何か用？」

「うん、マリアンジェラに『男を誘惑』してほしんだあよ」

「・・・は？」

ステラも後ろで口を開けていた。

エニシンは嬉しそうだったが、テルカはあまりノリキではなさそうだ。

「ん、貴女に男を無意識に虜にする天性の才能を見出したよ」

「見出さないで下さい」

とんでもないとマリは手を出して否定した。

「そゆわけで、頼んだよ」

「いえいえ、私は許可していませんって」

ひゅん

魔法で飛ばされた。もう、この国の人って強引なんだから・・・。

「ここは？」

何もなさそうでいて草花が咲き乱れ、空があるようでいて、天井がある。なんとも不思議な空間だった

「最強な盾という名の男が居るンよ、その男を虜にしてほしんだあ、頼んだ！」

「え?! ちょ」

言うだけ言うと言った。

・・・どうしろと!?

「誰だ」

ああ! 見つけた

「ここに入れるのは王だけだ、去れ」

「あ、あの、出口が分からなくて」

最強な盾が現れた。

こ、ここ、怖い

「……………」

「……………」

何故か見詰め合う……。

「お前」

そっと、頬を触れられる。

「何故泣きそうな顔をしている？」

怖いから、とはいえない。

「……………」

なでなで

「……………」

なでなで、なでなで、なんで頭なでられてるのかな？

「あの」

「ん？」

……実はいい人？

「あの、最強な盾さん？」

「なんだ」

「名前……のほうは？」

「我に名はない」

「どうしてですか？」

「どうして？」

最強な盾は、黙ってしまった。

「誰もつけなかっただからではないだろうか」

……私、今まで自分がかawaiiそうな子だと思っていたけど、もっと可哀想な人を見つけたのかもしれない。

「……ごめんなさい」

「何故謝る？……名前がないのはおかしいのか？我は最強な盾として呼ばれたことがないから分かんが、ないのが駄目なら、名を付けてくれ」

「え？わ、私が、ですか？」

「ほかに誰が居る？我は我以外のものの名を知らん、知る必要も無い」

「そうですか・・・でしたら」

・・・うーん

首をひねる、名前っていつでも、自分もつけたことがない・・・しかも目の前の人のこともよく分からないのに・・・最強な盾・・・

「そう、ですね・・・『エイジス』エイジスなんてどうでしょう」

「いいんじゃないか」

即決ですね。

「ふむ、エイジス・・・ふむ」

でも気に入ってくれたようだ。

エイジスはひとときしり自分の名を呟いた後マリアンジェラのほうを見た。

「お前はなんという？」

「私はマリアンジェラ・アナスタジアといいます」

「マリアンジェラ」

エイジアはマリの手を掴んだ。
ん？

「我の女になれ」

天才の男誑しといった、エニシンの言葉を・・・信じそうになった・・・。

第三十四章

「余は余の代で奴らを滅亡させることを誓う」

王様は皆の前で宣言した。家臣たちは王様の言葉を否定することなく頷き跪いた。その様子を影で見ていたケリーは敵国に居る友人についてふと思った。

短い付き合いだったけど、いい奴だった。

（惜しいやつを、亡くすことになるのか・・・というか）

友人ついでに思い出したが、ステラという女、こちらに向こうの情報进行がなせと勅命を受けたのにもかかわらず、まったくもって一切の連絡がないとはどうゆうことだ！死んだとも思っていたが、インファ様が言うにはお風呂に入っていたらしい・・・風呂！？風呂ってなんだ！今思えば戦争中に風呂場で出会って何！？どんなシチュエーションだ！？

「ケリーさん、どうかしたんですか」

「インファ様！」

「？」

「風呂ってなんですか！？」

・・・・・・

（風呂ってなんですか・・・ですって？やだ、このそんなことも知らないの？どんなお嬢様なの！？）

インファはふっと笑った。

「ねえ、ケリー」

「は？」

「ケリーのお家のお風呂ってどんななの？」

・・・・・・

（な、なんだと！？自分の家の風呂がどうなっているか、だと！？は！そうか向こうのお風呂はきつとこら辺とは違う何か特殊な風

呂なんだな!!・・・うう、ありきたりな風呂しか持っていない・・・
ケリーは顔をあげて笑顔を見せた。

「そう言えば先日の戦争では負傷なさったそうですが、お怪我は平気ですか!？」

「え（な、自分から話を振っというてかえるのね、そう・・・ふふ、やはり普通の風呂ではないのね!このブルジョアめ）ああ、平気よ」

インファもつとめて笑顔で応える。はたから見たら二人でにこにこしている変人にしか見えないだろう。そこへシーヴァーが歩いてきた。

「インファ、向こうの『最強な盾』の情報を渡せ」

「分かったわ・・・ところでシーヴァー」

「？」

「貴方の家のお風呂はどうなっているの」

インファの目は真剣だった。

「いくなれば、住み込みだからさ、持っていないといえれば持っていないぞ」

「・・・そうでした」

きょうはそんなお話。

第三十四章（後書き）

まだパソコン壊れてるんですよねー、直るのまだまだ先のようです、たまにこうして他人からパソコン借りて更新するかもしれません。更新が亀並の作者ですが、皆さんお気に入り登録ありがとうございます。

作者はとっても喜んでおります。

どうか末永くよろしく・・・ぽ

第三十五章

国は今暴れに暴れまわっている大国以外にも多々ある。大国には忘れ去られているが、勿論中小国もあるにはある。忘れられているならまだ良かった……忘れていて欲しかった

中小国の一つ、イスラは恐れていた。今劣勢とされている国に随分昔に忠誠を誓ってしまったのだ。しかし大国、ウェザーミステルには慈悲というものがない。戦場が悪化したら、勝つ為に何かよくわからないものの召喚の、生け贄にされるだろう

そうなる前に……

「今こそ革命、独立の時！頭のイカれた輩に膝をおることはない！同志よ！今こそ立ち上がれ」

イスラの国は武器を持って立ち上がり、声をあげた。しかし、演壇の上にいる皆を盛り上げた英雄の顔はひきつっていた。

「？」

何事かと民衆も振り返り、口を大きく開けて絶望の色を見せた。そこには巨体な男がいた。

「しょー……」

ウェザーミステの魔將軍クレトが不敵に笑っていた。

にやあー

悲鳴が木霊した。

■・■・■・■・■

勿論不発に終わったが、事は王のみならず国民にも耳に届いた。

「面白くなってきたねー」

ウィルは笑いながらパフェを頬張っていた。そのようすをマリは呆れた顔で見つめた。

「他人事ね！イスラが暴動を行いかけたってことは他の国もそうなるんじゃないの？……ってウィルに言っても仕方無いよね」

「仕方なくないよー？だって俺宰相だもん」

「へー」

マリは配られていた新聞を丁寧に閉じて机の上においた。

「え、宰相？」

「そうそう」

なんとということもなく、当たり前だというように笑ったがし！！！

マリはウィルの手を掴んだ。

「私あなたが働いている姿見たことないのだけれど！？気のせいかなあ！！」

「気のせいではないよ」

ララーちゃんが風呂あがりの姿で歩いていった。

「坊っちゃん、チェツピーの餌やり終わった！」

「ありがとーステラも食べる」

「遠慮するわ。で、マリはどした？」

全くもって口が閉じない

「今すぐ仕事にいけ！！」

多少乱暴な言葉になってしまったけど気にしない。

「まーまー落ち着いて」

「寧ろ何でウィルが落ち着いて……はっっ！！」

そうだった。ここはウェザーミステル

他国からは謎多き国と認識されている国に、拐われて以来なかなか慣れたが

いまだに分からない！！もしかしたらマリアンジェラが知らないだけで何かあるのかも？

「だってさー」

ウィルは最後に残っていた苺を掴んで口に入れた。

「働いたら負けかなーて」

「フザケンナ！？今すぐ敗北しろ！！」

事を知らないはずのステラもニート宣言を平気でしたウィルのくびもとを掴んで揺らした。当の本人は笑っていた。

「いいか!!」

ステラはウィルの頭にズッキして叫んだ。

「働かざるもの食うべからずじゃあ!!」

がくがくがく! ウィルが揺らされ口から魂が出ていく

「ステラー魂が……」

おさまったのを確認して、ウィルは首を揉みながら言った。

「一応部各配属国には、高身分の人質を二人連れてくるよう命令してるんだけど?」

「何で二人?」

「裏切られた時に備えて」

戦争中に別のいざこざがおきれば、敵に潰け込まれるのは必須、阻止しておきたい。

「ね……ステラ」

「ん」

食べたものを片付けに去っていったウィルを見送って二人は座って息を吐いた。

「長い歴史の間に何度も私達の母国とこの国は戦ってきた」

「そうさね、ばっちゃんも言ってたわ。この世の終わりになるまでの戦争、終わらないんじゃないかな」

長い戦い、そしてその戦は不毛ともいえる。誰もがわかっていて、止められない。諦めることしかできない。それが戦争……。
「でもさ」

ステラは小声になった。

「今回で決着つくかもしれないな」

本来ならアースランドとウェザーミステルは互角の力をもっている。だが、もともと好奇心旺盛で子どもらしいこの国の特徴が今、自分の首を絞めている。

訳の分からない物騒な研究をやめてしまえばいいのに……

この国に身をおいている私と自国で産まれた私

私はいざとなったらどちらの道を選ぶのだろう……

きっと、選べない。

第三十五章（後書き）

ウェザーミステルのミステルがたまにミステリになってたりしますが、にっぽんにほん的なノリで流しといて下さい（――；）

第三十六章

同じく中小国の一つ、アスランダ国でも独立しようという話が出た。

最もここを支配しているのは、アースグランドであるがイスラと同じような心持ちだった。強制併合・・・。

何故自分たちの国を自由にしてはいけない？何故他国に金を払わなければならない。併合という名の侵略を許してはならない。

アスランダの指導者『フレイ・アキレス』は地図を仲間と眺め、策を練っていた。イスラと同じ心持ちでもこちらの敵は今絶頂期にあるアースグランド大国だ。簡単に事は運べないだろう。

「アースグランドといえば跡継ぎが女しか居ないらしいな」

「人質にしてみるか？」

「いや駄目だ」

話し合いの中でアキレスの隣にいた男は却下した。アキレスもそれに同意する。

「噂によると双子姫は常に妃と一緒にいるらしい、もしくは若い將軍にべったりだとか」

城に入れたとしても、恐らく攫うのは難しい。

仲間の一人が鼻で笑った

「じゃー長女はあ」

「女だてらに強いらしい」

「へえー。それってルイツぐらい？」

話し合いをしている会議室にノックの音が響くと、厳しい顔つきの女が入ってきた。

「シュシュ、私の名を呼んだかしら」

「えへえ、呼んでない呼んでない」

シュシュは愛想笑いを浮かべた。

「そう。あらキャリアナどうかした？」

「ん？なんだい」

キャリアナはアキレスの手をひいて笑顔をつくった。

「やはりアースグラン드가ウェザーミステル国を攻めるときに、味方するふりをして王を殺しましょう？王がいない軍ならウェザーミステルが潰してくれる…そうしたら私達の勝ちだよ」

キャリアナまだ11歳、考え方があまりにも姑息だった…。

「駄目よ」

ルイツははっきりと否定した。

「キャリアナ、私達のお父様はこの国の英雄として亡くなったわ、知っているでしょう？」

「うん」

「お父様の名を汚さないために、そして私達が革命の英雄として誇りを持つために正々堂々と闘うのよ！！」

おおーと仲間は感嘆して拍手を贈った。キャリアナも納得したらしくウンウンと頷いた。

「じゃー周りの国に要請して蜂起興してもらって、トドメをアスランダが刺すの」

分かってなかった…。

「キャリアナ！！！！」

「うー！？」

アキレスは微笑みながら地図をみた。

「確かにウェザーミステルに力を貸して貰えば戦力を削ぐのは容易かもしれないが」

魔術を使う彼らは姑息な技で敵を崩落させる。しかし今は圧されている。協力するという手もあるが如何せん、彼らは信用するに足らない。

「契約は勿論、ギブアンドテイクも期待出来ないな」

「でもでもー、アースグラン드의戦力を削ぎたいんだろうー」

「まあ、俺たちが同等に闘えるぐらいは…何か策があるのか？シ

ユシュ」

シュシュはにこーと笑った

「ウェザーミステルの王様は、妃にゾッコン何だってさ」

やはり、誰かが必要となるわけだ。アキレスは深い溜め息をついた。致し方あるまい

「しかし、向こうには最強な盾が居るんだろう？どうする気だ」

シュシュは笑顔のまま懷から一枚の写真を見せた。

「……何だかこの世の悟りを開いたみたいは無表情だね、この人！」

「お黙りキャリアナ！シュシュ、誰なの？この方」

「アースグランドのアナスタジア大公の娘、『マリアンジェラ』ちゃんだよおん！」

シュシュは楽しそうに手を叩いた。

「なぜ最強な盾と関係あるんだ？」

アキレスの質問に、シュシュは写真を懷に仕舞いながら人差し指を立てた。

「僕はね、特別な力を持っていますね『同属』なかまの記憶に鑑賞できるんだあ」

そう言つては、楽しそうに笑いキャリアナの頭を撫でた。

「勝手に見ておこられないの？」

「同属はきつと許してくれるよーなんてったって、愉しいことが大好きだからね！」

「シュシュみたいね！」

「僕達は同じものから生まれたからね！一緒さ！」

きやつきやつと戯れ始めた二人を無視して革命軍は準備を始めた。アキレスは地図を丸め、指示を出した。

「では手始めに、マリアンジェラ嬢を」

皆は頷いた。

「誘拐する」

第三十六章（後書き）

広がる波紋、巻き込まれるマリアンジェラ、恋路はどうなる？ ↓ 未定

第三十七章

不思議生物チェッピーに餌をやりながら、ステラは木の下でうたた寝をしているマリアンジェラをみた。

「……ここに来てからマリアンジェラは変わった。前よりも笑うようになったし、陰で泣くことも無くなった。やっぱりマリアンジェラは母国よりこのほうが良いのだろう。」

それにシーヴァーの件のことも考えれば、忘れるにはうってつけの場所だ。なんていったって暴走しかないからなくココ・・と

「マリ、起きな！風邪ひくよ」

反応はない。

いまこの館に居るのは、自分と彼女しかない。夫人は宮殿で茶会で、ウィルは町の復興作業に勤しんでいる（強制）。

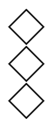
全く起きる様子が見えない、溜息を一つ漏らす。

「あー・ケリー今何してるかしらねー、今は果実の収穫時期だよー」

一人になるといつも考える。やっぱり農民ってのは生まれ育った土地が恋しくなるのが、性さがのようだった。

「てか風邪ひくよ」

布団か何か取りに行こうかと思い、眠ってしまったチェッピーとマリを起こさないように歩き出す。



「ん・・」

マリは目が覚めた、そこでチェッピーと居たはずのステラが居ない。何処行ったのだろう。

「んー！」

背伸びして立ち上がる。今日は本当いい天気だ。

「お花摘んで花瓶に飾ろうかな」

広い庭を歩き出し、花畑のほうに行く。一時期ララーちゃんがフラワーガーデンにはまったらしいが、一年も経たずにあきだし、放置したいろんな花々が自分の力で伸び放題に育っていた。旦那様は「コレはこれで風流がある」といって召使に手を加えないように命令してあるのだ。

「綺麗、可愛い！」

お花をいくらか摘みはじめる。

コレ王宮に上がったときにルージア様に差し上げよう・・・。

「あら？レーガン今日は歩く気になったの？」

「ばふ！」

長い毛を大地ですりながらごろんごろん！と転がってきた。
・歩く気はサラサラないらしい。抱っこすれば普通に重い。おなかの下腹が重力によって下に垂れていた。

「・・・ほら、体中草の葉だらけじゃない・・・はらってあげる」

撫でると「ばふ！」とほえて尻尾をパタパタと振り出した。

「あは！もうくすぐりたい」

「こんにちわ」

「！？」

声のほうを振り向いた。

館には二人しかいないし、街から遠いところにあるはずなのに、
声？

「どなたでしょう、生憎この館の主は出払っておいででおりませんの」

「それは好都合」

声の主が風に吹かれるように出てきた。白いマントを身に纏った斜めにスライドされたかのようなショートヘアの少年、害のある笑顔で微笑んだ。

「誰！？・・・きゃあああああああああ！」

「マリアンジェラ!？」

ステラは悲鳴を聞きつけ布団を投げ捨てて走り出した。

そこには少年にナイフを突きつけられたマリが居た。ステラは少年をにらみつける。

「あんた何者! マリを離せ!!」

「ステラ!」

「いいよー」

少年はあっさり返事するとマリを横に放り投げた。

「きゃ!？」

「マリアン・っ!？」

少年は音もなくステラの背後に回っていた。「ばふばふ!」レーガンが吼え異変を叫ぶが誰も来ない。

「止めて! ステラに何する気!？」

「ステラサンてゆーのお? ちょーつと付き合ってくれる?」

「ああ?」

少年はマリアンジェラのほうを向くとにこおっと笑った。

「取引しよう、君が最強な盾をひきつけておいてくれれば、彼女を殺したりはしない」

「・・・最強な盾・・・? エイジスを?」

「そう、彼が居たら邪魔だからねー」

「何する気よ」

ステラが暴れながら言う少年は笑った。

「野暮用^{おしごと}」

マリアンジェラは涙目でうなずいた。

「分かったから・・・じゃあ行きましょう」

私のたった一人の理解者なの・・・。

「じゃあ、行こうか」

「・・・ええ」

少年が城に向かうために魔法を使った。

ひゅん

一瞬で城に着く。

「こんにちわー!! あの一! マリアンジェラですけど・・・エイジスを知らないかしら!」

少年は姿を消しているが、ステラが苦しそうなところを見ると、近くに居るらしい。

「なんだ? マリアンジェラ・アナスタジア」

(フルネーム・・・)

まあいいわ

「すこしお願いがあるの、いいかしら?」

「ああ、別に構わないが・・・」

マリは振り返った。

「ステラも行きましょう」

「え?」

少年は驚いた。この女・・・邪魔する気か・・・? この人どうなってもいいのか?

「ねえ、あなたも行くでしょう?」

マリは微笑んだ。

「勿論、君も来るかにゃ?」

『な!?!』

ステラは振り返って叫んだ

「ウィルシア!」

どす

「うげ!」

姿の見えなかった少年が倒れた。

「誰だコレは」

「最強な盾さん、ちゃんとしろ守らなきゃー。ね?」

足で少年の頭をふんずけながらウィルはにこやかに微笑んだ。エイジスはそれにムツとした。

「たすかったあ」

「よかったステラ無事で・・・」

「でも何で・・・うお!？」

わらわらと城の人達が現れた。

「なんだー? マリ姫じゃねーか! おいション俺の言ったとおりだろ?」

「はい、クレト將軍!・・・でもよく稽古場から聞こえましたね」

「はっはっは!」

「何事だ?」

「だー?」

王様とルージアまで現れた。

囚われた少年は苦笑いを浮かべる。

「ああ、残念・・・頭イカレてる国だと思ったのに」

少年はだんだんとその色素が薄くなると消え去った。

「消えた?!」

ステラが驚いた声を上げると、ウィルは微笑んだ。

「テルーカちゃんに聞きに行こうか」

第三十八章

「あーそれえゝ？知ってる知ってる」

テルーカ・エニシンはよく分からない機械を弄りながら相槌ついでに返事を返した。

「たぶんアースグランドに身を置いてるシュシュだと思うよおー、精霊属エルフの中でもずば抜けた変態だよお」

「テルちゃん以上に？」

「あっはっはーテルちゃんはふっつーじゃーん」

ってことは予想以上に変人なんだね。

「シュシュは同属の頭の中覗けるからねー、覗かれたポイ？」

「それでなんで、私なんですか？」

「考えたらわかるっしょー」

ウィルがマリの頭を撫でながらにかっと笑った。

「アースグランドのやつらが狙ってたのは后様だろってことわ人質でもとるつもりだったんでしょ？・・・ん？でもなんでアースグランドが？」

自分で言っていてその違和感に気がついたらしい、首をかしげてクエスチョンマークを浮かべた。

「そりゃあアースグランドに併合している小国アスランダのほうだもんなあ」

先に行ってください。

「革命軍たるものができてるってわけねー・・・イスラの国も役に立つじゃない」

ウィルは楽しそうにそういうとまるで玩具を見つけた獰猛な獣のようにニヤリと笑った。

マリはなんとなくやろうとしていることがわかった。

「話持ちかけてみよーかな」

「だ、駄目」

マリは止めてからふと思い返した。

（あ・私止める必要あるのかしら・でも母国だもの、私は正しいのよね・？）

どうして分からないの？

「母国は君を捨てたのに、君は母国を愛してるのお？うわぁー心広いねえー」

捨てた。その言葉が胸に酷く突き刺さる。

「まだ、捨てられたわけじゃないわ、すっかり忘れてたけど・私人質なのでしょう」

「いや？家族だけど？」

ウィルは当たり前だというように言い切った。

「・止めて」

分からなくなる。駄目なのに、駄目なの・分からない

欲しい者は手に入る、けれど本当に欲しい者は手に入らない・

（ふふ・駄目ね、まだ引きずってたんだ）

忘れれば、嫌いになれば良かったのに・まだ、好きだなんて。

「・・・」

「？」

テルーカは静かになった後ろの二人を気にして振り返った。

「！」

そして急いで前を向いた。

「何も見てないよ何にも！ちゅうーしてるとこなんて見てないよ！」

マリの考えていることが分かったウィルは嫉妬し、マリの唇を奪った。

手に入らないものは攻略が難しいからこそ面白い、そう思っていたウィルであったが、本当にほしいものがもらえないのはじれったくて・苦しかった。

「んん！や、嫌！」

ぱぁん！いい音が響いた。

「・・・ウィルの・・・馬鹿!!!!」

そう叫ぶとマリは泣きながら走っていった。

「・・・だってさあ」

「聞こえてるよ」

マリは部屋に勢いよく入ると、涙を拭いてフツと息を吐いた。・・・影姫誰かがそう嘲り言ったものはこの国には居ない、なのに私はたった一人の人のために居心地のいい場所を否定している。

馬鹿らしい、いやいつそ哀れだと思う

「う・・・うう・・・うぶ、ふうううう・・・ひっく」

涙が頬を伝う。

どうして、割り切れないんだろう・・・。

「・・・っ」

涙を袖で拭う。このままではいけない。私・・・決めなければ

「自分の気持、整理しなきゃ・・・」

第三十八章（後書き）

久振りに恋愛要素はあったかな？ ・ ・ 入ってないか

第三十九章

「・・・そうか、失敗か」

「ごめーんねえー」

シュシュは心にもこもってない謝罪を述べた。

「ウィルシア・シーアがまさか出てこようとはねー皆仕事をしない
って情報あったのに、裏切られたよ」

「怪我はなーい？あと、変なものもつけてないよね？」

「大丈夫だよキャリアナ」

幼女の頭を撫でながらシュシュは楽しそうに笑った。

（まさかテルーカ・エニシンが脳内の情報を操ることができるなん
てね・・・ボク以上の特殊異能保持者だったか・・・）

それだけでも中々面白い収穫であった。相手を出し抜くという行
為は何よりも勝る喜びだ。ぎりぎりのゲームはこれだから止められ
ない。

「マリアンジェラ嬢が思いのほかウェザーミステリに馴染んでいる
な・・・むしろ彼女だけでも良かったのではないか？それに彼女はア
ースグラン드의有力者の娘だろう？」

アキレスの隣で頬杖ついていた青年、セオドラ・シュリユーカは
自分の緑の髪の毛をかきあげ、立ち上がった。

「てか、まどろっこしーんだよなア！もう捨て身覚悟で王宮侵入し
て王を殺そうぜ？」

「賛成、今なら王様も油断バリバリだよ！」

「短気は損気だぞ。セオ、キャリアナ」

アキレスにそういわれ二人は詰まらなさそうに頬を膨らませた。

「でも、打つ手がないわアキレス。どうするの？」

ルイツの疑問にアキレスは答えることができず、黙り込む。

沈黙がその場を支配する。

「あー・・そういえばさー」

シュシュは楽しそうに言った。

「ウェザーミステリの国に『パンドラの扉』たるものがあるらしいよ。それを開けたら両国を制するのは簡単なことになるぐらいの、すっごい大きな力を秘めているらしいけど？」

「お前が言うとは怪しいな」

皆が頷いた。

「なんでえだあよおー」

「大事な部分かくしているのではないの？」

ルイツが疑わしげな顔で言うとしュシュは目を潤ませた。

「ボクが頑張って手に入れた情報を、皆は信じてくれないんだあー」
シュシュは泣きまねをするとセオはうっとおしそうな顔をした。

「わかったわかった」

にや

「そのパンドラとやらはなんだ？」

「あのねー」

・・・・

アースグラウンド『東宮殿』の西側にある森の中

「ミケーレ様・・ミケーレ様！！」

「っは！な、何かなシーヴァー？」

シーヴァーは溜息をついた。ココ最近ミケーレの行動がおかしいのだ。

「そのように毎日花を沢山摘まれていかなさるのですか」

もうミケーレの部屋に花を飾る場所はない。そして今も尚彼の手には大量のいろどりの花束が持たれていた。あっちこっちの森に行っては花を摘んでいた。

男なのに女と見紛うばかりのその可憐さが逆に違和感を醸し出す。
「もう戻りましょう」

「あ、うん・・そうだね」

ミケーレは頬を染めて馬に乗った。二人は東宮殿に戻り始める。

「・・ねえシーヴァー」

「なんででしょう」

「シーヴァーはインファのこと好き？」

「は？」

シーヴァーは馬を止めて主を見た、ミケーレは同じように馬を止めると、頬を染めたまま下を向いた。

「何故、インファなのですか」

「え？だっていつも一緒に居るじゃないか！仲も良さそうだし」

「はあ・・まあそうですが、好きというのはどういった意味でしょうか」

「決まってるじゃない！愛しているかってことだよ」

自分で言っていて恥かしかったのかカファアと耳まで顔が真っ赤になった。シーヴァーは主にはれないようにそつと溜息をついた。

「アレのことは確かに嫌いではありませんが、愛するという感情とは違います。そうですね・・どちらかといいますと、妹のような感じですよ」

向こうは人のことをお父さんのように思っているなどと、ふざけたことを言っていたが。

「そうなんだ」

「はい。それが急になんですか？」

「え？い、いや！別に！」

明らか何かありますというように頬を染められも・・黙って見つめているとミケーレは話し出した。

「ケリーって居るじゃないか」

「聖女隊の・・ですか？」

「うん・・」

「もじもじ・・もじもじ」

「・・・・」

「・・・」

もじもじ・・・

「好きなんですネ」

「う！・・・うん・・・そうなんだ・・・」

照れ照れとはずかしかっている。シーヴァーは安心した。女装癖のあるミケーレがいつか女性ではなく、男性を好きになってしまうのではないかと懸念していたのだ。いやあ安心した。

「好きになるのはいいいことですが・・・でも、いけませんね」

「え？」

「聖女隊は特攻軍、戦争で命を落とす可能性が高い。残念ながら次期王であるミケーレ様の伴侶になることはできません。彼女が聖女隊を辞めるなら話は別ですが」

「わ、分かってるよ」

ミケーレは弱弱しく言った。

「無理だってことぐらい・・・」

ミケーレは自分の仕事に誇りを持っている、恐らく本人の中では天職だとさえ思っているだろう。まず、止めることは考えられない。

「たとえば、受け入れられなくとも・・・せめて言いたいんだ『好き』だって」

「・・・言うだけですか」

「言うだけでもスゴイ勇気がいると思うよ！・・・だってボク会話すらできないし」

しょぼーんと落ち込む。

『言わせてもくれないのか』

マリアンジェラの言葉が耳に蘇る。

「言って何になるというんですか」

「え？」

「『好き』だと『愛している』といったところで触れ合えない、傷

つけることしか出来ないのならば、いつそ言わなければいい。言わなければ、まだ耐えられるのではないでしょうか」

「シーヴァー・・・？」

「結ばれることがないのに、想いだけ伝え合うなんて、酷なこと私にはできません」

「シーヴァー・・・誰か好きな人が居るの？」

シーヴァーはハツとした。しまったミケーレの前で言うことではなかった。

黙りこむと、ミケーレは優しく微笑んだ。

「それでも、好きだから『好き』って言ってほしんだと思うよ。大丈夫『好き』と言って誰も傷ついたりしないから・・・」

『好き』だと、いえないほうが辛い・・・本当にそうなのだろうか、言ってしまった方が・・・残酷な気がする。

どんなに愛していても、ドラゴンである自分は・・・人と結ばれない。

「・・・考えてみます」

それでも、充たされるなら・・・いいのかもしれない

第三十九章（後書き）

アスランダを出す必要なかったような気もしなくもありません。が、物語のキーワードに・・なるはず？

第四十章

カタカタカタカタカタカタカタカタカタカタ・・すごいスピード
でキーボードに情報を入れていく。

「・・・ん？」

テルーカは手を止めた。

「・・・」

カタタカタ・・カチ

「・・・」

にこーッと笑った。これは大発見だ。

◇・◇・◇・

「そうか見つけたか」

王様は奥さんを抱っこしたままにやりとわらった。その隣には怒られてから働き出したウィルも居た。

「パンドラをあける方法が分かったのか・・・で？その方法とは？」

「碑文の解説、です。パンドラの扉に文字が書かれていたんですよー」

「なんて書かれていたんだ？」

「・・・そもそもこのパンドラを発見したのは、この国の王様。封印したのはこの国の祖先、ならばパンドラに描かれた碑文を解くこともできるはず」

つまり

「読めないのか」

「王様なら読めるんじゃないかなあーって」
紙をぴらっと王様の前に見せ付けた。

「どれ」

「見せてー」

夫婦仲睦まじくそろって紙を見た。

・・・。

「・・・・・ふむ」

王様は顎に手を置いた。

「これは何語だ？」

分かるわけがなかった。

ウィルも上から紙をのぞく。文字というにはあまりにも複雑な形をしていた。

こんこん。

「入れ」

「オネー様が来たわよルージア」

「姉さま！」

姉妹抱き合う。その後ろにマリアンジェラが現れる。

「マリー」

「后様みたいなので抱きつこうとしない！」
そういつてひらりと避けた。

「おお、アースグラン드의姫お前もコレ読む？」

「姫じゃないのですが・・何コレ？」

マリも碑文のコピーを見る。

「・・なんですか？コレ」

「パンドラの碑文さ」

不思議な模様にしか見えない。

「・・というより、まだパンドラの扉について諦めてなかったんですか？」

「面白いだろう」

「いえ、面白いじゃなくて・・今戦争中なのでは？」

「パンドラの扉からでてくるものはなんだろうなー」

無視ですか。

「・・碑文今の人じゃ読めんなーだれか読める人を探さないと・・」

「読める人、ですか」

「マリ心当たりアル？」

「あるわけないじゃないですか。でも・・魔法で昔の人を呼んだりできないんですか？東の国のほうでは、死者が帰ってくる日があるとか」

「それだ」

王様は手を鳴らした。

「始祖を召喚しよう」

この王様罰当たりなことをペロツと軽く言いましたね。

「生贄は？」

「イスラでいーじゃん、裏切ろうとしたわけだし」

そんなんだから裏切ろうとしたのでは？！

「止めてください！もう！！人の命を軽々しく扱わないで下さい」

「おこつられたー」

王様は楽しそうにルージャと笑っていた。

「・・・はあ」

マリが頭を押さえた。

「おい」

最強な盾が現れた。

「この国に、誰かが入ったぞ」

「何？」

「この気配・・ドラゴンだ」

第四十一章

「ドラゴン？」

テルーカは悲鳴をあげた。

「研究室にドラゴンなんてでかいの入れないよお！？」

どっごおおーん、その返事をするかのように破壊音とともにくもくと煙が上がる。あっちの方角は丁度パンドラの扉を置いてある場所だ。

「王様！大変です敵が・・・パンドラに親友しました！じゃなくて侵入しました」

「落ちて着け雑兵。で？敵はどこものだ？」

「アースグランドじゃないほうのアスランダの者とおもわれます！」

「お前ややこしい！他のヤツにかわれ」

テルーカが泣きそうな声をだした。

「今までの研究パーだよお！？くっそーシユシユのヤツだな」
風になると、そのまま消え去った。

「軍を出せ！パンドラを守れ・・・なるほど、我らの祖先と共に生きていたのがドラゴンって説があったな・・・ドラゴンなら読めるかもしれないな」

王様は舌打ちする

「でもアスランダみたいな小国がパンドラをどうするつもりだ？」

「アースグランドをつぶすんじゃないっすか？潰したいみたいですから」

「じゃー別にいっか」

「よくないです！アレの中なにか分からないんでしよう！？」

「おこられちった」

「ねー」

「もうそれはいいですから！」

ララーは考えるしぐさをしてポツリと言った。

「開けるかは知らないけど、もし開けられたら先に中をみられるってことよね」

「それは駄目、最初に見るの余だから」

王様は立ち上がり将軍クレトを呼ぶと、侵入者の排除を命令した。相変わらずココの人って自由・・・。

「俺たちも行こう」

ウィルがマリを抱っこすると魔法で移動した。本人の意思なし↑「うそ、きゃあ」

上空にて留まり下を見ると、立派な髭の長いドラゴンがどっこいしょとばかりに鎮座していた。

「あ！あれ、テルーカじゃない？」

「ほんとだ」

シュシュと地面で殴り合っていた。子どもの喧嘩にしか見えない「おっと」

ウィルは緊急回避を行った。

「きゃ！？矢！？」

其方の方向を見ると気の強そうな女が弓矢を構えていた。

「人の領地でなにしてんのさ」

黒い光を手になに集めるとウィルは害のアル獣のような笑みを浮かべた。

「止めッてッてば」

ウィルの頬をはたく。人殺しなんて見たくない。

「さあ、読めドラゴン・・・この国やアースグランドに復讐したいの
だろう」

『といつてもものう、老眼ジャからの・・・』

「爺臭いドラゴンだな・・・」

「そういうなってセオ・・・実際年寄りらしんだから」

『パンドラの扉これのことについて書いておる。《これよりの扉が開けられしとき、世界は荒ぶ。再び閉じん時には扉と契約を果たせ》と』

「閉め方じゃないってーの！開け方だよ！」

『五月蠅い若者じゃのう・・ワシは読めとしかいわれとらんわい』
「そうか」

アキレスは考えた顔をした。

「開けらし時・・ってことはいずれは開く運命なんだ。だから此方からは干渉できない」

「ココまで来て開けられないってことかよ！」

「中のものが起きたら開けるだろうさあ・・鍵は開いてんだから」
ぼろぼろの姿のシュシュが現れた。

「どうやってあけるの」

威嚇の格好をしたままのルイツが聞くと、シュシュは攻撃魔法をドラゴンに向けて撃った。

びしゃ！血が扉をぬらす。

「キャッ!？」

マリは口を押さえた。なんてことを!!？

『オオオオオオオ!』

ドラゴンは雄叫びを上げ上空に飛び立った。

「シュシュ！なんてことを」

「だって、少なからずコレを封印したものの血が必要なんだもん、
byテルーカ脳内情報」

そのテルーカは脳内を強く揺さぶられ、脳震盪を起こして気絶していた。

「外道だな」

自分もやろうとしたウィルにいわれるぐらいだから、よっぽどだろう。

しかし、パンドラの扉に何の変化も見られない。

「あつれえー？おつかしいなーテルーカの当て外れ？」

『己小童めが!!!』

ドラゴンが口から高温の炎を放った。

シュシュは魔法で防御を張ったが、溶けた。すぐさま後ろに居た

アスランダ組みは逃げだす。

「やっぱりシュシュの情報であてにならないではないか!! どう収集つけるつもりだ」

ルイツは走りながらシュシュに怒鳴った。

「どないしょ」

反省はしていなかった。

「あ、なんか嫌な予感」

ウィルが言った。マリも同じ感じがしていた。

「ごおおおおおおお!!」

案の定怒り狂ったドラゴンが周りを炎の海と化した。

「あちちち! 結界がとける」

ぼう!

「あっつ!?!」

「きゃ!?!」

ウィルの手袋に炎が燃え移り、火傷の痛さのあまりウィルはマリを落としてしまった。

「きゃあー!?!」

「しまった! マリ」

炎に飲まれる。

周りが紅い・・・ごうごうと燃えているが、熱くない・・・そっと目を開けると誰かに抱きしめられているのが見えた。

「・・・嘘」

マリは口を押さえた。

「シーヴァー!」

第四十二章

「嘘・・・どうして？シーヴァーがここに・・・っ?!」

抱きしめられた身体を離そうとして、手首を掴まれた。

おどろくほど激しく強く身体を抱きしめられると、顎をつかまれ上に向けられた唇に、シーヴァーの唇が触れた。冷たい感触が熱いものに変わった・・・舌が交わる。

「ん・・・」

何度も、何度も・・・涙が自然と溢れた。

「『好き』だ・・・」

小さくそう囁く。

今までずっと、聞きたかった言葉・・・ああ・・・やっぱり、私は嫌いになんかなれないんだ。だって、今こんなにもシーヴァーを求めている。

しばらく抱き合っていたが、シーヴァーは手を払うと、炎が一気に掃われた。

「あら、お嬢様！」

インファも居たらしく、服のところどころがこげていた。

「はあ、暑い・・・早く移動しましょう」

インファは流れた汗を拭うとシーヴァーにそういった。半分は人間の血をひいているため、焼死することはないが、熱いものは暑いらしい。

「長老は私に任せてください。お嬢様はシーヴァーと安全なところに」

「あのドラゴン長老様なの？」

「ええ、気配を感じておかしいと思い、此方に忍び込んだのですが・・・このありさまで驚きました」

「お嬢様、帰りましょう」

シーヴァーはマリアンジェラをお姫様抱っこすると、背中にドラゴンの翼を生やし飛びだった。

「おお・・・」

すごい。

「はい、ちょっと待ってねー悪魔紛いの執事君。パクリになるよ」

「悪魔ではなく執事です。狂れ坊や」

「言うね」

二人の間にバチバチバチッと火花が散った。

「ウィルシア」

「俺の奥様盗らないでくれる？」

「私のお嬢様が大変お世話になりましたね」

会話があってない・・・。メラ！長老の炎など匹敵にならないほどの炎があがる。

「……（汗）」

バアアアン！

「きゃああ！？」

魔法のバトルが始まった。炎が魔法を蹴散らす。魔法は容赦なく獲物を狙う。まったくの互角・・・ウィルシアって強かったんだって、感心している場合ではなかった。

また落ちそうなんですけど！？

「アンタマリアンジェラふったじゃんか、返せ！」

「離れて分かる想いというものがあるのですよ」

「うっわぁー未練らしい男だなー男なら一度決めたことをやりとろしなさいよ。俺は有言実行でマリアンジェラ姫を返して貰う」

「もともと私のものですからご生憎。貴方はもう用済みです」

人を抱いたまま喧嘩しないでほしい。

自分のために争ってほしいなんていう人は、本当馬鹿だと思う・・・。

「止めて！」

マリは声を荒げた。

二人の攻撃がやんだ。

「ごめんなさい、ウィルシア・私は・彼と帰る」

シーヴァの服を強く掴んだ。

「貴方のことも好きだけど・私、シーヴァのほうが・好きなの」
涙が頬を伝う。ウィルが酷く傷ついた顔をした。ごめんなさい・

あんなによくしてくれたのに。

「ふられたかあ・じゃあ仕方ないよね・」

「ウィル」

「つていう俺じゃないよね」

魔法の矢がシーヴァをかすめた。お面が下に落ちる。

「卑怯で姑息ですね」

「なんとでも」

「未練たらしいのは其方じゃないですか」

「お互い様だろ」

シーヴァの紅黒い瞳が炯炯と輝いていた。

「ステラはどうするのさ、ララーちゃんは？ ショーンにだってお別れいってないだろう？ レカードは君が来てから少しずつ歩くようになったんだ。君が居たから王様は戦争に魔物をつかったりしなかったんだ」

ウィルは泣きそうな顔で叫んだ。

「君が来てから俺も変わったんだ！ 君が必要なんだ」

「ごめん、シア・ありがとう」

シーヴァはマリを抱いたまま去った。

「・・・っ」

燃え盛る炎も後から来た軍によって消え去り煙を上げていた。

「なんでだよ！！」

怒り任せに魔法を放つ、どおおおん！ パンドラの扉に当たったが

どうでもいい。

マリはもう居ない・・・帰ってしまった。

最初は興味本位だった。でも、だんだんと惹かれて・・・本気で好きになってた。シーヴァーと聞きたびに嫉妬した。イラついて、アースグランドをなんども滅ぼそうと思った。でも、君が、マリアンジェラが泣くから・・・

「・・・マリアンは勝手だよ・・・俺、エイジスになんていえばいいんだよ」

涙を流したのは久振りだった・・・。

第四十三章

「マリアンジェラあー！」

「義兄様・・・でなくてお姉さま？」

フリッフリのかわいいドレスを着たミケーレに抱きしめられる、後ろでケリーのなんともいえない表情があった。

「仕方あるまい、ミケーレ様は次期王候補・・・軽々と城を出られないのに・・・お前のところに行きたいというから、カモフラージュをしたのだ・・・。別に、断じて！女の私よりも女らしいからと落ち込んでいないぞ！！！」

「落ち込んでたんだ」

なんて分かりやすい・・・。

「会いたかったよマリアンジェラ・・・酷いことはされなかったかい？」

「ええ、平気・・・思っていた以上にいい人たちばかりで・・・あ」

ポロ・・・涙が出た。

「あ、ああ、マリ・・・どこか怪我でもしたの？！」

「してなっ・・・っ」

涙がこぼれる。嬉しいのか悲しいのか懐かしいのか寂しいのか分からない・・・複雑な心が泣いている。ココの人も好きだけれど、向こうの人々のことも確かに好きだった。

どちらも好きなのに、戦争でどちらかが傷つかなければならない・・・どうしてだろう

「お嬢様はお戻りになられたばかりです。休まれては如何ですか」
シーヴァーに手を引かれ頷く。

「ごめんね、せっかく来てくれたのに」

「いいよ、また来るから」

「これません」

「・・・また」

部屋に下がっていく。

懐かしい部屋、ちっとも変わっていないかった。

「マリアンジェラ」

シーヴァーが優しく抱きしめる。

「あのね・・・私、シーヴァーが好き・・・ダイスキ」

「私です」

口付けをされそうになり手で押さえる。

「でも、向こうの人たちのことも好きなの」

「・・・それはウィルシア・シーアのことですか」

「ウィルも好きだけど、向こうに居るステラもダイスキだし、・・・

シーア家も好きなの」

「此方の方々よりもですか」

「ドッチも同じぐらい好きなの」

涙が止まらない。区切ることでできない想い

「――っ」

シーヴァーは抱きしめると唇を繋ぎ、床に倒した。

「私は浅ましい男です・・・貴方の口からそんなこと聞きたくない。

貴方の中が私で満たされていなければ満足できない」

「シーヴァー・・・あっ」

「できれば貴方と繋がりたい、だけどそんなことをすれば理性を失い、貴方を食い殺してしまう。私は生粋のドラゴンだから」

シーヴァーの傷ついたお面が外され紅い瞳がマリアンジェラを映した。

「私が恐ろしいですか？」

マリアンジェラは首を振った。そして自分からシーヴァーにキスをした。好きなのに、こんなにも好きなのに・・・ハッキリしない。

雲を掴むようなこの気持・・・何故か不安で堪らない。

「死んでもいいから、抱いて」

貴方が好きだから・・・不安

「好きなの・・シーヴァーが好き」

不安だから、死んでもいいから、抱いて欲しい。むしろ、貴方の腕の中デ死ねるなら、本望

「マリアンジェラ」

抱擁が一層強くなった。

。どちらも好きだから、靡かせないで欲しい・・これは私の我俣・・

第四十四章

「なーんであたしが手伝わなきゃいけないんだよ・・・」

ステラは文句を言いながらテルーカの研究室の片づけを手伝っていた。ほとんどが高熱の炎で溶かされ、もとの原型も保っていないが・・・。テルーカ本人はパンドラの扉に異常がないか見回っていた。王様命令で何人かの兵も居た。

「てか、重い！なにこの金属の箱！何はいつてんの！？」

「あ、お手伝いします」

シヨーンがステラに駆け寄り、荷物を持つ。見た目異常に重く、二人では全くビクともせず無理であった。

「だーもう、おつもっいー！おい、坊ちゃん手伝ってくださいよ！」
マリアンジェラに振られてから元氣のないウィルは空返事をして部屋の隅っこでしくしくいじけていた。

「・・・くっらあー」

「確かに、マリアンジェラさんが帰ってしまったのは、我々としても寂しい限りです」

「そうだけど・・・あの子が決めた道じゃないねえ」

「ええ」

シヨーンは寂しげに笑うと荷物を見た。

「仕方ありません。クレト將軍に手伝ってもらいましょう。呼んできます」

高熱に溶けなかったガラスではあるが、音声マイクは高温で壊れてしまっているの、シヨーンは階段で下までおりていった。

「ねー、ちよいと坊ちゃん」

ステラがウィルシアの頭を撫でた。

「男が何時までもいじけないでサー働いてよ」

「・・・」

ぶちっ

「きーてんの・・！」

「し！」

ウィルシアに口を押さえられた。

「?!」

「・・・やっぱり、何か聞こえる」

「ステラさん。クレト将軍お連れしました。この箱何処に運びますか？」

「クレト」

ウィルシアは立ち上がった。

「パンドラの扉から全員退避させろ！」

「あ？」

「早く」

ドクン・・ドクン・・ドクン・・ドクン・・ドクン
クンドクン ドクン ドクン

「だーかーら、シュシュのせいでえこうなったわけえー」

「そもそもお前が余計なことをするから、俺までココの片付けしなきゃいけないったんだろうが」

「テルカ・ユサラ将軍には悪いなあーっておもってるよお？だって魔法技術開発部門専任なんかよりまあったく違うぐらいいんらいもんねええー」

「素敵な皮肉をありがとう。お礼に拳をやろうか」

ドクン・・ドクン ドクン ドクン、ドクン ドクン ドクン ドクン
ドクン ドクン、ドクン ドクン ドクン ドクン ドクン

「・・なんの音だ？」

「鼓動の音？」

「鼓動？」

テルカ・ユサラとテルーカ・エニシン、二人は同時に同じ方向に

[illegible]

「なんかヤバイ？」

ぎやあああああ……！悲鳴が上がる、兵士達が逃げ出した。

あまりの急な事態に、テルカは動けないで居た。

ステラはガラス越しにパンドラの扉を見ていた。下に居た人たちはドンドン闇に飲まれていく。震えのせいで動けない・・蛇に睨まれた蛙のように・・。

剣を持ってクレトは走り出したが、ショーンが抱きついて止めた。

「離せ！」

ウイルスが首を横にフツタ。

「ふざけんな！あそこにはユサラも居るんだぞ！」

「將軍！」

「ねえ！パンドラの扉にヒビはあったけど！？」

ズズズズ・・・地響きが壁などに亀裂を走らせる。

「撤退しよう、クレト」

「・・・くそ！おいオメーラ撤退だ！！」

魔法で移動する間際に光る者をみた。

「ユサラ！」

自爆魔法・・・発動。

最期にユサラはウィルたちに手を上げていた。

「ちつくつしよおおおおおおお！！！」

クレトの咆哮が響き渡った。

第四十五章

「やっぱり、あんなものに手を出すんじゃないかったな」

王様は悔しさに唇を噛んだ。

「パンドラの中身は魔剣かなんかだと思っていたのだが・・本当化け物だったとはな」

化け物は最強な盾の防護魔法で今は抑えられてあの研究所から出られなくなっているが、恐ろしく大きくなっていくヤツで、まるでタマゴから帰ろうとしている雛のようにうごめいていた。

「アースグランド滅ぼす前にウチが滅びかねんな」

ルーシアは不安げに王に抱きついた。

「で？元に戻す方法は？」

「扉と契約するとか」

化け物が居るのでどちらにせよできないし、意味も分からない。

「あっはっは！困ったな！笑うしかねえやあっはっはっは」

皆で笑ってみたが、ヤツパリ笑えない。

「どうしよう」

「王様が分からないのでしたら此方も分かりかねますな」

もともとパンドラの扉分析反対派だったシア当主が皮肉を言う。さすがにぐうの音も出ない王様

「仕方ない、恥を忍んで」

「なぜ、私・・」

マリアンジェラは王家の紋のはいった手紙を見ながら呟いた。あの王様は私に何を期待しているのだろうか・・身分とは名ばかりのマリアンジェラに兵も何もないのに・・。

「……」

パンドラの化け物とは一体……。

「お父様、お母様」

「あら、マリアンジェラどうかしたの？」

花を生けていた母と、煙草をふかしている父の前に自分の意思で立つのは久振りだ。

「王様にお会いしたいのですが」

「何を言っている、お前などが会えるようなお方ではない」

「そうよ、第一何の御用でお会いするつもりなの？」

マリは手紙を取り出した。

「ウェザーミステル国王からの手紙です」

「敵国の王だと！そんなもの捨てろ！お前は我家に泥を被せる気か！」

「貴女そんな王族から何故手紙などくるの！？」

両親は立ち上がると手紙を奪おうと駆け寄ったがマリは離れた。

「こっちに寄越しなさい！」

「イヤ！私の話を聞いてさい」

「お前の話は後で聞く、それを寄越せ！」

「いや！」

「マリアンジェラ！いい子ですから言うことを聞きなさい！淑女は男性の言うことを聞くものですよ」

「イヤ！」

「聞き分けなさい！マリアンジェラ」

ぶちっ

「あああ———っもういい加減にして！！！」

「なっ、親に向かってなんてことを！」

「はっ？親？親なら親らしいことなさってくださいよ！口を開けば『ミケーレ、ミケーレ』で、私のことなど顧みて下さった事あって？」

「貴女はミケーレを自分のほうを大事にしろというの！？おこがま

しい！」

「せめて私を娘として見てほしかったといっているのですよお母様！」

マリアンジェラは叫んだ。

「聞けば私の名前・・シーヴァーがつけたそうではないですか。産んですぐに私は見捨てられ、召使達になんていわれていたか知っていますか？『影姫』ですよ・・？」

「お前は自ら！姫らしいことを一つとしなかったではないか！」

「私を見てくだらない人に、どうして話しかけることができるんですか！」

驚くほど、激しく、酷く、悲しい・・。

「私はただ・・」

ただ純粹に

「愛してほしかっただけなのに・・」

ただ一度も、私を娘としてみなかった。アナタたちの目に映る私はただの影・・『影姫』でしかなかった。

「会わせてくだらないというなら、結構」

マリアンジェラはきびすを返した。

「自分で会いに行きます」

「愚かな！会えるわけなからう」

「会えます」

はつきりと言い放った。

「貴方達が知らないうちに私は、大人になったのです」

自分の道は、自分で作る。

「さようなら」

非力で何の力も持っていない私でも、歩くことはできる扉を開けると、シーヴァーが頭を垂れていた。

「お供します」

手を引いて歩き出した。

・・二度と振り返ることはないと思う・・。

第四十六章

「じゃあシーヴァー私はケリーを探すから」

「かしこまりました、私はインファを連れ、長に話を伺ってきます」
シーヴァーと門のところで別れると、城の東側にある、訓練所に行き、訓練衆の居る近くの木の陰で、マリアンジェラは探し人の名を呼んだ。

「ケリー？」

「お、薄幸の影姫じゃーん」

「アローズ將軍・・・」

返事をしたのはケリーではなかった。豊満なボディは鎧の下でもよく分かる、日に焼けた顔で太陽の様に笑った。

アースグランド第一新鋭部隊元隊長、アローズ女將軍は、先の戦争のとき、敵もろとも自分以外の者をすべて大量殺戮を犯した罪と当時聖女隊を王の命令無しに勝手に使ったという罪で『終身刑』に課せられている。

そんな彼女がここに居るということは『戦がある』ということ。

「軍が、動くんですか？」

「動く？面白い事を言うね」

アローズはマリアンジェラの肩を叩いた。

「いま、ウェザーミステルとわが国は殺しあっているじゃないか、向こうに居たのに知らなかったわけではあるまいに」

目を細めると肩に置いた手を離れた。

「今暇だろう、少し話をしないか、ぜひ私の部屋で」

「あ、いえ私は用事が」

「ケリーは今ミケーレ様んとこさ」

「ありがとうございます、それでは」

「まあ、待ちなって」

アローズはマリアンジェラの腕を掴んだ。

「まあまあ、せっかく二人で居るのに邪魔するってのは野暮じゃないか？」

「・・・え」

アローズはニマニマ笑うとそのままひきずっていった。

質素、その一言に尽きる部屋だった。

「もともと牢に入れられる前からあたしやよく戦争に駆り出されてたからね、何にもないんだ」

「・・・」

「まあ、そう硬くならない、ならない。ただ話をしたかったんだ」「私と、ですか」

アローズは頷いた。どこか悲しげに・・・

「なぜ私？」

「・・・似てるからかな」

「誰にですか？」

「エルシオンちゃん」

・・・エルシオン・・・聖女隊 故 隊長 エルシオン・・・誰もが彼女に憧れ、誰もが慕い、信じ、誇りを持って生きて戦い散った

「聖女隊長様にですか？ 私なんてとんでもない」
両手でふるとアローズはわらった。

「うん、似てないよ」

ナンですかそれ

「顔とか性格とかじゃないんだ、なんつーの？ 雰囲気似てんだ」「はあ」

「信じるものは何もないって顔してんのに、まだ信じてんだよね、ハッキリしないとかさつくりだと思うよ」

「それは褒められていると思うべきでしょうか」

「ふふ」

笑って誤魔化すんですね……。アローズはお茶を汲むと机の上に置いた、熱々らしく湯気がはつきりと見える。

「前も言ったけどさ、あの戦い……。聖女隊が到着する前には既に我軍は私以外すべて滅んでいたよ」

「聖女隊が滅んだときですか？」

「そ」

圧倒的な戦力の差……。さすがの聖女隊もなす術はなかった。それこそ、巨人兵の血を継ぐ、アローズの絶対的な破壊力を使う以外は・、しかしそれにはリスクが大きすぎた。

「本気で、わたしや軍人として死を覚悟したんだけどね」

『ココで諦めたら、アースグランドは滅びるわ！アースグランドには、守るべきものが居るの！私は、私が散ってしまっても守りたいの！！』

「わたしや、断ったんだ。そして撤退命令を出したんだけど……。エルシオンちゃんは聞かなかった。他の聖女隊も、エルシオンちゃんと同じ想いで身を挺しはじめてさ……」

「隊長……」

「……本当はさ、巨人兵つつたってしよせんハーフだったから、破壊的な力なんて出せなかったんだ」

「え？」

ただ、皆ばったつばったと死んでいく。何もできない、どうすることもできない、無力だった。

「聖女隊ってさ、なんで聖女隊で選ばれるか覚えてる？」

「……魔法帯が見える人ですよね」

「そ、見えるってことは使えるってことなんだ」

あの日の戦いとき、エルシオンは命を引き換えにその身を越える大量の魔力を開放した。どんな魔法使いよりも強く恐ろしい殺意のこもった魔法だった。

「・・・隊長は、平気だったんですよね」

「目を開けたとき、目の前は真っ暗だったんだ」

それもそのはず、そこにはさっきまで一生懸命戦っていた聖女隊の少女達だったものが、私を囲んでいたのだから

「自分のことを魔法で守らず、わたしだけを守って黒ずみになって散っていったんだ」

何かが頬を流れていった。アローズ、残虐な將軍と呼ばれた彼女が、泣いていた。

「コレは罪なんだ、兵士なのにツルギを捨てた、諦めた罪・・・この罪を背負ってわたしや今生きてるんだ、妹が嫌う理由も分かるわ」

「將軍・・・將軍は悪くないのに・・・」

「あんがとさん。やっぱアンタと会話してよかった」

「え？」

「あんた、最初は無表情で心のない女かと思ってたけど、違ってたわ」

気がつけば、私まで泣いていた・・・どうして？

「ケリーももうミケーレ様との逢引は終わってるだろう、送ってやるよ」

分からないけど、彼女はもう泣いていない。なら私も涙を拭い、

目の前のことを考えよう

「ありがとうございます」

「ん？」

「私も覚悟を決めて挑みます」

「おう！・・・って何に？」

第四十七章

「ケリー、ミケーレ義兄様！あれ？ルジオ將軍にテセヴル將軍」

「お久しぶりですね、マリアンジェラ様。ご無事で何より」

「顔を見て安心しました」

人懐っこく笑うミケーレがマリアンジェラの手を握ろうとしたが、ルジオが服を掴んで止めた。

「失礼、疑うわけではございませんが、攫われていた場所は魔国、なにか罠があつてはいけませんので」

「彼女に限ってないでしょう」

「テセヴル第二將軍は黙っていてくれませんか、一応の安全のためです」

「私は別に良いです」

確かに攫われてから幾日も過ぎている、何かしていると考えるほうが自然だろう。

「それで」

ルジオは睨むようにアローズを見た。

「戦場以外の場所で貴女は何をしているんですか」

「薄幸の姫のお付き添い」

「は・・・」

薄幸姫・・・影姫より酷い・・・。

「ケリーに用があるんじゃないかったっけ？」

「ああ、そうなの・・・ケリー」

ケリーだけ掴んでミケーレの部屋から出て、耳打ちする。

「ステラに密告の仕事頼んだんだよね」

「ああ、そうじゃが？」

「ってことは、こっそり連絡取る方法とか考えてるんだよね」

「一応、鳥でやり取りをするはずだったのだが、あの農女無視を続

けおって!」

「まーまー」

怒りを抑えさせてもう一度耳打ちする。

「もう一度ステラに鳥を飛ばしてくれないかな?」

「いいが・・・なんでじゃ?」

「大事なようなの、ケリーは頭固いから教えない」

「なんでだ!」

「しー・・・後で教えてあげるから・・・これ手紙ね・・・たぶんこれもつけたらいいと思う」

「花?」

「うん。宜しくね」

ケリーとの会話は終わった。次は・・・

「義兄様」

「ん?」

「ミケーレ様の御用ならその場でお願いいたします」

ルジオが目の前を立ちばかった。

大声でできるような話ではないし、離せば邪魔されるどころか、手紙を奪われ燃やされるかもしれない。どうしたものか・・・

(・・・駄目よ、こんなところで諦めちゃ駄目・・・時には大胆にならなければ)

生まれ変わろう。

「・・・人には聞かせれない話なのです」

「怪しいですね、ますますもっていけま・・・っ!?!」

頬を赤らめ、目はウルウルとさせる。自分よりも身長の大きいルジオを見上げ、両手を合わせお願いのポーズを決める。

前回の私だったら絶対しなかった。

「義兄様にしか、身内にしかできない相談なの・・・お願い・・・ルジオ將軍」

お願い攻撃が聞いたのかルジオはうろたえた、その様子をみてア
ーロズは微笑んだ。

（やるねえ）

「ねえ、ボクからも頼むよ」

ミケーレも上目使いで頼んだ。

「し、仕方ないですね」

よし！

ミケーレの傍に行き耳に囁く。

「義兄様、表情を変えずにお聞きください」

「ウン頑張る」

そこは黙って頷いてください。

「魔法の国のほうでは今、世界の危機が及んでいるの」

「・・・？魔法の国のほうで世界の危機？」

「はい、黙ってね」

ミケーレは黙って頷いた。

「『パンドラの扉』っていうものがあってね、そこには化け物が・
あ、なんか説明がめんどくさくなった。とにかく化け物が魔法の国
で解放されたの」

「それって、ココを攻めてくるってこと？」

「そうなの」

「大変だ、魔法の国に今すぐ対策をうたなきや」

「違うの！」

水平ちよっぱが綺麗に入った。泣きそうな顔と疑問の顔とよくわ
からない表情を浮かべるミケーレにマリアンジェラは真顔で迫った。
「その化け物は無差別で人々を襲うらしいの、私もよく分からない
のだけれど・・・向こうの人も困っているの、私お世話になっていた
から・・・恩返ししたいの」

「恩返しって、向こうは君を攫っていた国じゃないか」

「そうだけど、ココの人たちよりは温かく感じたの」

この国の人がつめたいわけじゃない、でも、あまりにもココは息
苦しくて・・・私には辛かった。

「それに」

「それに？」

「このままでは本当に皆死んでしまいそうな気がして・・・怖いの」

パンドラの扉を見て、帰ってから、ずっと胸には不安しかなかった。どうしても分からないけれど、人と人とかかわればかわるほど、涙が溢れた。一生分の涙が流れていくような気さえる。

不安を打ち消すために私は頑張る

「義兄様お願い」

両手をあわせた。

「王様になって」

「うん・・・僕にできることなら・・・って無理ー!？」

スケール大きすぎた？

「無理じゃないって!だって次期王様じゃない!少し早いけど王様に隠居してもらって」

「どうやって!？」

「主張するの!」

今まで王子だというのに日陰に置かれ、今も次期王様だといったわりには囚われの身の姫様のように、毎晩監視がついて、王様の教育は長姫だけが教え込まれている。

「これを国民に主張すれば同情して推してくれる、そうすれば王様も従うしかないはず」

「難しいと思うなー、上手くいってもすぐには無理だし」

「・・・そうだね」

自分でも無理やりだなんて、言ってる気がついた。

「でも安心してマリアンジェラ」

「義兄様」

「ボクは役には立てないかもしれない、けれど、できることをするよ」

こんこん

ノックがすると、そこには双子姫が居た。

「テセヴル將軍私達には内緒でこんなところにいるなんて」

「お仕事とはいえ、少しは私達に顔を見せてくださらない？」

相変わらず無茶苦茶な双子だが、こちらをみると驚いた顔をみせた。

「あら、『影姫』じゃないの？帰っていたの？」

「帰ったのなら報告するのが礼儀というものじゃないの？」

「教養のない娘ね」

「仕方ないわ、両親から見放された娘ですもの」

この二人は本当にどうしてこうも人を目の敵にするのか・・・

「そういえば魔国に田舎娘が言ったと聞きましたけど？」

「ええ、賤しいくせに王である私たちのお父様に口答えるなど・・高が知れてますわよね」

「本当に・・・身分相応なものには、それ相応なものしか寄りませんものね」

二人はクスクスと笑った。

「・・・楽しいですか？」

マリアンジェラはミケーレに頭を下げると、二人の目の前にたた

た。
「王家の血を引く姫方、堂々とし、美しく、ご聡明あらせられる、ですが貴女方はそれだけです」

「なんですって？」

「そちらは正直な感想を述べてくださったので、こちらもあえて返し

しましょう」
マリアンジェラは真っ直ぐな鋭い目で二人の姫を睨んだ。

「王族にあるまじき無恥で、傲慢でわがままで、見目は麗しくとも心が不細工!!」

「「な!!」」

將軍も口を大きく開けた。

「あまり小鳥のようにさえずりまわっていると、鳥かごに閉じ込め
ますよ」

黒々しい笑みで牽制すると歩き出した。

第四十七章（後書き）

ノープランな作者

第四十八章

ララーちゃんは旦那に寄り添いながら、目を瞑り、先を案じていた。

「どうしようアナタ・・・」

「国が滅ぶというなら、我らも滅びねばならんのだろう」
シーア卿は冷静に呟いた。

「各国嫌われ者の我らが亡命したところで、仕返しとばかりにやられるだけだ。足掻くのもみっともなし、潔くいこう」

「アナタについていくわ」

そんな二人のやり取りを見ながらステラはそわそわしていた。

（あんな化け物この国どころか本当に世界滅ぼしちゃうって！）

遊びでこんな事につけたが、この国の人も内容のやばさにさすがに笑っていられない様子だった。世界を滅ぼすことも可能なのだろう

ヤツの閉じ込められている場所は悪雲が集まり始めていた。

「ばふ」

「・・・？レガード」

窓のほうを見ながら吼えていた。見に行くと、足に手紙をつけた鳥が居た。・・・アースグランドから？・・・でも今まで花をつけたことはなかった。もしかして

鳥から手紙を鳥、見る。

「マリアンジェラから・・・？」

『私は私のほうで頑張る、どうにか助かる道を探すから』
マリアンジェラに伝えた覚えはないが・・・誰かが助けをもとめたのか？

『私、帰ってしまったけれど、ステラのことダイスキだから』
短い文章、内容がちつとも分からないけれど・・・なんとなく嬉し

かった。

「ばっかだなあ」

帰ってしまったからといって、嫌うやつなんてここにはいない・・
。ホント変なところで小心者なんだから・・。

「さ、あたしもがんばろうかな」

とりあえず、この国のひとたちがはやまらないように、呼びかけ
でもしよう・・。手短にシーア夫婦を宥めに歩き出した。

◇・◇・◇・

「長」

傷を癒しながら横たわっているドラゴンの長を見ながら、二人は
声をかけた。

『分かっておる、扉が開き中の者が出ただろう』

「はい」

ドラゴンは目を薄っすらと開けた。

『昔、ワシがまだ未熟者だった頃、上のものに聞かされた話があっ
た』

【アースグランドの祖先、オースティンとウエザーミステルの祖先、
キムは神にあらず、アレらはもとよりただの人だった。触れてはな
らぬものに触れた故に人ならざるもとなり、邪悪なる者を閉じ込め
た、我らの祖も封印に携わった】

「祖先はどのように封印したのかご存知ですか？」

『酷い話じゃ・・』

話を聞いた二人はお互いを見合った。

「その話、本当なのですか」

『何度も聞かされたからの、わすれてはおったが、内容は忘れんぞ』
ドラゴンの長は立ち上がった。

『我らは一族を増やすので忙しい、今回のことで材料にされる前に去るぞ』

翼を開くと他のドラゴンも長にならった。

「長」

二人は長を見上げた。

「長きに渡り、私どもを世話し両親代わりとなってくださり、ありがとうございました。ここでお別れです」

『何？』

「私どもは人間達と生きて、少し情がわきました。できれば助けたいと思うのです」

『なんと・・・死ぬ気か』

「子孫繁栄、心よりお祈りしております」

二人は長に向かい頭を垂れた。他の仲間が止めるように鳴き声をあげた。

『ううむ』

長は唸ると頷いた。

『好きにせよ』

羽ばたき空にあがる。

『ワシもな、お前達のこと、本当の子のように思っていたぞ』

群れを連れて、大陸を渡っていく。恐らく竜神がこの地に戻ってくることはもう二度とないだろう。シーヴァーやインファは群れが見えなくなるまで見送った。

「ねえ、シーヴァー」

インファは隣に居るシーヴァーのよこ腹をつついた。

「お嬢様と何処まで行ったの」

「何をいきなり」

「茶化さないで、お嬢様が悲しむようなこと・・・したくないのよ」

インファはシーヴァーを見上げた。

「私だって好きなんだから」

「・・・分かっているさ」

二人は見合った。

「お嬢様は助ける、お嬢様の大切なものも」

「その役は、私がやるんだからね」

インファは歩き出した。

シーヴァーも後を追う。

なにかしら、世の中は残酷にできているらしい。二人は覚悟を胸に歩き出した・・・。

第四十九章

マリアンジェラは家に帰る気はないため、今は王宮にあるシーヴァーの部屋に居た。部屋にあった鏡で自分の顔を見つめる。

昔何度も見たその顔は、もう無表情ではなかった。むしろ、悲しげである

「どうかしましたか？」

「シーヴァー・・・分からない、何故かずっとずっと不安で、堪らないの」

何かが訴えている。何かは分からないけれど・・・。

「私が居ます、お嬢様」

「もう、お嬢様じゃないよ・・・？家出したから」

アナスタジアの名を、私は捨てた。必要のないものだから・・・。

「ねえ、抱きしめて」

抱擁をねだる。シーヴァーはゆっくりと抱きしめる。

昔ステラが泣きじゃくる私に読んだ物語、どんなに不幸な運命にある恋人同士でも、最期は必ず幸せになる・・・って、ステラはそういつて頭を撫でてくれた。私は本当にそうなるのか分からなかった。今も分からない。

「あのね、シーヴァー」

でも

「私、昔ずっと思ってたの・・・。何もない、名前だけの影姫と呼ばれてもいい、私には、あなただけがいればいいって思ってた・・・。なのに、ふられた」

「・・・」

「この身が引き裂かれるぐらい、悲しかった。本当に何もなかったんだって・・・思ったから」

シーヴァーの抱擁から少し離れる。

「でもね、ウィルシアに攫われて、ウェザーミステルに行って、変わったの」

本当に変わった。

無表情ではられないぐらい、毎日が奇天烈で、可笑しくて、親身になってくれたと思っただけならみんな逃げ出して・・・。

「私、耐えなくて良いんだ。思い切って生きて良いんだってことが、分かった」

「帰りたいのですか？そちらに」

マリアンジェラは首を横にフツタ。

「シーヴァーの居るところに私は居たい、好きだから、一緒に居たい」

「マリアンジェラ」

シーヴァーはマリアンジェラの手を握った。

「愛しています。ずっと、ずっと・・・」

唇が触れた。

◆◆◆

「ミケーレ様、私聖女隊の補佐隊長として、忙しいのですが！」

「ご、ごめんね？会いたくてつい」

赤面して謝る恋人にケリーは小さく溜息ついた。

・・・自分は男らしく、清楚なルジオ隊長が好きだったはずなのに・・・
どうしてこんな女々しい男なんかが好きになったのじゃ？女装させたら絶世の美女だし・・・。

・・・自分で思ってた落ち込んだ。

「あのね、ケリー」

（近！）

この男、なよなよとしているくせに、こういうことには手が早い
のだから油断ならない。・・・ふ、まさかこの私が手箒めにされるなど、
気のまよいじゃ

「おい、ケリー・キスしちゃうよ？」

「なんじゃ！」

近づいて来た頭を掴みながら聞くと、ミケーレは残念そうに舌を出した。

「あのねケリー、ボク君のこと愛しているんだ」

好きではなく愛しているというところが、あれですね。

「な、なにを、今更」

「でもね・・ボク、マリアンジェラの力になりたいんだ」

「え？ マリ・・？」

何故ココでマリアンジェラ？

「僕のせいで彼女には幼い頃から可哀想な境遇を生きらせることになってしまったんだ」

「しっておる、両親すらも存在を忘れるからついたあだ名が『影姫』とか」

「そうなんだ」

手をちゃっかり掴んだ。

「それでね、ケリー別れてほしんだ」

「なんだそんなこと・・って、なんじゃそりゃああああああ！？」

手伝ってほしいんじゃないやなくて別れてほしい？！

「な、なん、え？ な、わ！ あ・・」

なんっていえばいいんじゃない？！

「なんでなん？」

気弱い声が出た。

「いまね、魔国でこの世界を揺るがすほどの化け物が生まれたんだ。マリアンジェラは皆で戦えば勝てると思っているらしいんだ」

「化け物なら、たかが一介の兵士では無理じゃろ」

「そうだよ、だからボク、マリアンジェラと会話した後、アローズ將軍と相談したんだ。こういうことに慣れていそうだったから・・そうしたら」

『人ならざるものを倒す力を持つのは、『聖女隊』のみ』

「・・・そうじゃ、自分の持つ力は魔法使いとはすこし違うと思っていたのじゃ・・・もしかしたらこのための力だったのかもしれない」
だとしたら・・・。

「自分は自分の運命を全うするときじゃの」
誇らしいわ

「でも、王が魔国に協力兵を送るわけなからう・・・？」

「だから、ボクが王になるんだ、聖女隊の出動の命令を出せるのは王様だけだからね」

「だから別れるといったのか？」

「違うんだ」

ミケーレは悲しそうに笑った。

「・・・アマンサと結婚する」

「は？」

「ボクとは腹違いっておもってるだろうけど、実際アマンサとは血は完全に繋がってないんだよね」

アマンサの母の妹が僕なわけだから・・・身分が高くて、王様の血を引いていないんじゃ、他の臣下に王様になるのを邪魔され、なんだかんだでアマンサを王様にするつもりだ

「そもそも、魔国に取られたくないから意味もなく僕をココにしているわけだし」

独占欲だけ強いこの国・・・。生きずらいと感じていたのはマリアンジェラだけではなかった。

「・・・アマンサ姫を利用するのか？」

母親と同じく、誇り高く、美しく聡明な、芍薬のような姫・・・。
そして

「自分すらも切り捨てるといえるのか・・・？」

愛しているといいながら・・・戦場へ行く自分の背を見守り、帰りを待っていてくれたのに・・・今更、捨てるというのか・・・？

「ごめんね・・・」

マリアンジェラのために・・・？

「・・・知らん」

「え？」

「知らん！勝手にせい！この女装癖シスコン腹黒似非男！！！」

「えー・・・悪口言うならせめて一つにしてよー」

「知らん！アマンサ姫に殴られるが良いわ！！！」

扉を勢いよく開けて、早足で歩き出す。

あのアホ男め・・・うぐぐ、腹ただしい・・・なーにが、一生懸命で一途な君が好き・・・じゃ！！！」

「っ・・・」

涙が溢れる。

「阿呆・・・」

「おや、聖女隊の方がどうかなさって？」

「！」

急いで涙を拭き、顔を上げる。そこにはアマンサと双子姫が居た。

「あ、アマンサ姫！これは失礼いたしました、御通りください」

道をあける。双子姫が興味ありきという感じで人の顔をマジマジとのぞいてきた。

「泣いた？」

「女を捨てた兵士も泣くのね」

「な！」

双子姫はクスクスと笑った。

「こら」

アマンサがぴしゃりと怒った。

「ちようどいいわ、私は行くところがあるから、ケリー・・・といったかしら」

「はっ」

「この子達をテセヴル將軍のもとに連れて行ってあげて・・・すぐ脇道逸れるのだから」

「かしこまりました」

行くところ・・・ミケーレのところだろうか・・・胸が痛い。

双子を連れ歩きだす。

「テセヴル將軍・・・何時になったら私達を見てくださるのかしら」
ふん、お前達などエルシオン様に劣るのに見るはずがなからう。

「・・・永久にないかもしれないわね」

傲慢な双子姫にしては、弱気な発言だった。

「『好き』ってだけじゃ、駄目なときもあるものね」

「どう私達が『好き』っていったって、テセヴル將軍が死んでしまった人のほうが『好き』だものね」

「いえなかった分だけ『好き』なんだね」

姫というものは嫌いだった。権力をかさに好きなことを言ったりやったりするから、でも・・・今だけはちょっと好きになったかもしれない・・・。

「・・・見守るのも、一種の『愛』なのやもしれません」

ケリーがそういうと、二人は驚いた顔をしたが、にっこりと微笑んだ。

「『そうね』」

愛しているからこそ、ままならないことも、ある。

第五十章

「駄目だ」

ウィルシアは王宮の書庫を漁り、過去の文献を探し回ったが『パンドラ』の扉についての文献は何一つとしてなかった。

「これはますます、ご先祖様でも紹介するしかないか・・・？」
できっこないことを言って、自嘲する。

「はぁ・・・せめて化け物の正体をつかめればな」

「教えてやろうか？」

「ユサラ!？」

振り返るとそこにはフワフワと浮いている、シュシュだった。

（あ・・・そうだった、ユサラは、死んだんだった・・・）

「ぶっぶー」

シュシュは怪しい光を秘めた瞳で笑った。

「ボクはテルカ・ユサラでもあるし、テルーカ・エニシンだよ」
「?!」

シュシュは地面に降りると頭を叩いた。

「ちよっと！テルーカ勝手に喋らないでよ！えーいーじゃあーん、死んじゃったんだからあー」

一人で二人の声色になった。この声は確かにテルーカ

「どうゆうこと？」

てゆーか気持悪いんですけど？

「僕的能力は他人の脳を見る力、テルーカは脳の情報を操る力、そして・・・」

瞳の色が変わった。

「俺の力は、同属に憑依できる、自分につけることも可能だ・・・あのときテルーカが飲まれる前に魂を回収し、自分が自爆する寸前に、シュシュに乗り移った」

「あれ？ シュシュの存在知ってたの？」

「テルーカ・エニシンの脳の情報をく、テルカ・ユサラにコピーして、ボクは乗り移られたのさ」

すんごく迷惑そうにシュシュは言った。

「またあえて嬉しいけど」

ウィルは複雑な顔をした。

「見た目は変わんないの？」

「あくまで『憑依』だからねえー」

「ふーん、まあいいつか・・・で？ 正体は分かったの？」

「まあー、間近どころか・・・食われたかあらねえくまあテルーカの
見立てによるとアレは、『分解者』だね」

「分解者？」

「何事にもはじまりというものがあるんだよおー？ この世界や我らが祖を造った基礎・・・『創造主』がいるわけさあ、それをあえてモノに例えるなら『大きな林檎の木』」

林檎の木は無条件にできるだけいっぱい実を結んだ。新しいのができれば古いものは落ちる。落ちれば地にぶつかる、腐る・・・朽ちる・・・『分解者』は腐敗したものが積もりに積もり、木に害を与えないように落ちた林檎を喰らう。

落とす、喰らう、落とす、喰らう、落とす、喰らう・・・その繰り返し・・・その輪廻が崩れたとき、『分解者』が『創造主』を喰らい、壊れ始めた・・・。

「一つ質問していい」

ウィルが話をさえぎった。

「ん？」

「どうやって分かったの？」

「喰われたら分かるよ」

「遠慮しとくよ」

片手で断るとシュシュは鼻で笑った。

「でもなんで輪廻が壊れたのかわかんないんだろおー？ やったった

だずー・・・いて」

「身体も操ろうと思えば操れるんだ？」

「まあ、『憑依』だからな」

しかも喋る人がコロコロ変わるから、いま誰と喋ってるのか分からない・・・

「あ、でも扉の中に引っ張られるときに、ちょっと扉に違和感を感じたんだあ」

「違和感・・・？」

「うん、多分あれは――・・・」

◆・◆・◆・

「父上、今よろしいでしょうか」

「・・・アマンサか、どうした」

謁見の間、王は仕事をしながら入ってきた娘を見た。母親に似て気の強い表情、娘が誰一人として自分に似なかったことや、息子が生まれなかったことは王としては非常に心残りではあるが、今更もう一人という体力はない・・・

そんなことを言えば『男になる』などと言い出すので、どうもいいない。

「お父様にお聞きしたいことがありますて」

「言ってみろ」

アマンサが王の血を継ごうと頑張っていることは知っているので、できる限り、願いを聞こうと常々考えていたが、アマンサはめったに願い事を言わない。なので、珍しいこともあるものだと言った。

「私に王位を下さるのですよね」

「ああ、お前ほど王に相応しいものは居ない」

「お父様、私は王に本当に相応しいですか・・・？私じゃ荷が重うご

「ございませんか」

「そんなことはない！お前に適任だ」

「では、お父様、私を王にさせてください、あさってにでも」

「何？早くないか？」

「私はもう26ですよ・・駄目なのですか」

アマンサはなみだを流した。

「な、泣くほどではなからう・・！はあ、分かった分かった、もうすぐ魔国も滅びるし・・よからう・・余ももうとしだしな」

まさか泣かれるとは思っていなかった。

「王、よろしいのですか？」

臣下が控えめに言った。

「よい、アマンサは聡明だし・・統治力にも長けている・・問題なかろう」

「早急な気もいたします」

「私じゃ、いけないと申すか」

「え！？い、いいえ？！とんでもない」

「ええい！もうよい、下がれ」

王様は臣下を下げらせた。

「では、アマンサ後を任せるぞ」

「承知」

頭を垂れると歩いていった。

廊下を行くと、拍手をするミケーレがいた。ニッコリと微笑むとアマンサの頬にキスをする。

「お上手」

「ミケーレは悪魔ね・・羊の皮を被った悪魔だわ」

「・・狼じゃなくて？」

ニッコリと微笑むとアマンサも微笑み返した。

王位を手に入れるのもそう遠くはない・・。

第五十章（後書き）

ミケーレ腹黒！w

ちやくちやくとことが進んでいく。さて、マリアンジェラや他のみんなの運命はいかに！？

第五十一章

化けものを呼び起こして早くも一ヶ月がたった。最強な盾のおかげでよくもまあ今の今まで無事だったと思う。そして、誰も亡命しないところを見ると、今までの『遊び』を反省してしまう

「あー、もうこれはあれか」

魔国の王様は面白くない退屈をしたことのように両手両足を投げ出した。后もそれを真似して投げ出した。

「この世の終わりってヤツかあ」

「終わらせるキツカケを与えたのは俺らですけどねー」

「おう、ウィルシア・シア宰相か」

王様はさぼり癖のある宰相を見た。彼は笑っている。

「なんだよー面白いて皆乗ったくせに、俺だけのせいにしてよーいいよ、いいよ、俺のせいですよーだ」

「いい歳してなにいてんてんすか、まあいいけど」

ウィルは手紙を王様に渡した。

「？」

「ステラから」

メモ程度の紙を見ると、そこに小さく文字が書かれていた。

「マリアンジェラからか」

「はい」

『もうすぐ、参ります』

その一文しかなかったが、希望がこめられているような気がした。

「つてか、マリアンちゃんが来てもしゃーなくね？」

「あとこれもドウゾ」

アースグラン드의国の紋の入った手紙。

『此度の化け物退治、世界規模のようなので、わが国も貴国に協力

しよう。しかし、のちのことはまた話し合いましょう」

「仲良くする気はないってか」

でも、と笑った。

「生きる気力がわいたなールー！」

「？」

分からないでもニコニコと笑う后。援軍が来ると喜んでいるが、果たしてどうするつもりだろうか・・

（マリアンジェラがあのことを知っているとも思わないけどな）
なんだかんだいって、お嬢様のマリアンジェラが、戦争について分かっているとも思えなかったが、今は協力を仰ぐしかない・・。
余計なことはいえないな

「陛下、アースグラン드의国旗が見えます、迎え撃ちますか！？」

「よい、客人としてもてなせ」

「は?!」

兵士が驚くのも無理はない・・。

「いいから」

しかし、王様の命令は絶対だ。

少ししてから盛装姿の女王アマンサと、正装したミケーレが現れた。ウィルは口笛を吹いてミケーレを見た。

（女々しいだけの坊ちゃんかとおもったら、いいがー）

「今後の話をしようか」

緊急会議がしかれた。

ケリーと同じポジションにマリアンジェラも居た。じゃっかん忘れていたが自分も聖女隊であつた。槍を持ったまま配置で待機する。

「ケリー・・」

マリアンジェラはすまなそうな顔をしていた。

「アユリ様から聞いたけど、義兄様と喧嘩したんだって? ごめんね、

私のせいで」

「別れたのは確かにお前のせいだが、決めたのはミケーレ様じゃ・・それにどうせ結ばれぬ星のもとに居るから・・いいんだ」

「ケリー」

マリアンジェラはケリーの顔を見た。

「義兄様と付き合ってたの？」

「知らなかったんかい」

「みんなー聞いてくれー」

アーロズが声をあげた。

「明日、最強の人間が結界を開放する、そうなったらみんなの力で魔力を思いっきりぶつけてくれ」

「將軍！人間じゃなくて最強な盾でしょ?!」

「えー？ハレル君細かいなー」

「將軍が大雑把なだけです」

明日・・緊張する。・・あれ？

「ねえケリー」

「なんじゃ」

「魔力もってるの？」

「そうだが？」

・・私、ないですが？

「ふむ、武家の娘に生まれたからには、やはりツルギと共に運命を果たしたい」

「ご立派な考えだけどさ、死んじやったらなーんにも残らないよ」

アーロズがいつの間にか目の前に居た。ハレル君が一生懸命戻ってきて下さいー！といていた。なんか可哀想だな。

「って、言っちゃって、聖女隊が前線きって敵に向かうんだけどねー」

「アーロズ將軍も、立ち向かわれるのですか？」

「私は勿論、誰もがそう望んでいるから」

ニッコリと笑う。

「そうでしょうか」

ケリーは珍しくアーロズに敬語を使うと、別のところに目を向けた。アーロズも其方を向く。目の行く方向には、ハレル君が居た。

「自分、何も知らずに將軍を責めておりましたが、マリアンジェラから話を聞いて、考えを変えました」

ケリーらしく、真っ直ぐな瞳で將軍を見た。

「將軍、自分は己の無力さの悔しさ、前回の戦争で身に沁みて分かりました。そのとき思ったのです。自分が死を望んでいても、望んでいないものもいるということを・・・」

「ミケーレ陛下から教えてもらったの？」

「はい」

といった後、頬を染めた。馬鹿正直に言ってしまったと思っているのだろう・・・分かりやすい

「しかし、我々は軍人、死なねばならぬときもありましょう」

アーロズは微笑んだ。

「志のために死ぬのは良いが、心で死ぬってか？」

ハレル君がやつのことで追いついた。

「もう將軍、配置についてください！明日の朝、すぐに出立するんですから！」

「了解」

アーロズはマリとケリーの頭を交互に撫でると、歩き出した。

「はっはっは！コレが終わったら飲みにいこうや」

片手をあげて戻っていった。

もうすぐ、夜明けだ・・・。

第五十二章

朝になった。出陣だ！

パンドラの扉のあった場所にいくと、その上空で最強な盾が両手で何かを抑えているのが見えた。それと同時に悪寒が走った。

「なに・・・この感じ」

聖女隊も怯む・・・禍々しい気配が、ぞっとさせる。

「開放——！！」

クレト将軍のよく響く声が後方で聞こえると、エイジスは両手を離し、後方にと下がっていった。

ズズズズズズ！！ハコノナカに閉じ込めたドライアイスを開放したとき、冷気が外に溢れるように、闇の気配が広がった。

「怯むなあー！」

アーロズ将軍が馬に乗って駆けてきた。

「敵を倒せ、撃て——っ！！」

聖女隊は体中に光を纏い、それを一気に敵にぶつけた。

『はあああああああああああ！！』

マリアンジェラはことを眺める。

闇がうごめく、しかし、きいていないようだった。

「効いてないな」

アーロズは眺めながら呟く

「ハレル君、後方に下がり、クレトのおっさんに撤退指示を言って来い」

「え？ですが隊長」

「作戦は失敗だ、このままじゃ」

化け物が動いた。

「全滅だ」

聖女隊は神経を集中させ、力を化け物にぶつけた。

「將軍！私達は諦めません」

「例え勝てなくても、押さえつけることはできますわ！」

「その間に」

ケリーは叫んだ。

「我々は簡単に諦めたりはせん！！！」

アーロズは剣を抜き、持ち上げた。

「聖女隊に続けー！！」

兵士は化け物に向かっていく、動けない化け物を切り刻んでいく。

オオオオオオオ！！

化け物が苦しそうな声をあげた。

「いける！」

後方に居たクレト軍も化け物に襲い掛かる。黒い血が溢れ流れる。

オオオオオツオ！！！！

「よし、中々いい調子だ、ショーン」

「はい、クレト將軍、ここに」

「一気に勝負に出たい、魔法軍をつれて来い」

「は！すぐに」

ショーンは抜いていた剣をしまうと、戦場を走り出した。

「え？マリアンジェラ様・・・？」

アーロズの軍の中で、只一人身体を守るようにうずくまった少女が居た。

「マリアンジェラ様？」

近寄ると、なにやら化け物を見たまま、虚ろな表情をしていた。

「どうしたのですか？」

肩を掴むと、マリアンジェラは倒れた

「マリア・・・！？」

「・・・ショーン・・・う、痛い・・・痛いの」

マリアンジェラは身体を押さえ、辛そうに揺れた。

「つつ」

ショーンはマリアンジェラを抱き上げ、戦場を走り出した。

「私の用のついでで申し訳ありませんが、一旦我陣営にお越しいただきます」

マリアンジェラには既にショーンの声は聞こえていなかった。

（体中が痛い、なにかに、肉を奪われていくような・そんな気さえする）

意識が遠のいていった。

「マリアンジェラ!？」

ウィルシアがショーンからマリアンジェラを受け取る。

「戦場で痛いと言っていました、外傷はございません」

「確かにないけど、どうしたんだ・・・？」

「おそらく、守護が無くなっていつているんでしょう」

「お前らは」

インファとシーヴァーがドラゴンの翼を背に生やした状態で現れた

「何か用？」

「お嬢様の顔を見に来たのですよ」

「闇の精霊の福音を受けたお嬢様は、あれと近くに行けば行くほど、お嬢様の中の精霊が喰われるのを嫌がり、逃げ出そうとする、その反動がお嬢様を襲うのでしょうか」

インファはそっとマリの頬を撫でた

「魔法隊、出陣！」

ウィルシアは竜神族を無視して命令を出した。

「化け物を殺せばいいんだろ！」

「殺せるものならな」

突如風が起ると、そこにシュシュが現れた。

「え？」

「シュシュが動かないから憑依した、テルーカが言うには何かを動かすには何かが必要となる。それと同じであるの化け物が居ないと、この世の生死がリサイクルしないんだと」

「つまり、殺すなってこと？」

「ああ」

「じゃあ俺らは、黙ってコロされろって言うのか」

「・・・」

シュシュもといテルカ・ユサラは黙った。何もいえないらしい・・・。

「ありますよ、やつを殺さず、生かさない方法が」

インファが微笑んだ。

「え？」

化け物から遠ざかり、意識が戻ってきたマリアンジェラは目を薄くすらすらと開けた、景色は見えないけれど、声は分かる。

インファの声だ・・・

「我々が扉となるのです」

・・・え？

「もう一度封印するには、今まで以上の強固な扉を作る必要があるのです」

「それで、なんで・・・」

「あの扉は、我らが祖先なのです」

・・・パンドラの扉・・・？

「其方の祖先が我らの祖先で扉を作ったのです、我々がもう一度扉と融合すれば、もう二度と開くことはないでしょう。そうだった暁には」

インファの声が消えた。

「・・・扉を誰の手の届かないところに隠してください」

そうしなければ、また今と同じようになってしまおうだろう。それ

だけは避けたい。

「・・・誰が犠牲になるつもりなんだ」
ウィルシアの声が、重い

「私です」

インファが即答した。

「魔法使いの血も引いている私なら、扉は恐らく特殊なものになるでしょう」

「そうかもしれないけど、扉になるってことは」

「死ぬってことですね」

え・・・インファが死ぬ・・・そんなの
手を伸ばす。

「お嬢様！」

「だめ、インファ逝かないで・・・」

どうして、死のうとするの・・・そんな駄目だよ

「インファも、居なきゃいやだよ」

頬に温かいものが触れた、インファの匂い、インファの柔らかい
手のひらが・・・温かい。

柔らかくて優しくで甘いにおいがして、ダイスキな君の感触。

「私、皆みんな、大嫌いだったんです」

生まれのせいもあるけれど、混血種だから、だれもが馬鹿にして、
忌み嫌った。それが悔しくて、武術や兵法を学び、作法も覚え、誰
にも負けないように、生きてきた。

「生きればよかったんです」

ただ、生きれば

「でもね」

なで・・・

「アナタが違うってことを教えてくれました」
生きるだけでは駄目だって

第五十三章

・・・アナタが教えてくれたんです。生きることの大切さ、健気さ、面白さ

「お嬢様はそんなの身に覚えが無いとか思いでしょう？」

「うん・・・」

「でもね、生き様で教えてくださったんですよ」

インファは立ち上がると、翼を広げた。

「・・・行きます、お嬢様・・・今までお世話になりました」

「や、インファ」

マリアンジェラは立ち上がり、インファに抱きついた。と、同時にめまいがした・・・。

「お嬢様は横になっていてください」

シーヴァーにマリを渡すとインファは振り向かず、去っていった。

「お嬢様」

シーヴァーはマリの顔を撫でて何かを呟いた。

「愛しています、これからずっと」

唇が重なった。

「シーヴァー・・・？」

「たとえば、姿は見えなくとも、気持は変わりません」

シーヴァーはその身を真っ紅な鱗を纏う竜になった。魔法使い達がざわついた

「おい！」

ウィルシアは叫んだ。

「あんた人間になる魔法をかけられた竜だろう！？なんで強引に魔法を解いたんだ！」

「どうなるのですか？」

ショーンが床に崩れていたマリアンジェラを抱き寄せた。

「命が削られる・・・」

「!!」

「死ぬ気か!？」

『お嬢様、お嬢様の人生好きに生きて良いんですよ・・・?』

シーヴァーは微笑んだ

『インファは、死なせません』

翼を広げて吼えた。そのまま飛んでいく、マリアンジェラは手を伸ばす。

みんな、みんな行ってしまう・・・私は何をしているのか・・・私はどうしてこうも何もできずに居るのか・・・大切な人は私から去ってしまう・・・私の返事も聞かぬままで・・・

シーヴァー・・・

「行かないで!シーヴァー!!!!」

手を伸ばす、届くことのない手を・・・

「イヤ、行かないで、傍にいてよっ・・・シーヴァー!」

アナタだけ居れば、私はそれでよかったのに・・・

アナタはいつも、私に背を向ける・・・

・
こんなにも・・・愛してるのに・・・愛しているといってくれるのに・・・

「どうして?」

黒い化け物が聖女隊を嫌がるように黒い触手を伸ばしたり縮めたり、身体を変化させていたが、聖女隊の力によっておさえつけられて居るので全く身動きが取れないでいた。

「アールズ將軍」

インファは將軍の前に降り立つと、羽をしまった。

「私があゝの扉のところに行くまで、援護してください」

「は？」

うわああ！という驚きの声が聞こえ、將軍は上をみた。・・今日の
お天気は悪雲あくうん時々竜ですか・・？

どすん、竜は大地に降り立つ

「シーヴァー何故来たの？！アナタはお嬢様と居なさいよ」

『お前より私のほうが適任だと思ったからきたんだ』

「へたれ！いつも逃げてばかりね」

『五月蠅い、今はそんなときじゃないだろう』

「今じゃなくて何時話すのよ！」

二人は睨み合う。

「お嬢様の気持、本当考えないわよね！」

『・・結ばれないだけなら』

「え・・？」

『いつそ離れようと思った』

一緒に居られないのに好きになっても、辛いだけだ、ならいつそ・
・この想いが押さえきれるうちに、かくして閉じ込めてしまおう・・
そう思っていたのに

『でも、ミケーレ様が言ったんだ『言わないよりは言ったほうがいい』・・あれは確かにそうだった』

心が震えた。体温が上がった。愛しさが増した。

他のことがどうでもよくなるぐらい、好きが溢れた。そんなこと
誰にも言わないけれど・・

「一緒に居てあげなさいよ・・私なら、未練は無いから」

『インファ』

オオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

「うわっ!？」

アローズやインファが吹き飛んだ。強風をおこした化け物が危険を察してか動き出した。聖女隊の人も疲れからか大地に座り込んでいた。

「・・・っ」

ケリーは剣を大地に刺し、かろうじて立っていた。

「負けるものか！」

魔力を放出する。

「あぁと、ちよつと・・・ケリー・ボードヴィンの・・・てー!!！」

「んな!？」

どっさ!!ぶつかった。

「うわ！」

「危ない」

ケリーの背中を誰かが支えた。

「ルジオ將軍」

「大丈夫か？」

インファは腰を抑えながら立ち上がった。

「いてて・・・ああ、アローズ將軍とはぐれてしまったわ」

風が巻き起こり、何人かも吹き飛ばされていた。

シーヴァー以外は

オオオオッオ!!

『・・・お嬢様』

愛していました。本当に・・・

「シーヴァーアアア!!！」

インファは叫んだ。

「お嬢様に黙って逃げるなんて卑怯よ！」

光が、まるで閃光のように発せられると、爆発したかのように光が皆を包んで、視界が真っ白に変じた。

「シーヴァアア——っ！！！！」

インファの声も虚しく、光がはれたとき・・・そこに在ったものは、何も無かった・・・。

「やったー、敵を倒したぞー！」

湧き上がる歓声の群集の中、インファはただ呆然と、立ちつくしていた。

私、お嬢様になんと言ったらいいの・・・？

第五十四章

あの事件から三年の月日がたった。

事件終了後、アースグランド新国王アマンサは、正式に終戦条約をとるため、ウェザーミステルに協定を申し出た。ウェザーミステルに否定する権利は無く、条約は受けられたがアースグランド内では大きな内乱がおきた。

魔国否定派と平和肯定派でわかれ、最終的に戦争に嫌悪していた国民や・・すきあらば独立を図ろうとしていたアスランダが魔国否定派を一網打尽にした。

これで永きに渡り行われていた無意味な戦争は終了し、アースグランドの内情は全く新しいものと変化したのであった・・。

・・そして、私は

リンゴーン・・リンゴーン・・教会の鐘が鳴る。

「あー、マリー綺麗よー」

白無垢姿の私を見て、ララーちゃんは涙ぐんだ。

「ま、もともと顔はいいほうだったもんな」

「ステラ酷い」

「あっはっは！冗談だって、ほら笑えって」

シーア家の自慢の野放し庭園で、今日結婚式が上がる。

「お嬢様」

マリアンジェラは立ち上がる。

インファが手を差し出す、その手に引かれ歩いていく。

「お嬢様・・お綺麗ですよ」

「・・・ありがとう、インファ」

庭園の中央に立つと、そこには正装をしたウィルシアが居た。いつものおちゃらけた顔ではなく真剣な眼差し。

今日、彼と結婚する。

シーヴァーを失い、悲しみに明け暮れていた私を、傍でずっと支えていてくれていたウィルシア・・・再び私にプロポーズをした・・・彼を忘れることはできないといった私でもいいと、言ってくれた。

その優しさが、痛かった・・・けれど

「では結婚式を始める」

みんなの薦めや、ココロの空白を埋めるように、私は受けた。結婚式が行われている中、ウィルシアはニツコリと微笑んだ。

「今はさ、勝負に勝って、試合に負けた気分だけどさ・・・そのうち、キットすぐにだよ」

「？」

「君の心も奪ってみせるから・・・あの時初めて君に会ったように」

「な、もう・・・馬鹿」

「ふっふっふー」

「では、誓いのキスを」

唇を差し出そうとしたら、ウィルシアが先に頬にちゅつとソフトキスをした。

「？」

頬を押さえていると、勝ち誇った笑みを浮かべた。

「キスは、俺がアイツに勝ったときにすんごいことするから」

「・・・シーヴァーに勝ったときに・・・ってどうやって？」

もう・・・居ないのに？

「いや、あいつは戻ってくるね」

ウィルシアは確信を持った声で言った。

「この結婚式は保険だと思っていいよ、このままアイツが帰ってこなかったら俺の勝ち、あいつよりも俺を好きにさせたら俺の勝ち」

「・・・勝率大きいね」

「ハンデだよ、ハ・ン・デ」

はよキスしろーと外野から声が上がった。主にララーちゃんの声だったけど・・・。

「じゃあ花嫁さん、俺と遊びに行きましょう」

「きゃ!?!」

お姫様抱っこをすると、魔法で浮かんだ。

「俺、負けねーから」

お嬢様、愛しています・・・ずっと

傍に居ますから。

「ねえ、ウィルシア・・・」

「ん?」

魔法で移動して、雲の上・・・魔法で触れるようにしているからふわふわのこもこで気持ちいい

「シーヴァー・・・帰ってくるかな・・・?」

「来るでしょ、君への執着も怖いもんだし」

ニッコリと笑う。

「あ、でもさ」

「なに?」

ウィルはマリを抱きしめた。

「あいつ帰ってきてても、君攫って逃げるから」

「ええ? 意味ないじゃない」

「たまには形勢逆転しないとね」

そういったウィルシアの話はすべてシーヴァーが帰ってくるものだった・・・たとえ彼が帰ってくることがなくても・・・私は、ずっと・・・心で待ってる

だって

アナタが、
ダイスキだから・

第五十四章（後書き）

一体誰が幸せになったのか、分からない話ですね。本編はココで終了次あたりはモブキャラなどを、かけたらなーって考えています。

閑話

「なんなんだろうねえ」

アローズはいつもと違うお客様が牢屋の前に来ていた。しかもそのお客様っていうのが、これまた珍しい聖女隊所属ケリー・ボールドウィンだった。

しかも会いに来たというその内容というのが、男のはなしであるのだから、笑うのを堪えるこの腹筋が痛い・・・。

「将軍殿、自分はどうすればよいだろうか・・・」

「結婚すりゃイーじゃん」

「そう簡単にできる分けなからう!!!」

「でも好きだったんだろ？ルジオ君のこと」

そう、彼女は片思いしていたルジオとお見合い結婚する予定なのだ。

「・・・でも」

「ミケーレ様？」

「・・・」

他人の恋の悩みを聞くほど面白くないものはないねー

（でも、ま、ケリーはこんな性格だから友達は居ないし、マリアンジェラは向こうに嫁いだからねー）心の師匠って言っていたインファも、マリアンジェラの成長を見守った後、今の地位や契約を破棄して、修行に出て行っちゃったしねー・・・

「ルジオ君はエルシオンちゃんに似て真面目で少々天然だから、きつとまた好きになれるって」

「それで・・・すよね」

お？

「分かりました、将軍。自分は自分の道に素直に真っ直ぐに勝負しようと思います!!ご口授ありがとうございます!!」

「え・・・別になんか言った覚えはないけど、まーいっか」

面会の時間は終了だと看守が言う。

名残惜しそうにケリーは歩いていく、最期扉を閉める前に振り向いた。

「將軍、將軍に幸あらんことを！」

「……ありがとう」

……ちょうど明日の朝処刑なんだけどね……？最期の面会者がケリーってのも、悪くないねえ

「ふ」

処刑当日まで、誰にも言うなって頼んでいたから知らないのも無理ないけど……

「……」

……朝か？

光が目を通して痛い……、久振りにぐっすり眠ったなあ……。

「將軍、お出てください」

鎖を引っ張られる。

戦争が終わってから久振りの外の光は、眩しいな……見世物のように人々に見られながら死ぬってのも悪くないね……。

「將軍！」

声のほうを向くと、ハレル君が居た。

「なんで処刑場なんかに！」

円の中に入ろうとしたから、看守にぼうつきれで殴り飛ばされていた。

あーららあ

「・・・戦争の時代が終わったからさ、あたしゃ戦争ありきのと
きでなきゃ、外に出られない身、永遠に・・・」

「なんで、処刑・・・なんですかあ！」

「自分で望んだんだ」

巨人族は恐ろしいほど長生きする、ハーフだけど、巨人の血を色濃く受けづいた自分自身もきつと人よりは三倍は長生きするだろう、それまでずっと埃だらけの牢屋で生きていろだなんて、鬼かお前等「あたしゃ死を望んでるんだ」

聖女隊を滅ぼしたときから。

本当はずっと、ずっと・・・後悔していたんだ。

「將軍！」

ケリーの声がした。

おおおお、これはまた、感動的なシーンだね

処刑方法も自分で指定した。やっぱ、美しく死にたいからね・・・
ギロチンですっぱーんだ。

「あの二人が暴れないうちに、さっさと殺っちゃってー」

穴に首を突っ込んで、準備おっけー

「処刑を執行する！」

「そんな、駄目だ、やめてください！」

ハレル君が看守を押しつけは駆け寄ってきた。

「將軍！！！」

差し伸ばされた手は、届かないわ・・・。

「その執行待った！！！」

・・・ピタ・・・ギロチンの刃が、あと三十センチというところで止まった。

「あん？」

顔をずらし見上げると、そこに見えるわテセヴル副將軍

「王女代理、報告する！」

テセヴルは巻物を広げ皆に聞こえるように大声を上げた。

「アーロズ女將軍は過去に大きな大罪を犯したが、何年にも渡りその身を捧げわが国のために尽力を尽くしてきた。故に、その大きな罪を許す！！」

・・・は？

許す？

え？

「・・・まじで？」

ギロチンから外され、手首をしめていた鎖も外された。

「將軍！」

ハレル君が抱きつく。

「・・・貴殿の罪は許された・・・お帰りなさい將軍」

「テセヴル君、あたしが憎くないのかね？」

「罪を憎んで人を憎まず、ですよ」

何だこのいい人。

「將軍！なんでそういうことを黙っていたのじゃ！自分のほうが先に死にそうじゃったわ！！」

「あらそー」

「將軍！！」

おやおや、どうやらあたしや

「まだまだこれからみたいさね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3099n/>

影姫の暴走奇譚

2011年3月2日15時40分発行